
フィレンジア = セラ大陸史 ~ 暁を乞う者 ~

とおこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フィレンジアⅡセラ大陸史Ⅰ暁を乞う者Ⅰ

【Nコード】

N6529M

【作者名】

とおこ

【あらすじ】

全盛の女王クレアツァⅡディアーナの死後、永和王家は没落の道を辿った。やがて4大公家は独立し、王家は大陸の中心にある王都シャーンとその近隣を治めるのみとなった。4大公家は領土拡張のために争いを繰り返した。

登場人物紹介（ネタバレあり）

アシュタルテ

フィレンジアⅡセラの世界で信じられている戦いと豊穡を司る暁の女神の名。かつての大陸全盛の女王クレアツアⅡディアーナの別称としても用いられる。

予言者シルベスタⅡウツディーンにより霸王となる者はこのアシュタルテを手に入れると言われる。女王の物語融合し、女王の生まれ変わりこそがアシュタルテであるとも伝えられる。女王は青の瞳、金の髪をしていたと伝えられており、そのことからルクレツィアこそがアシュタルテの化身とされる。

アヤ（19歳）

シエラの乳母リンゼの娘でシエラ付の侍女。母の身分が低かったことと正妻の実家の圧力により認知されていないが父はウルスラ。シエラにとっては侍女というより姉的な存在でもある。エーベルトとウルスラの命により間者としても働いていた。

イズⅡイリア（40歳）

永和王家最後の王でルクレツィアの父。女王の生まれ変わり、アシユタルテと称えられる娘を持ちながら、決して自ら彼女に会おうとはしなかった。ジャルジェによるシャーン侵攻により自害。その際、シルベスタの描いた予言の絵は燃やされることになる。

ウィラⅡラスティニア（52歳）

ラスティニア（南）大公。ウルスラとは年も近く同じ時期に学術院で学んだとされる。賢大公であり、民衆からも慕われている。

ウルスラⅡエランヴィア（49歳）

元永和の大宰相でエーベルトが大宰相になって以後は政治の場から引き、学術院の院長として若者達の指導にあたる。アヤとルカの父親。切れ者として名高く、シャーン陥落後はジャルジェの申し入れにより大臣として政治の場の戻ることになる。エルザの死後学術院の生徒としてシエラを預かり教育を施す。シエラにとっては師でありながら父とも言える存在。

エーベルト・ウッデーン（40歳）

予言者シルベスタ・ウッディーンの末裔で永和の大宰相。シエラの父親。エルザの死後は特にシエラに関わることを避け、彼の命により彼女はアシュタルテ神殿の巫女として外界から引き離されることになる。ジャルジェによるシャーン侵攻の際には永和軍の総司令官として戦い、クセルクシア軍の捕虜となり処刑される。

娘シエラに対し、王女クレツィアの身代わりとしてジャルジェの下へ行けという命令を残す。

エルヴィラ・イシス（50歳）

イシス（西）大公。ラステイニア大公ウィラと同じくウルスラと同時期にシャーン学術院で学ぶ。女傑とも言われ夫を持つこともなく、イシス発展の為に尽力する。

エルザ

最後の永和王イズ・イリアの妹。しかしながら王家の策略によりイズ・イリアとは別腹の母を持つ王女として育てられる。大宰相エーベルト・ウッデーンの妻となりシエラを生む。若くして病死してしまったことにより、シエラの子供時代はあまりに早く終わることになる。

エレオノーレ（48歳）

前リディア大公の正妃でシエラの母エルザとは従姉妹にあたる。政

略結婚の道具としてリディア大公ノニアルに嫁ぐが、2年前のガイのクーデターのため、夫ノニアルともども離宮に監禁状態となる。クーデター以降病に寝たきりとなった夫に代わり密かにガイが静粛していった人材を結集させ、転覆を狙っていた。

カヤ（34歳）

リディア公子ガイの側室として彼の寵愛を一心に受けているものの、元は彼の父であるリディア大公ノニアルの側室で、ガイはノニアルから彼女を奪うためにクーデターを起こした。彼女の浪費がりディアを傾かせたとも言われる。

カリヤオ（23歳）

リディア公子ガイのクーデターにより大臣の座を奪われたカル口の息子。ガイの失脚を狙うエレオノーレに仕えつつ、ガイの側近になります。

ガイ＝エリヤ＝リディア（30歳）

リディア（北）大公。前リディア大公の唯一の子供であるが正妃エレオノーレから生まれたわけではない。父親の側室であるカヤを手にするためにクーデターを起こし、両親を離宮に幽閉、大公位に就く。カヤに望まれるがままに贅の限りを尽くす暴君。

クレアツア＝ディアーナ（クレアツア＝シャトリア）

この物語の400年前の女王。わずか16歳にしてシャトリア王家の女王となり、5年という年月をかけ大陸を統一し永和王家の始祖となる。その治世は以後脈々と語り継がれ、安寧の世の代名詞となる。

戦いと豊穡の女神アシュタルテの名は彼女の二つ名でもある。

ザキ＝リミット（24歳）

ジャルジェの幼馴染みでクセルクシアの近衛長官。ジャルジェとともにシャーンに赴き、彼の命令でルクレツィアの身代わりとなったシエラを発見する。

サラヤ

永和王イズ・イリアの正妃でルクレツィアの母親。イズ・イリアとの結婚は彼女が望んだことではなくその為に精神を病み、王宮から飛び降り自害する。

ジャルジェ・フォン・クセルクシア（23歳）

クセルクシア（東）大公。暴君であった父大公を廃し若干22歳で大公位に就く。若いながらも優れた政治手腕を持ち、一時的に不安定となった国を平定する。そして、名ばかりの王家として存続する永和王家に代わるため、王都シャーンへの侵攻を決意する。側室を囲う父、別の男を通わせる母という複雑な親子関係のため、女性に対し一種の不信感を持っている。

シエラ・ウッディーン（16歳）

この物語のヒロインの1人。

永和の大宰相エーベルト・ウッディーンの1人娘、母は永和王イズ・イリアの義妹にあたるエルザ。8歳の時に母が病死し、以降学院のウルスラの元で育てられるが、14歳の時に父エーベルトの命令によりアシユタルテ神殿の巫女として立つ。

緋の瞳、亜麻色の髪。アシユタルテの化身とされるルクレツィアと同日の生まれで、瞳と髪の色を除いては瓜二つである。

シルベスタ・ウッディーン

全盛の女王クレアツ・ディアーナの片腕の大宰相でエーベルトやシエラの祖先。元はシャーン一帯を治めていた王で、自らの領土を明け渡しクレアツアに忠誠を誓った。予言者としての能力があると

され、乱世の救世主としてアシュタルテが霸王の元に現れることを予言しアシュタルテを具現化した絵を残す。この予言とクレアツアの治世が融合し、1つの伝説として人々に浸透していった。

ディアーナ

フィレンジア＝セラの世界で信じられていた戦いを司る月の女神の名。現在ではほとんど口にされることはなく、代わってアシュタルテが戦いの女神の名として知られる。

ネイサ（29歳）

元は娼婦で位こそ持っていないもののジャルジェの唯一の愛妾とされ、彼のシャーン侵攻に帯同する。

ノニアール（50歳）

リディア（北）の前大公。側室であったカヤを息子のガイに奪われる際、毒を盛られ、寝たきりの生活となる。以来、正妃であるエレオノーレとともに宮殿を追いやられ、離宮での生活を強いられる。

ヤーフェ＝クリスタ（62歳）

クセルクシアの老将。

ジャルジェの父の代から大公家に仕える生粋の軍人で、彼の言葉にはさすがのジャルジェも逆らえない。

ユリア

シエラの2代前のアシュタルテ神殿の巫女姫で、永和王イズ＝イリアの叔母にあたる。本来巫女姫は結婚適齢期を迎えるとともに次代へと受け継がれるものであるが、彼女は頑なに巫女姫の地位にこだわり、神殿内で息を引き取ることになる。

ルカ（19歳）

ウルスラの娘で母は正妻のエンジュ。エンジュがルクレツィアの乳母になったことに伴い幼少よりルクレツィアに仕える。アヤとは義理の姉妹にあたる。

ルクレツィア（16歳）

この物語のヒロインの1人。

永和王イズ・イリアの1人娘、母は王妃サラヤ。病弱のため王宮内から一度も外に出ることなく育てられる。

青の瞳、金の髪。シスベスタの描いた絵と同様の姿形をしていることからアシュタルテの化身とされる。

ルトザ・ウツディーン

エーベルトの父でシェラの祖父。ウルスラの前の永和の大宰相にあたる。エーベルトがエルザとの結婚をした表面上の責任を取って大宰相位を引き、エーベルトの母である妻を大切にしていたものの、その視線の先には常に別の女性の姿があった。

登場人物紹介（ネタバレあり）（後書き）

8 / 7 ザキと王様の年齢変更しました。さすがに年の差大きすぎるかとはたと思いました。

P r o l o g u e 暁を乞う者（前書き）

性的な描写ではなく残酷な描写の方でR15にチェックさせてもらいました。

そういう描写が苦手な方はご注意ください。

Prologue 暁を乞う者

それらの絵は代々の王に受け継がれた。

ただの絵であれば何処か、歴史のうねりの中で朽ち果てるだけのものだった。

が、彼が描いたものであること、そしてともに遺された彼の言葉こそが絵の存在を高めた。

独善的な言葉は、彼が吐き出して後、長い月日経つにつれ伝説とまでに高められた。

時折後悔することがあるよ。

私はこの平和と引き換えに多くのものを失ったのではないかと。

私はこの手こそを握るべきではなかったのかと。

何故それを欲する力がなかったのだろうか、と。

『暁を手にする者、永和を導く覇とならん』

序章

夜明け前、地平線が朱に染まろうとする頃、高台にたたずんだ女は背後に二人の従者を携え、真っ直ぐに目の前の男を見据えた。

対して男の背後に100を超える騎馬兵が控えていた。男が一言命じれば、例え相手に戦う意思がなくなると彼らは男の配下として女と従者を血祭りにしていただろう。実際、男に仕える者達はそれを望んでいた。

女さえ討たれてくれれば、この戦争は男の勝利によって終わるのだから。

戦局は熾烈を極めていた。

長く続く戦争に民は疲弊していた。

女が男に会いたいと呼びかけてきたのは二日ほど前のことだった。

『私がここに赴いた意味が分かるか』

最初に口を開いたのは女の方だった。

長い髪の間揺れる朱色の耳飾りが印象的で視線がついそちらに向いてしまう。年は20を越えたばかり。少女とは言えないまでも、一つの国を背負うにはあまりに細い肩をしている。にも係わらずその視線だけが想像させる弱さを裏切っていた。

1つの発言が命取りになると知りながらも、女はひるむことはなかった。

『私は戦争を終わらせたい』

男の国と、女の国と、最後に残った二つの柱は拮抗しており、どちらかが倒れるまで戦い続けることは決して得策ではないと、女だけでなく男も分かっていた。勝利を得たところで、敗者の領地を奪ったところで、それが幾万の屍の上であるのならば意味はない。

この戦争は大儀の元に始まった。

戦争である以上は勝敗はつき物で、決して大儀のみで論じられるものではなかったが、それでも、見据えなければならぬのは未来だ

った。

賢い2人は知っていた。

最後の強者の2人になった時、そして互いの強さを知った時、どちらかが幕を引かなければならないのだと。

引き金を引いたのは女の方だった。

朱に染まった地平線が暁闇の空を浸食していく。冷たい風に女の髪が舞い上がり、耳飾りが露になる。

女は笑った。

彼女の鋭利な視線は、彼女自身と男を残酷なまでに客観的に比較し、最善を定めていた。彼女の脳裏には彼女も彼女の国の利権もなかった。彼女にあつたのはただ、この大陸の人柱になるという、覚悟だけだった。

『故に、シルベスタウツディーン、我が国に降伏し、私に仕えよ。代わりに私は、永和の世をそなたに見せてやろう。約束を、する』

男も、背後の従者達も息を飲んだ。

髪が暁の光に照らされる女の姿は言葉を失うほどに美しかった。

*

全盛の女王クレアツァーディアーナの死後、永和王家はゆつくりと傾いていった。民衆からの支持を一心に受けた彼女に子がなく、彼女から辿ればかなり遠い血縁でしかない男が次代を引きついたこと

も大きな理由だった。

彼女に忠誠を誓っていた4つの大公家は次第に王家から離れていき、形式こそ忠誠を誓っていたものの、それぞれが自身の意思をもって自らの領地を統べ、王家の影響力は大陸の中心である王都シャーンとその近隣のみに制限された。4大公家は王の戒めを無視し、互いの領土を拡張するため、争いを繰り返した。力のなかった王は彼らの争いに介入することもなかったばかりか、自らの保身のために自身の領地を閉じ、領地を越える往来を禁じた。

王都から他国の商人達は消え、城下はかつてのにぎわいを失った。偉大なる女王の下、長きに渡る戦乱を終えた大陸は、彼女の死後、わずか10年ほどにして再び戦乱の世へと戻った。

彼は、絵を書いた。

自ら先頭に立つて大陸を1つにまとめ上げた戦いの女神。そしてつかみ取った平和を守り続けた豊穡の女神。

目を閉じればいつも思い出す。

暁の輝きの中、長い髪を金色に染め上げた、彼が唯一選んだ主君の姿を。

『我が、女神よ…』

そして同時に思い出さずにはいられない自身の感情に涙する。

彼女は美しかった。

ひたすらに美しかった不可触の女神は、言葉通り、この大陸の人柱になった。

（私はこの国の女王だ、唯一の者を選ぶわけにはいかぬ）

（女王）

（時折後悔することがあるよ。あの日）

（私はこの平和と引き換えに、多くのものを失ったのではないかと）

あの日、別の選択肢があつたのではないかと。そう言つて彼女は苦しげに笑い、彼を見つめた。

彼は何かに憑かれたように絵筆を握り続けた。

この1枚を書き終えた時こそが、自身の命の終わりと定めていた。未練などなかった。

傾いていくこの国を憂いながら見つめていかなばならぬことこそが彼の苦しみだった。

或いは。

或いは、彼こそが錦の御旗を上げることでもできたのかもしれない。が、彼はそれを為そうとしなかった。彼の部下達の中にはそれを望んでいた者も多かったが、彼はそのすべての進言を絶った。

あの日、彼は霸王となる道を捨てた。

彼は『知つて』いた。そして、目の当たりにした時、それが『未来』なのだと確信した。

絵を描き終えた日、彼は短剣で自らの胸を引き裂いた。

遺された絵は未来であり、欲望でもあった。未練などなかった。けれど、彼はあの日の自らの選択を咎めずにはいらなかった。

絵は、代々の王に受け継がれた。

ただの絵であれば何処かで朽ち果てるだけのものだった。

が、彼が描いたものであることと、ともに遺された彼の言葉こそが絵の存在を高めた。

独善的な言葉は、彼が吐き出して後、長い月日が経つにつれ、伝説とまでに高められた。

断章 胎動

全盛の女王クレアツア「ディアーナは広大な大陸を治めるため、かつて戦い敗れた者達にかつての領地を返し、大公の地位を与えた。

東にクセルクシア。

西にイシス。

南にラスティニア。

北にリディア。

その他、大公領ほどではないが街1つほどを領地として与え自治権を認めた事例もあったが、この大公家と女王を戴く永和王家により大陸は支配されることとなった。

彼女が制するより前は8の王によって大陸は治められていた。女王の出自であるシャトリア家と4大公家、戦争の過程で一族すべてを失った2王家、そして、ウツディーン家であった。

本来、女王の最後の敵となったウツディーン家の当主、シルベスタ「ウツディーンこそが大公として名を連ねるべきであったものの、シルベスタはすべての領地を王家に返し、永和王家に連なった。彼の忠誠に対し女王が与えたのは大宰相の位であった。

戦争において最後まで駒を進めたシルベスタではあったが、彼自身は軍人というよりも、文官としての才能の方が突出していた。

そして、彼にはもう1つの才能があった。

寧ろその能力こそがウツディーンとシルベスタの名を高めていた。

故に、彼の言葉は予言となり、400年の時を越えた。

400年の後、大陸は転換期を迎えようとしていた。

それは、東のクセルクシアの代替わりの時には既に確信されていた。強力な武将であったものの、先代のクセルクシア大公は好戦家であり、無闇に他の大公領へと攻め込んでいった。

イシス、ラスティニア、リディアともに広大な領地と領民を持っており、降伏するとまではいかなかったが、徐々に大陸はクセルクシアに染められていった。

その先代のクセルクシア大公を排除したのが彼の息子であるジャルジェ・フォン・クセルクシアであった。度重なる戦争に疲弊する領民を見かねて立った彼は、すぐさま3大公家と和議を結び、国の建て直しに取り掛かった。その際、削るべきものは削るという方針のもと、クセルクシアから3大公家に対して奪い取った領地の大半が返還され、大陸は平穏を取り戻したようにも見えた。

が、西のイシスと南のラスティニアはジャルジェの行動を、ただの代替わりとしてのみでは捉えなかった。そして、永和王家に仕える大宰相、エーベルト・ウッディーンもまた、同様な視点をもってジャルジェの動きを注視していた。

それが3年前のことだ。

そして1年前、クセルクシアと同様、北のリディアにおいても代替わりが起こった。やはり息子によるクーデターによるものであったが、クセルクシアとは随分毛色が変わっていた。

東と北に若き新大公が立ち、大陸は大きな転換点を迎えた。

4大公家の間に緊張が走った。

その時、王都シャーンに君臨する永和王家と言えば、相変わらず国境を閉ざし、細々と存在していた。4大公家を従える者といっても、王に大公家を治める力はなく、諍いから逃げるように閉ざされた世界で身をちごませていた。鎖国から既に数百年が経った王都シャーンは商人の往来もなく、ただただ終焉へと向かうためにこそ存在していた。

力さえもなく、誇りさえもなく、ただ、名とかつての栄光のみが彼らの元にあった。

繰り返される戦争とつかの間の急速に民衆は疲弊していた。せつかく春植えた小麦が踏み躪られる度、買い付けした商品が国境で没収される度、男手が兵士として取られる度、怪我人の救護に駆り出さ

れる度。民衆は過去に想いを馳せ、かの伝説に縋った。この大陸の知る平和とは大陸の中央であるシャーンにクレアツァディアーナが立った、あの日々のことを言う。

かの女王は死んだ。

が、かの女王は遺言を残した。

そして常に女王に仕えた予言者は、絵を描いた。

（シルベスタ）

（いつか私は、再びこの地に生まれない）

（今度生まれる時はこの大陸が平和であることを願ってる）

（けれど、もし、再び、戦争が繰り返されるのならば）

（私は）

『暁を手にする者、永和を導く覇とならん』

欲したのは力だった。

未来を見るのではなくただ、戦う力が欲しかった。

統べる力が欲しかった。

3年間、国政に注力したジャルジエはついに決断を下した。

3万の兵を従えた彼の向かう先は、南でもなく、北でもなく、西でもなく、中央だった。

シルベスタの予言は大陸のすべてに浸食していた。

彼の予言したのは、かの女王の再現ではなく、彼の女王の面影を宿した戦女神を従えた霸王が大陸を制し、永和を導くと言う物語だった。

女神の名を、『アシユタルテ』と言った。暁の名を冠する戦いと豊穡の女神の名は、そのままクレアツァーディアーナの二つ名でもあった。

或いは、転換期は16年前にあつたのかもしれない。

16年前、同じ日、2人の少女がこの大陸に生を受けた。

一人は金の髪、青の瞳。

一人は亜麻色の髪、緋の瞳。

異なる色彩をして、同じ顔立ちをした少女達は、かの予言者の描いた絵の女神、そのものだった。

1章 アシユタルテ1

大宰相と、ひどく幸せそうな笑みを浮かべたアシユタルテの巫女は、12段の階段の上、決してそこから下の俗世にまみれようとするとはなく、静かに言葉を落とした。

『私は、喜んでいいますよ』

『巫女様：！』

『ルトザ』

私にもその、強さがあればよかったと、心から思います。

そう告げた巫女姫の言葉が、彼が聞いた彼女の最後の声だった。

とても安らかな死顔のまま逝ったという巫女姫、かつてユリア・エランヴィアと呼ばれていた女性は、それから1年ほどして世を去った。1年の間、一度として彼に会おうとしなかった、彼が会おうとしてもそれは決してかなわなかっただろう巫女姫は、遺言として次の巫女姫として彼の孫に当たる少女を宛てるよう残した。

その遺言を息子から聞いた彼は、ひどく穏やかな笑みを浮かべ、いつかその遺言が果たされるだろうことを息子の苦しい双眸から読み取った。

彼は、すべてを納得したように、巫女姫が死んだ半年後、世を去った。それからしばらくして、彼が仕えた王も死に。

そして、跪くしかなかった彼らの時代は終わりを告げた。

「貴方は私を恨みますか」

男は静かに問うた。闇色の長衣をゆったりと着こなした男は裾をほんの少しつかみながら、窓枠の側に立っている。

その近くにあるテーブルには2つのグラスとワインが置かれ、テーブルの向こうの椅子に、もう1人、男が座っている。

向こう側の男もまた、長衣を纏っている。ただ、異なるのは。彼が纏っている衣色は濃い紅で、色彩の違いが彼らの地位をそのまま示している。

表に立つ者と奥に控える者。二人の間にある圧倒的な差は、この瞬間まで埋められることはなかった。

闇色の衣の男がその優秀な能力をもつて敵に回れば、この地位の差は容易くうめられ、それどころか今頃、自身の命さえもなかっただろうと濃い紅の衣の男は思う。

決して自身の能力をさげずんでいるわけではない。彼は自身の平凡さと、向かい合う男の優秀さを知っている。

が、闇色の衣の男は、その優秀な頭脳をただ、守るためだけに使った。

18年前のあの日、ただの一度裏切った日を除いては。

決して何かの策略を実行したのではない。寧ろ、彼の優秀な頭脳からは考えられないほどの不器用さで奪い、禁忌を犯した。

恨むというのはおそらくその時のことを指しているのだろう。濃い紅の衣の男はゆっくりと意識を18年前に巻き戻しながら、苦笑した。

恨んでいない、わけではない。が、同時に、よかったのだとも思う。あの日から18年、歩んできた道は決して楽しいものではなかったけれど、これからの末路も、自身の望むものではなかったけれど、寧ろ、不幸としか言えないものだった、けれど。

ほんの少しだけ、運命を変えられたのかもしれないと、子気味よくも思う。

「あの時のルトザの顔ったらなかったな」
思わず笑みがこぼれた。

「そうでしたか」

「ああ、あのしかめっ面の男が、大宰相の地位を降りて謹慎すると言ってきたんだ。私も父、先代の王も、あの時はどれだけ驚いたことか」

「父は、王家に絶対服従の人でしたから」

「確かにそんな男ではあったが」

面白かったのはルトザがその後こう言ったからだ、濃い紅の衣を着た男は、本当に楽しそうに笑いながら言を告ぐ。

『王、王子、どうかお許しください。この責はどうか、…どうか、私のみのものとお収めくださいますよう』

大柄の男が身を縮めながらひたすら頭を垂れていた。不肖の息子を責めながらも庇おうとするのは実に父親らしい行動だったけれど、双眸は雄弁に物語っていた。

ルトザは恐縮し、また恐れおののきながらも、同時に、満足げな表情をしていた。まるで何かから解放されたような姿はまるで、不肖と告げる息子を誇っているようでもあった。

彼は少しも迷うことなく大宰相の地位を下り、後任としてウルスラⅡエランヴィアが立った。彼が不肖の息子と言った彼の息子、今闇色の衣を纏ってこの場に存在するウルスラの後の大宰相、エーベルトⅡウッディーンは何の責任も取らされることなく王宮に残り、王家の忠実な僕であり続けた。彼がたった一つ犯した罪は、18年前、本来濃い紅の衣の男、あの時はまだ王子であった永和王イズⅡイリアの子を産むべく宿命を背負った彼の実の妹、エルザを自身の妻としたことだった。

私はエーベルト様が好きですと迷いのない瞳とともに言い切った17歳の少女は、自らの抱えた宿命を放り出し、エーベルトの胸へと飛び込んだ。

それを知った時、イズⅡイリアは怒りもしたが、ほっともしたのだ。体裁を繕ったか側室腹の王女として育てられたエルザではあったが、実際には二人は同じ母を持つ兄妹だった。妹と知ってなお恋愛感情を持つのはそれこそ禁忌だ。けれど、『予言』が、彼が逃げ出すことを許さなかった。

「恨んでなどおらんよ、サラヤを不幸にしまったことは悔やまれるがね。そして」

「王」

「ルクレツィアもことも」

18年前の感情、そして、その後の辿った年月を思い起こしながら、そこにエーベルトの問うような感情がないことを確認し、イズ・イリアは断言した。

恨んではない。彼は、実の妹を、子を産むためだけの道具にはできなかった。

そう、決して恨んではない、18年前のことは。ただ、代わりに与えられた宿命に少し、途方に暮れたくなるだけだ。

「ああ、お前は幸せだったか、エーベルト」

苦い想いを隠すようにイズ・イリアは話題をエーベルトへと振る。すると、エーベルトもまた、言いようのない笑みを浮かべた。

幸せ、とは言い切れないだろう、彼も、また。

「幸せでしたよ、私は」

「エーベルト」

「妻に先立たれ、娘を、手放すしかなかったけれど、それでも、幸せだったですよ、私は」

けれど、エーベルトは何かをこらえるような表情をした後、清々としたような表情を浮かべた。そして、一つ呼吸をした後、言を継いだ。

「これからのことは私が決めるものではありませんが」

「あ……！」

「私は、死路へと向かうのみです」

窓枠の位置から一步を踏み出したエーベルトはテーブルへと寄り、自身の飲みかけのグラスを取った。もう一度こうやって、ゆっくりと酒を飲む暇などないだろう。そう思うと、喉を潤す一滴がどうしようもなく心地よいものに思える。

優雅さなどない、一気におり、空になったグラスをテーブルへと戻し、ちらりと瓶の残りを確認する。まだ少し残っている。あと、2杯か3杯くらいならば、注げるだろうか。

「これは最期の杯として取っておきましょうか」

「ああ」

エーベルトはわざとらしく明るい声を出し、その場から退出しようとする。

本当に1杯だけだと思っていたのに、その1杯が随分と長話になってしまった。本当に、やらなければならないことがたくさんあるのだから、早くそちらに行かなければならない。まさか王の寢所にやってきていることなど知らない大臣達は、必死にエーベルトを探しているだろう。

「行くのか、大宰相エーベルト」ウッデイン」

死路へと、とは言わない。代わりに大宰相という、彼に与えられた名を呼び、何ら感情を宿さないエーベルトの行く道を想像する。

彼は強い。

こんな国などさつさと裏切って、どこぞの大公の元に行っていれば、或いは、彼が王家を乗っ取るくらいのことをしていれば、また別の道があつたのではないかと思う。

イズ・イリアは平凡で、エーベルトがいなければ何もできない名ばかりの王だ。が、エーベルトならば或いは、霸王の場所にまで上りつめることができたかもしれない。きっとそうだろう。が、そうしなかったのが彼らしい。

否、彼もまた、所詮は永和の人間に過ぎないということだろうか、予言者の。

「王の、死に場所だけは守ります」

「頼む」

「その、絵は…？」

「燃やしておこう、それがお前の望みならば」

託すことが望みというのならば。

ただ、宿命が与えるがままの生しか送れなかった自身の最後の悪あがきでもあると思い、イズ＝イリアは笑んだ。

本当に、誰もが愚かで、不器用なのだ。

だから、この国は滅びるのだ。

エーベルトは去っていき、イズ＝イリアはそれを見送ることもせず、絵を、見上げる。

なんとも愚かなことだ。

こんな絵に400年という年月が奪われてきたのだ。崇め奉ること
でしか未来を創ることはできなかったのだ。

どうしようもなく、愚かな。

額縁の中の『女神』と、思い浮かんだ『少女達』の姿にイズ＝イリアもまた、満足げな表情を浮かべる。まるで18年、ルトザがそう
したように。

実際に満足だった。エーベルトもきつと、そうだろう。

ほんの少しだけ捻じ曲がった宿命の行く先をできることなら見てみたいとも思ったが、それはかなわぬ願いと嫌というほどに知っているエーベルトはそれを望み、イズ＝イリアは受け入れた。

『女神』はイズ＝イリアを見下ろしていた。慈悲深くもあるその表情が『少女』へと重なり、緩く首を振った。

『幸せでしたよ、私は』

エーベルトの声が思い出された。

「お前は言うのだろうな」

イズ＝イリアは『女神』を見上げたまま、嘲った。

そう、18年前、彼女がひどく幸せそうに、挑むように、告げたように。

『私の未来は私が決めます』

「これからの未来を決めるのは子供達です、と」

二人が杯を交わす2時間ほど前、執務室にいたエーベルトの元にその一報は入った。

『クセルクシア軍2万、東の関所を破って、永和王領に侵攻した』
2日後にはこの王都、シャーンにまで届くだろう。
万に一つの勝ち目はなかった。

1章 アシユタルテ2

10年前、大臣に連れられ初めて王都シャーンを訪れたクセルクシア公子、現在は大公であるジャルジェは、シャーン王宮の大広間を飾る絵を、食い入るように見上げた。

王宮にやってきた者は皆見上げずにはいられないその絵は、かつてこの大陸を統一へと導いた女王を描いたといわれるものだった。

全盛の女王、クレアツァーディアーナ、またの名を、アシユタルテ。この大陸で信じられている暁の名を冠する戦いと豊穡の女神の化身とも言われた彼女は、この大陸を統一し、永和という今から思えば皮肉としか言えない王朝を打ちたて、若くして死んだ。

彼女が死んだ、その時から永和王家はゆっくりと没落の道を歩み始めた。

もしかしたら彼女はそれを、予期していたのかもしれない。だからこそ、彼女に仕えた最初の大宰相であり予言者でもあったシルベスタ・ウツデーンは絵を、描いたのかもしれない。

王宮に飾られる絵はその、シルベスタが描いた女王の自画像なのだという。彼は絵とともに、言葉を残した。

予言者が残した言葉を、予言と言った。

『暁を手にする者、永和を導く覇とならん』

『暁』、すなわち、暁の女神たるアシユタルテ、その化身と言われ

たクレアツァーディアーナ。彼女の転生と、彼女をいただく覇王の物語が、予言として400年の時を超えた。

一度として違えられたことのないという予言者の言葉は、再び戦乱の世へと逆戻りした大陸の民にとって大きな拠り所だった。

金の髪と青の瞳が印象的な女だった。暁の女神の化身と言われながら、寧ろ月の女神のような姿をした女、クレアツァーディアーナの姿にも、ジャルジェの心を揺らすものはなかった。

馬鹿馬鹿しい、或いは、組み敷いて喘がせてみれば面白いかもしれない、そのくらいの感慨しかない。かつてはそうでなかったかもしれないが、今の彼、多くのものを失いながら力を手にしてきた彼にはただの、おとぎ話でしかなかった。

だが、そのおとぎ話には価値があった。

暁を手にする者が覇王になる。そう、伝説は言う。

そして、まるでジェルジェこそが覇王に相応しいと言うように、同じ時代に彼女は生まれた。

彼女が生まれ変わりなのか、或いはただの偶然か、そんなものはどちらでもいい。ただ、金の髪と青の瞳、クレアツァーディアーナと同じ色彩を再びこの大陸は手にした。

400年一度もこの大陸に同じ色彩を持った少女はいなかったというが、それを素直に信じる気はしない。が、そう信じている者達がいるのだからそれはそれで都合がいい。

ジャルジェは1人、目を閉じて立ち尽くす。

浮かんだのは金切り声を上げた母であり、後宮に幾人も女を侍らせた父だった。

繰り返された戦いの日々だった。

所詮自分はあの2人の子だと思う。

同じ道をゆく。女を利用し、戦場を駆ける。

異なるのはただ、自らの名に覇王という名を冠することだろう。

「ジャルジエ様」

名を呼ばれる。同時に天幕の入口が開けられる。

開けられた入口の隙間から金の髪が見え、一瞬目を見張る。

が、すぐにそれは収められる。

彼女の髪は本来、金ではない。戯れにジャルジエが、染粉を振り掛けさせたのに過ぎない。よく見ればまばらな、本来の茶の色彩が見て取れる。

「お前か」

発した声は落胆を含んでいたかもしれない。

先ほどまで、あの、シャーンで見た絵のことを思い出していたからかもしれない。天幕が開いた時、女神が現れたような錯覚を起こしたのだ。

下らない。

或いは自分もまだ、ほんの少しくらいは夢を見たいのかもしれない。

「どうなさったの、怖い顔」

密やかな笑みを浮かべるこの女は、ジャルジエは今のところ、一番気に入っている妾だった。

メサの娼館で見つけてきた年上のこの女は、彼を満足させるに十分な肢体を持ち、けれど、大それた望みを持たない、都合のいい存在だった。

その名を与える存在はただ一人と決めている。

この世界で、ジャルジエの野望に最も役に立つべき存在。

彼の女神の生まれ変わりだという少女を。

そのくらの見返りがなくば、名など鬱陶しいだけだ。

クセルクシア大公の娼館通いはその筋では有名な話ではあったが、彼の後宮には未だ一人とて妃はおらず、後宮内に住まわされているのも目の前の女、ただ一人だった。

「ネイサ」

ジャルジエがマントに手を掛けようとすると、その寸前にネイサ、と呼ばれた女が手をのばす。

「外しますわ」

白い指先が、止め具を外す。

そして、マントに手を掛けた時、血の匂いが鼻をかすめる。

「…幾人、殺されました」

抑揚のない問いかけにジャルジエは鼻を鳴らす。

彼女とて解を期待しているわけではないだろうし、ジャルジエとて、数まで覚えているはずもない。

多くを殺した。それら多くの屍の上にしか、この大陸は手にできない。

「ここにも血が」

「お前はただ、この熱を収めるだけでいい」

ジャルジエの首筋の血の跡をたどろうとしたネイサの指先を、彼は自身の唇へと宛がう。

「ジャルジエ様」

ネイサの双眸に擲掄するような、けれど楽しげな光が灯る。

煽るように彼女は言った。

「我が、王」

この大陸の覇者にのみ与えられる名を、まるでもう、手にしたかのように。

ジャルジエは早急にネイサを敷布へと押し倒す。

愛、ではない。

言葉の通り、戦場で高ぶった身体を沈めただけだ。

そうでなければ、この戦場まで彼女を伴ってきた意味がない。

ジャルジエは何処かで、冷やかなものを抱えながら、ネイサの奉仕を受けていく。

それで、よかった。

父のような女狂いになるつもりも、母のような男に縋らなければ生きていけないような無様さを晒すつもりもなかった。

あと一つの戦いで、シャーン王宮へと昇りつめるだろう。

再び力ある王が、自身こそがシャーンに君臨し、この大陸を統べるのだ。400年前の再来を目前に思いつつ彼は、目の前の女の身体に意識を移していく。

彼はまだ、知らなかった。

父は愚かで、母は弱かった、ただそれだけなのだと思っていた。

神殿の最奥で少女は一人、祈りを捧げていた。

小さな肩が小刻みにふるえている。

できることならば、今すぐにここを飛び出して、自身もまた、戦場に駆けつけたい。胸を燦ぶる衝動を祈ることで押さえつける。

この祈りで、誰の命が救えるのだろうか、この国を守れるのだろうか。

そんなことをしているくらいならば、剣を振り翳し、一人でも敵を、薙ぎ払った方がいいのではないか。

あの人は今、どうしているだろうか。

少女は自身と俗世を隔たる12の階段を脳裏に浮かべ、その遠さに途方に暮れる。

分かっている、永和に生きる者ならば。

王女が生まれた時、永和の者は皆、悟ったということも。

けれど、ただの人として、永和など関係なく、ただ、守りたいと願うのもまた、感情というものだろう。

許されない、許されるはずもない、それも、分かっている。

少女は、すべて永和とともにある、かの人へと想いを馳せる。

あの人は決して、振り向いてはくれないのだ。

1章 アシユタルテ3

2日後、太陽が南天に差し掛かろうとする頃、王都シャーンはクセルクシア軍に包囲された。

明朝、大宰相エーベルト・ウツディーンは、強固な城砦都市であるシャーンのすべての城門を閉じるよう命じ、籠城戦へと入ろうとしていた。

その前夜、農民に身をやつした一団が、城壁が閉じられるより前の城下より東へと向かった。

それを見届けたエーベルトは再び王宮のイズ・イリアの元へと戻り、最後の杯を手に取り、飲み干した。会話はなかった。

細めた双眸の先に、灰となった塊を見つけ、満足げに笑う。

そうして横に視線を移せば、隣に至上なる人が息絶えていた。

一団が出立したのとちょうど同じ頃、一騎の早馬が北へと向かった。携えるものは何もない。ただ、『命令』だけを伝え、早馬を放った。持っていかせようとしながら躊躇い、結局何も書けなかった紙は今、エーベルトの手元にある。

今さら未練を残してどうする。

何を願おうと所詮、彼は彼女を地獄に突き落とす、その事実が変わらない。

「愛していると伝えたこともなかったか」

未練ならばある。

嫌というほどに、ある。

或いは、自分こそが霸王となり、永和王家を潰していればこんな苦しみを彼女に与えることもなかったのだろうかと後悔し、けれど所詮、今さらだと自嘲する。

その時、大宰相と、下階から彼を呼ぶ声が聞こえた。感傷に浸る時間はない。

エーベルトは飲み干された杯と、息絶えたイズ＝イリアの亡骸を交互に見つめた後。

「その力、とくと見せていただこうか」

唇の端に笑みを刻んだ。

エーベルトが放った早馬はシャーンから北方へと向かい、半日ほどかけてセルシアの丘の麓へと到着した。

それはクセルクシアの大軍がシャーン総攻撃を開始したのとちょうど同じ時間だった。本来であれば早朝には到着できる距離ではあったが、クセルクシアの間者を煙に巻くのに随分と時間がかかってしまったのだ。

セルシアの丘、そこに白亜の神殿は立つ。

アシユタルテの化身たるかの全盛の女王、クレアツア＝ディアーナの御魂を守るこの神殿はアシユタルテ神殿と呼ばれ、何千の兵さえもが終結できる広い前庭の先、12の階段をもつて下界と隔たれる。神殿の主は『アシユタルテの巫女』と呼ばれ、巫女となると同時に名は捨て置かれる。巫女の任期は定められていないものの、巫女は王家の血縁の姫でなければならないという定めから、おのずと任期は決まってくる。彼女達は巫女であると同時に、政略の道具という重要な地位を占めていたからである。

時の巫女はかつて、シエラ＝ウツディーンと呼ばれていた。

父親は大宰相エーベルト＝ウツディーン、そして母親はイズ＝イリア王の妹、永和王女であるエルザ、王族筋の姫である。

彼女がアシユタルテの巫女に任じられて2年。

王都からは離れた地であるため多少遅れてではあったものの、彼女の元にもクセルクシアの侵攻の情報は届いていた。

彼女はその日も神殿の祭壇で祈りを捧げていた。

クセルクシアの侵攻の話を聞いてから毎日、それは続いていた。

指を重ね額に押さえつける。手はふるえていた。そうして自身を押

さえ込んでいなければ巫女の務めを忘れ、飛び出してしまいそうだった。

祈りは複雑だった。

永和はただ、その国を守るためだけに生きることが許されない。かつての大宰相、予言者シルベスタ・ウツデーラの予言が、彼らの生きる道を複雑にした。

彼は女神、かの女王クレアツァ・ディアーナの再来と彼女を従える霸王の姿を描き出した。

霸王の誕生は現世の支配者、永和王家の滅亡を意味していた。

そして16年前、予言者が描き出した女神と同じ色彩の赤子が生まれた時、予言はただの予言で終わらぬのだと覚悟をした。

永和は、国を統べる傍らで、自らの滅亡を悟ったのである。

そして16年後、赤子が絵の通りの美しい少女となるのを待っていたかのように、クセルクシア大公はシャーンへと侵攻を始めた。

その少女、ルクレツィアはイズ・イリア王が亡き正妃サラヤとの間に設けた王女、つまりはクレアツァ・ディアーナの血縁である。

巫女であるシエラは、予言の成就を祈らなければならない。が、滅亡するだろう王家の王は彼女の叔父であり、臣下の筆頭にあるのが彼女の父だった。

彼らの無事もまた、祈りたいと思わずにはいられない。

できることならば、エーベルトが率いているだろう永和軍の一兵にさえなりたいたいと思っていた。

この国を守りたい、その想いは2つに道を分けたれ、彼女を苛んでいた。

「お父様」

シエラは少し顔を上げ、救いを求めるように差し込む光を見上げた。アシュタルテの巫女である彼女には、大きな役割があった。そのため彼女は、この神殿の巫女として隠された。

ルクレツィアが生まれたのと同じ日にシエラは生まれた。

クレアツァ・ディアーナと同じ青の瞳を戴いたルクレツィアに対し、

シエラの瞳の色は緋だった。

青と同様、緋もまた、この大陸においては稀有な色彩だった。

そして、二人の姿もまた、似通っていた。

何の偶然かは分からない。従姉妹同士が似通ったところで不自然ではないだろう。が、似通ったシエラは生まれながらにして、その存在のすべてを利用されることとなった。

「巫女姫様……！」

静寂が立ち込めていた祭壇に突如、巫女に仕える女官の声が響いた。その切迫した様子にシエラの肩がふるえる。

「何事です」

必死に動揺を隠しつつ返事をしたと同時に祭壇の扉を開き、女官のアヤが飛び込んでくる。

アヤはシエラの乳母の娘で、シエラにとっては神殿にまで伴ってくれた大切な友人でもあった。

「表においでください」

早馬が、とすべてを告げられるより前にシエラは祭壇を飛び出す。嫌な予感がした。

祭壇を飛び出したシエラは12の階段の下に跪く兵士と対面する。

「大宰相様よりのご伝言にございます」

12の階段より下に降りられないシエラは階段の手前から兵士を見下ろすしかない。

「王はご自害、王女はアツサワに落ち延びられてございます」

「自害、と……？」

永和は滅びるのだとシエラは知った。

否、そうなることは心の何処かではもう、分かっていた。シエラは巫女となる前はシャーンの学院で政治を学んでおり、後には大宰相の片腕とも期待される存在でもある。

力なき王家が生き延びてこられたのはただ予言、霸王でなければ永和を滅ぼしてはならぬという不文律故だとよく分かっていた。

永和は本来の意味でこの大陸の覇者ではない。

が、それでもシエラは永和王家の血縁として生まれた。

喜ぶべきか悲しむべきか、どうしたらいいのかわからない。

ただ、父のことが思い出された。

「父上は、どうしました」

「大宰相は最後の戦いに出陣されるとのこと」

ちょうど今頃戦いが始まっているでしょう。そう告げた兵士に、何ゆえの戦いか、と問うことはできなかった。

王は死んだ、が、残された者にはまだ、為すべきことがある。

「シエラ姫様」

「!？」

兵士は名を呼んだ。

巫女姫ではなくシエラと。決して口にしてはならぬという巫女の本来的名を告げた。

「大宰相よりのご命令でございます」

その言葉に、彼がシエラと呼んだのは故意なのだと悟った。

シエラの存在のすべては、予言のために利用されるためにこそ存在する。

「大宰相は王女をこの神殿の巫女姫にあらせられると偽られる所存、シエラ姫様には王女を偽り、この神殿にてクセルクシア軍を食い止めよ、とのことでございます」

永和は滅びる運命にあった。

ただ、永和が残すことができる予言の女神、ルクレツィアを守り予言の成就へと導くことこそが、残された者に最後に課されたことだった。

1章 アシユタルテ4

シエラにとって下された命令は決して驚くものではなかった。

そもそも彼女がこの神殿の巫女姫の地位についたのもいつか必ず来るだろう、この日のためだった。

アシユタルテの巫女は王族筋の姫が務め、今は『王女』がその地位に在ると表向きでは言われている。

実際には王女ではないシエラが巫女なのだが、王女の名が公表されるわけでもない。

この大陸を覆う予言と、それを体言するかのような名を冠する神殿と、そして、そこに住まう王女。

それらから連想した時、解はおのずと予言者が描いた絵と瓜二つだという王女、すなわちルクレツィアへとつながる。そしてそれは暗黙の了解となる。

おそらくルクレツィアを探す者達は民衆の言葉を頼りに、ここに、王女を探しにやってくるだろう。

シエラがここにいるのは偽りの王女として彼らと相對するためだ。その間に王女は安全な場所へと逃がされ、シエラは敵の前に突き出される。

シエラがこの神殿の巫女となる前の日、エーベルトは彼女に命じた。
『もし、このシャーンが陥落するようなことがあれば、お前はルクレツィア様より前に敵と見え、断じよ。霸王にふさわしき者であるというのならルクレツィア様の元に、そうでなければその命を賭けて殺し、ルクレツィア様を守れ』

今がその、時だ。

兵士が持ってきたのは、引き金を引くための言葉だ。

「分かりました」

短い静寂の後、静かな、けれどはっきりとした口調でシエラは告げた。真っ直ぐに顔を上げる。その表情に動揺一つ垣間見せないこと

に、兵士は息を飲む。

かの大宰相の息女、さりとてまだ16歳になったばかりの少女に過ぎない。その少女の前に今兵士が突きつけたのは、実の父の死を予感させる言葉でもある。

泣き叫ばずとも声の1つもふるえるだろう。至上なる存在だからといってそれが、許されないはずもない。

「もし大宰相の元に戻ることが可能であるのならば、ご命令は確かに承りましたとお伝えください」

「シエラ姫様」

「アヤ、アヤは何処に」

もう話すことはないとにかくにシエラは兵士から背を向けようとした。呼んだのは女官の1人の名で、程近くで控えていた、シエラよりは幾分年上の少女の返事が戻ってくると、彼女は正装の準備をするようにと短く命じた。

やはりその横顔に揺らぎはない。

兵士は一度その場から辞そうとし、けれど神殿と下界とを隔てる12の階段の端から彼女が奥へと戻ろうとするのを見送り、思わず声をかけた。

「シエラ姫様、大宰相に他に何か、伝言はありませんか」

悲痛な叫びにも似た声にシエラの足はぴたりと止まる。一度は奥を向いた視線は再び下界へと向けられ、まるで硝子玉のように無感情の双眸が兵士を捉える。

思わず声をかけてしまった理由を兵士自身もうまく説明できなかった。

16の少女のあまりに、冷酷とも表現できる様子に苛立ったのかも知れない。決して泣き叫ぶ様子が見たかったわけではないだろうが、おそらく近く敗将として死を賜るだろう彼女の父、大宰相に対し何か、彼女からのやさしい言葉を持ち帰りたかったのかもしれない。

「他にも伝言を、と」

「はい」

「もう会うことはかなわないからと？」

故意に淡々と、低い声で発せられる。告げたシエラは真っ直ぐに兵士を見つめ前に、歩を進める。

二歩、その先にあるのは12の階段で、けれどそれもかまわずに彼女は新たな一歩を踏み出す。

この2年、決して許されなかった隔たりを越えていく。

「シエラ姫様……！」

「何を驚いているのです。私にシエラに戻るようと、その命を持つてきたのは他でもない、貴方でしょう」

シエラは嘲るように笑んだ。そして一歩、また一歩。隔てる間はあと1段のみという場所まで近づき、改めて兵士を見る。

「私も貴方に聞きたいことがあります」

呼吸音すらも聞こえるほど近い場所でシエラは口を開く。その時、喉がふるえ、声がかすれた。兵士ははっとしてシエラを凝視する。

「あの方は他に何か、言っていないませんでしたか」

兵士が詰め寄ったことにより、シエラもまた、問うた。

小さな肩がふるえる。

できることならば今のこの瞬間、自身の剣を取り上げ王宮に向かいともに、戦いたいと思う。

程なく突きつけられるだろう父の死に何も思わないわけはない。

胸の内でも多くの叫びが交錯する。

父の死をかえりみずこの場で敵にまみえ、身代わりとしての役割を果たす。

時同じくしてシエラの身にも死は訪れるのか、或いは、更に過酷な生が待っているのか。

分らない。

けれどどうあっても決して穏やかな日々ではあるまいと思った時、髪を振り乱して泣きじゃくりたいという感情がないわけではない。

それでも律するのは、シエラが永和に連なる者だからだ。彼女の命は、生まれながらにして彼女の自由にはならない。それを教えたの

は他でもない、父エーベルト・ウッディーンだからだ。

「私に何か、言葉はくださいませんか」

兵士がシエラに向かって父に対する言葉を求めた時、シエラにもまた、父からの娘に対するする言葉を欲する想いがこみ上げる。

が、兵士は押し黙った。シエラが問うた刹那、彼の表情は蒼白となり、まるで自身が問いかけたことが罪かのようにかたまった。

それをひどく思いつめた視線で見つめたシエラはやがて、肩をすくめた。先ほどの動揺は嘘だったかのように、素振りさえも見せない。

分かっていた、だから聞かなかったというのに。

何故この男はわざわざ親子の情などを突きつけてきたのだ。そう、恨みがましいものさえも抱きながら苦笑した。

「あの方は最後の最後まで大宰相であることをまっとうされるのでしよう。ならば私に求められるのは、拝命に対する是、のみ」

「シエラ姫様」

兵士は自身の安易な物言いを恥じる。シエラが何も胸に抱いていないわけではないのだと、今更ながらに思い知る。

「申し訳、ございません」

謝罪に対してシエラはゆるく首を振り、ならばと兵士に対し伝言をした。

ちようどその時、用意ができましたと背後でアヤが声をかけたけれど、それに反応することなく、ひどく真摯な表情とともに託すように告げた。

「出来ることならば生きて再び、お会いできればと思いますと、そう」

伝えてと、最後の方は消え入るような声だった。

シエラはその望みはかなわないだろうことを知っていた。

王女はアッサワに落ち延び、他の王族は死んだ。ならば、残る将が敗者の責めを一身に負わなければならないし、エーベルト自身もそのためにこそ最後の戦いに赴いたのだろう。

いただく者を失ってなお戦うということは、それに代わるということだ。

それでもいい、恥ずべきことだろうとどんな慈悲でもいい。命令などではない、父の声がもう一度、聞きたいと思った。

1章 アシユタルテ5

「大宰相」

「やつと戻ったか」

籠城戦に入って1日、城門付近で幾度かの小競り合いがあったものの、夜を迎えるとともにその日の戦闘は終わった。

3万の大軍と言えどこの城門はそう簡単には破れまい。だてに400年も鎖国をしていた城なのだからと、弱さ故の強固さに皮肉の1つもつぶやきなくなる。

が、もう長くはもつまい。

この1日で敵もこの城について調査を進めているだろう。そうでなくとも数の差も大きく、こちらには既に大将たる王はいないのだ。今日1日敵の侵入を防ぐことができただけでも奇跡と言ってもいいかもしれない。

1日の戦闘が終わった後、何とか一段落ついた兵士達の元へと自ら赴き、エーベルトはねぎらいの言葉をかけて回った。

1日城を守りきったのは、既に城を出た王女、ルクレツィアの目くらましをするためである。

この国は滅びるが、この国は女神を残す。

そう予言した予言者は絵を描き、それ故にこの国に生まれた者は最後の最後まで踊らされる。祖国を愛する、それと同等、否、それ以上はこの大陸の永和を自らの責務として、幼少時より叩き込まれるが、力がないこの国は、外から来る霸王を待つしかなかった。それが例え、国を滅ぼすのだとしても。

「この手に力を、か」

エーベルトは過去の血気盛んだった頃の自身を思い出し、苦笑する。

「連れてきました」

先ほどエーベルトを呼んだ彼の副官が連れきたのは、昨夜、エーベルトが放った伝令の兵士である。

引きずられるようにしてやってきた男は、道中の険しさを物語るように軍服がぼろぼろで、切れた生地の上には血がこびりついている。進み出たエーベルトはしゃがみ、副官の支えを失うなりその場に座り込んだ兵士と視線を合わせる。

高貴な存在にまず姿勢を正そうとするが、それはそれを受けるべきエーベルトによってとどめられる。テーブルにあった水差しから水をグラスに注ぎ手渡ししてやる。

「あの娘に我が命は伝えたか」

「はい」

「それで、何と言っていた」

与えられた水を口に含み大きく息をついた兵士は改めて姿勢を正した。

思い出したのは昼間、ひどく自身を責めなくなるような、16歳の少女の思いつめた表情だった。自分が不用意に投げかけてしまった言葉にほんの一瞬、思いつめたあの顔。

そして聞いた言葉を伝えるべきか黙っておくべきか、それをまず迷った。

「ご命令は確かに承りました、と」

「そうか」

告げられた硬い声に反するようにエーベルトは安堵したかのような表情を浮かべた。万感の思いを込めたような彼の声に、命令を果たしたはずの兵士はやるせない気分になる。

「ご苦労だった、下がってよい」

もう聞くことはないとはかりにエーベルトは立ち上がる。

「お待ちを、大宰相……！」

思わず兵士は叫ぶ。背を向けかけたエーベルトは立ち止まり、まだ何か、と怪訝そうな表情を浮かべる。

「出来ることならば生きて再び、お会いできればと思います。そう、おっしゃってました」

「あの娘が、か」

「はい」

あまりに無感情な大宰相に兵士は迷いを振り切りそれを告げた。これから最後の戦いに出ておそらく、死地に旅立つだろう人に、気の迷いのような言葉を与えるべきかどうか。シエラに対した時にもやはりその無感情さに尋ねてしまった短慮を、エーベルトにも繰り返す。

エーベルトは必死の兵士の叫びにも眉一つ動かさなかった。

ただ、お前は愚かだなとつぶやく。

「大、宰相」

「所詮はかなわぬ願いだ、そんな言葉をわざわざ持つて帰ってきたお前は、私がそれを聞いて喜ぶともでも思ったか」

下がれと、先ほどとはまったく異なる硬質な声で命じる。滅多に見ない大宰相の酷薄の表情に息をのんだ兵士はそれ以上何も言えず、命じたとおり出て行くしかない。

兵士が出て行った後部屋の扉が閉じられる。代わりに入ってこようとした副官に、10分だけ考え事をしたいとエーベルトが命じたのだ。

「その願いはおそらくかなわぬよ、シエラ」

がしやりと仮面が音を立てて崩れていくような感覚にとらわれる。手で顔を覆ったエーベルトの喉がふるえる。

私がそれをかなえぬよ。そう、胸の内で訂正し、娘に対し最後に告げる言葉が命令だったことを悔いる。

「私に力があればお前を守ってやれただろうか」

もし、16年前、お前が生まれた時にそれを受け入れなければもっと違う未来があっただろうか。もし、その未来があれば、自分もつと、お前を慈しむことができただろうか。

「弱い父を許せ」

扉の向こうから、軍議の準備が整いましたとの副官の声が聞こえる。エーベルトはまるで泣いていたかのように乾いた目元を腕でぬぐい、元の毅然とした表情をはりつかせる。

「どうか、この大陸の永和に私の愛しい娘の幸せが重ならんことを祈るようにつぶやいた後、彼は自ら扉を開いた。」

1章 アシユタルテ6

兵士が来た道を戻って行くのを見届けた後、シエラは再び神殿内へと戻った。

アヤの先導で入ったのは衣装部屋で、そこにはもう1人の女官がシエラが命じた、正装の用意とともに待っていた。

「ごめんなさいね、急にこんな用意をさせて」

「いいえ、そのような」

もう1人の女官の名はティナと言った。彼女はシエラよりも更に1歳年下だ。まだあどけなさが多分に残る彼女にとって、先ほどの兵士の登場はひどく衝撃的なことだっただろう。シエラに白の衣を纏わせる指先がふるえている。

シエラはそれに気づかないふりをしながら、ビロードの台に載せられた装飾品を1つ1つ取り上げてははめていく。その脇でアヤはシエラの髪へと挿す簪の用意をしていた。

「アヤ、この支度が終わったら皆にここを出るよう伝えてちょうだい」

ぱちりと、腕飾りをはめる音が響く。

「巫女姫様……！」

「詳しい状況は分からないけれど、此处にいるよりは安全でしょう」ティナが今にも泣きそうだ。なだめるように笑んだシエラは、私はこの神殿の巫女ではなくなったのよ、と告げる。

そう、シエラは巫女ではなくなった。そしてもう、少なくとも永和に仕える巫女に次はない。巫女の位を失ったシエラはこれから、巫女となった理由を果たさなければならない。

シエラがこれから迎えなければならないものは、エーベルトが望んだものは、シエラを決して穏やかな世界に置くものではないだろう。だから今、まだ静寂のあるうちに、皆を逃がさなければならない。巫女の女官はもう、必要ないのだ。

「用意が終わったならばらく1人になりたいわ。アヤ、よろしくね」
「分かりました」

アヤは櫛を取り上げ、シエラの亜麻色の髪を梳いてゆく。
身支度は1時間ほどで終わった。

どちらもが、この日、決着がつくと疑わなかった。

日が暮れて一度戦闘を終えた両軍は、ともに体制を立て直しを行った。

エーベルトが最後の出撃を命じたのはちょうど、日付が変わってすぐの頃だった。

ようやく1日の戦いを終えたにもかかわらず何故、こんな時間にエーベルトが出撃を命じたのか。

もちろん、万が一の勝利を狙ったわけではない。

暗闇が重要だった。確かに敵は大軍ではあったが、夜は地理に詳しいこちらの方に、幾分の分がある。

『1人でも多く、アツサワまでたどり着け』

それが大宰相の最後の命だった。

彼は兵を二手に分け、敵がこちらの動きに気づいた時、察しない程度の兵士、エーベルトもこちら側なのだが、その数を最後の戦いのための兵力として残し、残りの者を王宮の地下へと向かわせた。

クセルクシア軍が動き出したのが夜明け前、日が昇る頃には城門がこじ開けられ、城下での戦いが始まった。

が、その戦いは長くは続かなかった。

エーベルトは巧みに防衛線を王宮へと下げていった。城下の民間人の犠牲を最小限にしたかったし、そもそもこんな無駄な戦いのために、多くの兵士を道連れにするのはたくさんだった。

シャーン王宮の塔に降伏を示す永和国旗がたなびいたのは昼前、クセルクシア大公ジャルジェが入城を果たしたのはそれから数時間の後のことだった。

王を生け捕りとすべく近衛達が王宮を駆け上がった果てに見た光景は、とうの昔に息絶えた永和王イズ・イリアの姿だった。そして暖炉には何かを焼いた跡があり、それはおそらく、王の間を飾り続けた至宝が失われたことを意味していた。

かつて大広間で見上げた絵が失われたことを知ったジャルジェは、忌々しそうな表情とともにイズ・イリアの亡骸を見下ろした。

絵は、かの予言者、シルベスタ・ウツデーンが書いたものだった。有名な予言の絵だ。しかしながら、そんなものに特段興味を持たなかったジャルジェはかつてただの一度だけ見た絵の記憶などほとんど残してなかった。

この王宮の大広間に入り、絵を見られた者はほとんどいない。永和の上層部を除けばおそらく、四大公家の直系くらいのものだろう。クセルクシアの大軍の中にあつては、ジャルジェしかない。

つまりは、彼の周囲に描かれた女性がどんな姿なのかを知る者はいないということだ。

ジャルジェはその女性を探していた。

見たことがない、けれど、彼女は必ず生捕りにしなければならないものだった。

『絵の女性と瓜二つの顔をした王女』は、どれ程馬鹿馬鹿しいと思つても、他の者が信じている以上、利用する価値があつた。

が、城内をいくら探しても王女はいなかった。そして、捕らえた役人達はつまらない忠義に殉じようとしているのか、決して彼女の行き先を告げようとはしなかった。

『霸王』は『暁』をてにしなければならない。

一層のこと、予言など打ち捨てていけばよかったものと、ジャルジェは額縁を睨み付ける。

否定しつつも、絵も王女も未だ手元にないことが彼を苛立たせた。まるでお前は霸王ではないと、何処から嘲笑われているような気さえた。

誰に？

死んだこの男にだ、ジャルジェは運ばれてきたイズ・イリアの死体を蹴り上げる。

彼は、稀代の戦上手であり、また、王となるべき資質を持っていたがまだ、若かった。更に、彼の育った環境が彼を卑屈にさせていた。「大宰相エーベルト・ウツディーンを生け捕りました！」その時、大広間へとやってくる近衛の声が響いた。

王は死んだが王女の遺体は見つからない。死んだにせよ生きているにせよ、はつきりしなければならない。そのために、間違いなく王女の姿形を知っているだろう永和の実力者、大宰相エーベルト・ウツディーンの子捕りを命じていた。もちろん、王亡き今、永和の総司令官たる彼を押さえることが戦略上重要だったというのもある。ジャルジェは王座に腰を下ろし、両腕を背で括られた敵将を迎えた。「永和の大宰相ともあるう者が無様なことだな。戴く王を失ってなお、戦っていたというわけか」

跪かされたエーベルトに顔を上げるよう命じると、両脇の衛兵が無理やり彼の顎をつかむ。

敵軍の中にただ一人、しかしながらエーベルトはまったく臆することもなく、横顔にはいつもの威厳を刻む。

ただ、床に転がる無残な主君の姿を見た時、わずかに眉を寄せた。

「早く殺されるがよい。我らは敗者で、貴方は勝者だ」

「黙れ」

ジャルジェは立ち上がり玉座よりエーベルトのすぐ側まで降りる。

近衛兵に引くよう命じ、代わりに顎をつかむ。

「聞きたいことがある、王女を何処にやった」

「さあ」

エーベルトは白々しく笑んだ。あの、シルベスタの絵に瓜二つの

少女は、霸王の手を取り、この大陸の永和を導く切り札となる。

故に彼女は今、此処にはいない。

今ここで、目の前のこの男に捕らわれてかしくような存在になるわけにはいかない。彼女が自らの意思で選ぶ男は、霸王は、ただ永

和を滅ぼしただけの者であってはならないのだ。

この男は霸王の器か、そう、見定めるようにエーベルトはジャルジエを見上げた。

確かに戦上手ではあるし、たかだか3年であのクセルクシアを立て直した力量は見事だとも思う。

が、目の前の男の顔は澀んでいた。

もちろん現状に怒っているというのもあるだろう。が、それだけではないと思うのは、彼がおそらく送っただろう、不遇な公子時代が想像できるからだろうか。

そう思うと、憎々しい顔をした目の前の男に対し哀れみさえ抱いた。年は27だったか、息子には少し大きく弟よりは少し小さいほどの年の男に、これからのこの大陸の未来がかかっている。或いは、自分が仕えていれば今この瞬間、相手に値踏みされるような顔はするなど言ってやれるものを、などとさえ考え、胸の内で苦笑する。

嫌いではないと思った。

「アシュタルテは我らが希望です。あの方は、自らの手で、意思で、霸王となるべき存在を選ぶのですよ」

「私が霸王ではないと言いたいのか……!!」

エーベルトの言葉はジャルジエの感情を逆なでした。

周囲で重臣達が震え上がっているのだが、エーベルトはまったく臆しない。

王宮に入り、イズリリアの死を目の当たりにし、今更永和を滅ぼした事実の重みに苛まれているのかもしれない。

霸王になり、世界を変えるのだと勇んで公都メサを出た時はよかった。

が、エーベルト達の抵抗に遭い、クセルクシア側もそれなりの兵力は失っていた。そして更に、永和王殺しの滞在が課せられた。

アシュタルテは此処にいない。

或いは、彼女の存在に救われたかったのかもしれない。彼女に霸王と称えられ、自らの行為を正当化して欲しかったのかもしれない。

これからジャルジエに課せられようとするものは1人で背負うにはあまりにも大きなものだ。

「言え、ウツディーン。王女を何処にやった」

「存じません」

エーベルトは目を閉じ、この男の隣に女神の存在を想像する。

自分はもうすぐ死ぬ。

この男は永和王家なきシャーンに君臨するだろう。

シエラはこの男をどう思うのだろうか。

自身の娘の幼い頃の姿を思い出し、改めて自らの残す過酷な道を歩み始めた娘を思いやる。

『許してくれ』

謝罪は、自らの弱さに対してのものだろう。エーベルトもまた、かつて今のジャルジエのような野望を抱いたことがある。

結局何も出来なかったのはただ、弱さ故だ。

自分をもっと別の選択をしていれば、あの娘に対して、もっと幸せな未来を作ってやる事ができただろうか。

肯定も否定もない。

では、目の前のこの、男はどうだろうか。

「貴方は永和を滅ぼしたのだ、貴方が霸王となるも逆賊の誹りを受けるもすべて、貴方のこれから歩む路次第です」

「ウツディーン？」

エーベルトは不意に、いたわるような口調で告げる。

ジャルジエの背に、冷たいものが込み上げてくる。

そしてがらりと口調を変えた。

「クセルクシア大公よ、私は決して王女の居場所を告げるつもりはない。早く殺してしまうことだな」

エーベルトはこの一時の邂逅に満足をし、最後にもう一度だけジャルジエを見上げた。

朽ち果てる身に未来など分かるはずもない。

ただただ、願うだけだった。

1章 アシユタルテ7

身支度を終えたシェラは、一度寝室に戻り、続いて祭壇の間へ移動した。

夜明け前だった。

アヤとティナは少し眠った方がいいと気遣ってくれたけれど、とてもではないが、眠れそうになかった。

祭壇の間へと続く真っ直ぐな長い廊下を歩いていると、先ほどシェラが下した命令、この神殿を出るようにとの言葉を伝えているのが聞こえた。

シェラは一時立ち止まったものの、すぐに再び歩き出した。この神殿にはおそらく、近く敵軍が現れる。おそらく彼らはシェラをないがしろにはしないだろうけれど、決してシェラの側は安穩ではないだろう。

シェラはもはや巫女姫ではない、そして、シェラはシェラでさえもない。

クセルクシアの人間が現れた瞬間から彼女は王女ルクレツィアを騙ることになる。

大きな木の扉を開き、祭壇の間に入った。

静粛な祈りの間の中央に、銀で出来たの女神が鎮座する。豊穡の女神アシユタルテの名を冠されたかつての全盛の女王クレアツァ・デ・イアーナの姿を模したものだ。それは、当然ながら予言者シルベスタの描いた絵の少女とよく似ている。

つまりは、銀の女神はルクレツィアともシェラとも似た面影を宿していた。

が、それを見上げるシェラは、女神の像が自分と似ていると思ったことなど一度もなかった。

シェラは予言者の描いた絵を何度か見たことがあった。

豊かな金の髪と青い瞳が際立つ肖像画はルクレツィアそのものである。

つて、髪と瞳の色が異なるシエラとは全く異質なものだ。

決して、自分こそが予言の女神になりたいと思ったことなどはないが、今、この瞬間こんな冷えた場所で。敵を迎えなければならぬ自身を思うと投げやりな気分になる。

ルクレツィアは皆に守られアッサワに、シエラは身代わりとして、一度も会ったことのない男の前に突き出される。

霸王に相応しい者であればルクレツィア様の御前に、そうでないのならその男を殺し、ルクレツィアを守れ。

その、人殺しの命令を下したのが他でもない、自身の父親だ。

ただひたすら予言の成就を願ったエーベルトは、彼の妻、シエラの母であるエルザ亡き後、程なくして彼女を学院に入れ、学問と人殺しの術を学ばせ、続いてこの神殿の巫女として押し込んだ。

あの人にとって、シエラはただ、予言の成就をかなえるための道具でしかない。

不意に、シエラは視線を自らの手にしたものと落とした。持っていたのは小さな銀細工の箱で、これを持つてくるために一度寝室へと戻ったのだ。

精巧な細工になるべくふれないように小箱を開けると、中から片方しかないイヤリングを取り出す。

永和に生まれた子供は、生まれ落ちたその時に両親にイヤリングを与えられ、それが生涯の守りとなる。

シエラの母エルザはエメラルド、ルクレツィアはサファイア、どちらも瞳の色を元を選ばれたらう石のイヤリングを持っていた。

緋の瞳を持つシエラのイヤリングもまた、その色彩から選ばれたのだろう、ルビーだった。

が、それは何故か対ではなく、片方しかなかった。

左耳にしかないイヤリングを幼い頃はさして不思議に思うことなくはめていたが、学院に入り、それを理由にからかわれたり苛められたりして以降、シエラはこの箱にイヤリングをしまいこんだ。

エーベルトに理由を聞いたところで、何も返事はなかった。

やがて、神殿の巫女になる頃には、シエラはそれを欠けている自分にふさわしいと嘲るようになっていた。

シエラは穴を塞がないためにと入れていた飯のものを外し、代わりに守りのイヤリングの針を耳に通す。

久しぶりの、けれど確かに自身のものだと思わせるそれは、シエラの指先にあたり、小さく揺れる。

これからのことに恐れているのかもしれない。こんな欠けたイヤリングの守りにさえ、縋らずにはいられないほどに。

「大宰相、貴方はご存知ですか？」

道具にも、心はあるのです。

シエラは泣けなかった。自身の役割をよく知る彼女は決して今、涙の跡など残すわけにはいかなかった。

それでも、恐怖した。

これから自らに降りかかるものを。そしてその時にはもう、エーベルトは生きていないだろうということを。

父はもうすぐ、死ぬ。

シエラの元には何も残らない。

ただ、残るのは。

「お父様……！」

シエラは齒を食いしぼり、祭壇にしがみつく。

物言わぬ女神の像がシエラを見下ろしていた。

シエラの記憶には残っていなかった。

否、本当は残っているのかもしれない。おそらく彼女の中の深い深い場所にそれは存在する。思い出せないのはただ、彼女が幼かったからだろう。

エーベルトは幼子を腕に抱えていた。エーベルトに寄り添ったエルザは、我が子の左耳にはめられたイヤリングにふれ、ひどく挑戦的な視線を前方に向けた。

『これは、悪あがきよ』

『エルザ』

『私は、後悔しません』

その視線を細め、愛しい娘の頬を撫でる。

『けれど、怖い』

あの時、自らの罪がこのような実を結ぶとは思わなかった。

自分は間違っていたのだろうか。そんなことは思いたくない、けれど、目の前に突きつけられたものにエルザも、エーベルトも言葉を失った。

一度は途方に暮れ、けれど、それでも願わずにはいらなかった。

『貴方の瞳が開いた瞬間、私は…泣いたわ』

つぶやいたエルザは、エーベルトから赤子を取り上げ、抱きしめる。ただ、ただ、貴方の幸せを願っている。

『シエラ』

愛しい名を繰り返す。

その声は、確かにシエラの胸の奥深くに残る。

何故母は、あんな言葉を言ったのだろうか、記憶に残っていれば何度も問うただろう。

けれどそれを覚えていないシエラは、ただ、この時、欠けたイヤリングを耳に通したのだ。

シエラが一人でいた時間は長かった。

何時間たったのだろうか。一瞬、時間が永遠と思ったほどにその時間は長く、また、一瞬にも思えるものだった。

祭壇の間の静寂を破ったのは、控えめなノックの音だった。

「シエラ様」

名を呼ばれ、シエラはふっと顔を上げた。馴染んだ声であることに安堵し、同じだけあせる。

「クセルクシア軍かと思ったわ」

座っていた場所から立ち上がったシエラは、貴方も早くこの神殿を出なさいと告げる。

「此処は、私だけで大丈夫」

「ご一緒できるところまではご一緒します」

「アヤ」

3つ年上のアヤは、シエラの乳母だった女性の娘で、ずっとシエラに仕えてくれている。シエラがこの神殿の巫女になった時にも女官として共に俗世から離れてくれた彼女は、侍女という言葉では表わせない大切な、姉のような存在でもある。

「王女をただ1人置いて皆が逃げ出したなど、永和の恥というものです」

「ありがとう」

唇を尖らせるような素振りを見せたアヤに思わず笑みを浮かべてしまう。

おそらくもう、まもなくだろう。時間を確認し、こんな時間まで静寂の中にいられたことを不思議に思う。

「ありがとう、アヤ」

「シエラ様」

短い時間を惜しむように、シエラはアヤの腕に抱きついた。そうしている、巫女の正装に身を包みながらも、年相応のあどけなさを見せる。

シエラはまだ16歳だ。自分よりもなお幼い少女がここで、敵に對さなければならぬという現実に胸を痛める。

アヤにとってもシエラは大切な、妹のような存在だった。

言葉の通り、一緒にいられるところまで一緒にいる、それはアヤ自身の願いだ。そして、引き離されてもなお、シエラの側に仕えたいと思うだろう。

アヤもまた、シエラの柔らかな白い衣に頬を寄せる。

静寂は、それから程なくして破られた。

最初に聞こえたのは馬のいななきの音で、それを聞き取ったシエラ

の肩がふるえた。

「シエラ様？」

シエラはアヤを引き離し、顔を上げる。

アヤは息を飲んだ。ただの一瞬にして、シエラの表面から年相応の幼さが消える。

「アヤ」

凜と響く声は馴染んだものののに、シエラその人のものとは思えないほどに硬く響く。

ああ、この人は。

不意に、アヤは泣きたくなった。けれど、シエラ本人の前でそんなことができるはずもなく、必死に涙をこらえる。

「私がここを離れることになったら、貴方はアツサワに行きなさい」
そして、ルクレツィア様を守って。

シエラはただただ、エーベルトの遺言を果たすだけの存在となろうとする。

それがシエラの生まれた唯一の意味だ。

「ルクレツィア様の名を、騙るのよ」

唇の端を緩める、まるで挑むような視線を前に向ける。

シエラはこの時、自身が言葉にしたものの意味をよく考えてなかった。父エーベルトの遺言として、自身の採るべき行動はよく分かっていた。しかし、どういう形であれ、これからの世界を生き残らなければならぬ。しかもルクレツィアの名、アシユタルテを騙る。

予言の女神の名を背負う重さを、彼女はまだ知らない。

それが大宰相の、最期の言葉だというのなら従いましょう。

「行きます、ついてきて」

歩き出す、その動きすらもたおやかに。

その時、左耳のイヤリングが悲しげな音を立て、鳴った。

1章 アシユタルテ8

クセルクシア大公ジャルジエの腹心にして近衛のトップ、ザキリミットは、郊外へと向かって馬を走らせていた。

彼の後ろには10人の部下がつく。目的を考えればもう少し人数を用意したかったが、近衛の兵士の多くが永和の残党の搜索をしている状況を考えれば、これがぎりぎりの数だった。

太陽が西に傾こうとする中、そちらの方向へと向かう。

ジャルジエがエーベルトを問い詰めている頃、永和軍の武装解除を行っていたザキの耳に、興味深い情報が届いたからだ。

巫女様はご無事なのか。

最初は気にも留めなかった。が、その巫女が、アシユタルテの巫女と呼ばれていると知り、話は変わった。

近衛長官自らが敵軍の兵士達の間を歩き回り、そのアシユタルテの巫女がシャーンの西の神殿に住んでおり、王族筋の姫しかなれない役割であることを知った。アシユタルテと言葉を聞いた時には既に予想していたが、王族筋と聞けば、おのずから想像できた。

亡き永和王イズリリアには王女は1人しかおらず、その王女は王宮にはいなかった。誰かが彼女を連れて落ち延びたとばかり思っていたが、そもそも彼女は王宮にはいなかったとも考えられる。

何よりも、彼女が予言された女神の化身というのなら、その神殿の名は彼女にとって最も相応しいものだ。

きっと彼女こそがクセルクシアが今、必死に探している存在、王女ルクレツィアに違いないと判断したザキは、ジャルジエの許可を得、彼の側を離れた。

王女を必ず生け捕れ、それがジャルジエの命だった。

王宮から神殿までは2時間ほどの道のりだった。丘の上にあるそれは、王都シャーンを見下ろすようにそびえ、その道中の上り坂に、距離に比して時間がかかった。

白亜の神殿だった。

地面と神殿を隔てるのは12の階段、まるでそこから俗世から切り離されるのだと示すように、階段の最上段の両端には松明が焚かれている。

階段からは少し離れた場所でザキは手綱を引き、見上げた。

確かにこの場所ならば、女神の御許に相応しいのかもしれない。荘厳な存在感に、先ほどまで殺戮を行っていた軍人達は、思わず我が身の罪を省みる。

アシユタルテは戦いの女神。

兵士達の守護者である彼女は、戦いの上に豊穡をもたす存在だ。

元は古い神話の登場人物だ。が、かつて、その人物は具現した。

実際のところ、彼女は女神の化身だったのか、使徒だったのか、はたはたそう呼ばれ崇められるただの人に過ぎなかったのか。その解を持つ者はいない。が、彼女自身が成し遂げたこの大陸の統一と、彼女に仕えた予言者の言葉が、後の人々の切実な思いを煽った。

再び、この大陸に彼の全盛の女王の治世のとき永和を。

古の語りは、クレアツァーディアーナの存在を奇跡として語り継ぐ。故に、人々は二度目を信じる。

しかも、最初の語り部はあの、女王に膝をついた偉大なる予言者、シルベスタ・ウッディーンなのだからなおさらだ。

400年前、世界は騒乱の中にあった。そして、その騒乱が終わった先に永和は存在した。

女王の死後、再びじわりじわりと世界に暗雲が漂った。

400年後、今の世界を乱世という。

歴史は繰り返されるのか、ならばこの暗い世界の先にさやけき世は存在するのか。

その、鍵となる者をアシユタルテと呼ぶ、美しい暁光の女神だ。

ザキはその場所で馬から降り、白い道を部下とともに進んだ。いつもより幾分遅い速さで歩きながら、再び神殿を見る。今度は先ほどとは異なり、もっと現実的な思考が浮かんでくる。

彼はジャルジェの王としての資質を信じていた。

ジャルジェは強い、そうして、頂点に立つべき資質がある。予言などという名で飾り立てたお伽噺などなくとも、ジャルジェの力こそが彼をこの大陸の霸王なさしめるだろうと信じている。

王女の存在を求めるのは、シルベスタの戯言に惑わされた民衆を治めるのに利用できると思うからに過ぎない。

ルクレツィアは時に16、まだまだ成人もしていない少女に彼の全盛の女王の如き力など求めるのが酷というものだ。

そう、まだ16なのだ。

ちらりとザキの脳裏に苦いものが襲った。

こんな神殿に大切にしまい込まれた少女を、自分達は利用するために引きずり出しにきた。

予言者は告げた、暁を手にする者、永和を導く覇とならん。

予言者はなんてものを言い残したのだろう。

女神を手に入れたと示すのに効果的な方法がある。そして、ジャルジェはそれを迷うことなく実行するだろう。

ザキはジャルジェの力を信じていた。

が、主君にして幼馴染みでもある彼の生い立ちと、おそらくそれがそうさせただろう彼の中にある歪んだものを思い出すと、ある種の哀れみを抱く。

おそらく彼女は幸せにはなれないだろう。その最初の一押しをするのが自分だ。真っ直ぐなものと後ろめたさを同時に抱きながら、ザキは一声を上げる。

「取次ぎを、ルクレツィア王女にお会いしたい」

ザキは12の階段の前に立つ。

返事はない。取り次ぐ者はいないのかと怪訝そうな表情を浮かべながら、再び呼びかけようとする。部下達は、いかなる場所からの攻撃をも防ごうと、柄に手をかけ警戒している。

再度の呼びかけの前に、階段の上の重々しい扉が開いた。

刹那、視線は捉われる。

たった1人の女官の先導の後に少女は現れて、最上段に立つ。

背後から部下の誰かが息を飲むのが分かった。

背に何か、冷たいものが通り過ぎた気がした。

「永和王イズ・イリアが娘、ルクレツィア、この神殿の巫女を務めております」

抱いたの畏怖にも似たもの。

白い喉から発せられた高い声は、敵軍の存在に怯えるそれではない。ザキの前に現れた王女、を偽ったシエラは、ちらりと彼の徽章を確認し、告げた。

「クセルクシアの近衛長官殿、確か、御名はザキ・リミット殿とおっしゃったか」

「何故」

「徽章を存じ上げていただけです」

シエラの鼓動は恐怖に早打つ。が、表面に動揺は見せない。父の最期の遺言を守るために完璧な王女を演じる。

本物の王女を知る者が見れば皆、これがルクレツィアであるはずがないと言っだろう。が、王宮の奥深くにしまいこまれた彼女を知る者はほとんどいない。

シエラが演じようとすればするほどそれは、彼女の本質を表に出す。「大公の直属たる貴方がここまで来られたということは、王は、お隠れになったということでしょうか」

「王女!？」

シエラが淡々と告げたのは、イズ・イリア、今、シエラが騙っているルクレツィアの父の死の確認の言葉だ。母の兄、シエラにとっては叔父でもある存在であったが、会ったことは数度しかなく、記憶はうすい。

が、シエラの感情を押し殺したような口調は、ザキに父の死に悲しみをこらえる少女の姿を伝える。

悲しみの上に、顔を真っ直ぐに上げる。

裾の長い白い衣はアシタルテの巫女の正装、その名に相応しい、

何者にも侵しがたい鮮烈な色彩が際立たせる。

シエラの双眸がザキへと向けられる。

揺らぐことのない視線の強さは、ザキがジャルジェに覚えるとそれと似ている。

この暁は、緋の色彩は。

この大陸に2つと存在しないもの。ルクレツィアとは異なる、けれど同様に稀有である色彩は、絵を見たことがないザキに誤らせるに十分だった。

「そなたが主、クセルクシア大公ジャルジェ」フォン「クセルクシア、彼がこの大陸の永和をつかむ霸王となるに足る存在であるのなら、私は彼に従いましょう」

ザキは視線をそらせない。

シエラはほんの少し唇を緩めた。解けた唇の端がかすかにふるえ、悲しみと喜びを同時に刻む。

「それが私の、生まれながらにして背負った宿命です」

私の生まれた意味は、我が永和王家の滅びの先にあるのです。

シルベスタが描いたという絵の女神と同じ色を持って生まれ、成長するにつれ姿を似通わせてゆく私の存在は、永和の滅びを導くものでしかなかった。

「私は、生きなければならぬのですわ」

「王女、いえ、アシユタル様」

最後に一言をつぶやいた後、少女の瞳に一筋の涙がつた。それでも気丈にザキを見上げた緋の双眸、その鮮烈なまでの存在感にザキは思わず膝をつかずにはいられなかった。

1章 アシユタルテ9

「引つ立てよ」

もう話すことはないとはかりにジャルジエは命じた。そして、彼の命令に対し、2人の兵士がエーベルトの腕をつかむ。エーベルトは何ら抵抗することなくそれに従う。

脇には、クセルクシアの主だった家臣達が控えていた。その中でも一番ジャルジエの近い場所にいた老将、ヤーフェ・クリスタは、エーベルトの侮辱の言葉に激情する若い兵士達とは一線を画し、あまりに落ち着いた亡国の宰相を見つめていた。

ヤーフェはクセルクシア軍において一番老いた將軍であり、ジャルジエが父から玉座を奪い取るうとした時には、迷うことなく彼の前に膝をついた1人だ。

3年前、クセルクシアには暗雲が立ち込めていた。ジャルジエの父親である前大公は内政をおざなりにして領土拡大に執念を燃やしていたからだ。

民衆も疲弊していたし、休むことなく方々に戦いに駆り出される軍にもまた、限界が来ていた。

前大公も、いつかはと永和を狙っていただろう。が、彼はそれより前にジャルジエによって失脚させられた。その場の勢いでシャーンを落とせたところで、更なる泥沼しかないのが見えていた。

ジャルジエによって改めてクセルクシアの將軍に任じられたヤーフェは、彼がシャーンを責めると言った時、一度は反対をした。

確かにクセルクシアの国内は安定しているし、民衆の中にジャルジエならば霸王になれるのではないかとの声が上がっていた。

が、最終的にヤーフェもジャルジエの志しの前に膝をついた。

ジャルジエならばという期待もあったし、かなうことならば生きているうちに、かつての女王の為したという治世の再来を見てみたいとも思った。

そして、シャーンは陥落した。

今はまだ、南や西、北の大公達は動きを見せていない。水面下では何か動きがあるのかもしれないが、正直なところ、誰も永和殺しの罪など背負いたくないというところだったのだろう。クレアツァ「ディアーナより始まる王統を絶やすという役目は重い。」

ヤーフェは連れられていくエーベルトを見つめた。彼がジャルジェの前に連れられてきた時からずっと見ていた。

ジャルジェは気づいていないだろう。王家を滅ぼしある種の興奮状態にある彼に突きつけられた言葉の幾つかは、言葉通り刃だっただろう。が、決してそれだけではない言葉もまた告げたエーベルトは、ジャルジェに期待をしているのかもしれないと思う。

逃げようともしない、また、媚を売るわけではない。王の亡き今、生き残った永和の臣下のトップには既に、敗者としての責任を取る覚悟ができている。

淡々とした口調で告げながらエーベルトは、ジャルジェという人となりを見ていたのだろう。永和は滅び、けれど永和は次の時代への鍵となる、なんて皮肉なのだろう。

ヤーフェが目で追っていたエーベルトは、ふと思いついたように立ち止まった。扉の向こうへ出ようとすすむ直前、まるで最後にもう一度だけと見届けるようにジャルジェの方を振り返った。

両脇の兵士が引き摺ろうとする。思わずヤーフェは彼らを止めた。

エーベルトが口を開こうとするのを見、彼が何を言うのか興味を持ったからだ。

「クセルクシア大公、ジャルジェ」フォン「クセルクシア」

永和殺しが。

エーベルトが綴ったのは、ジャルジェに対する呪いの言葉だ。

ジャルジェの表情が醜く歪む。はつとした兵士は再びエーベルトを引っ立てようとし、けれどその動作は止まる。上段から降りたジャルジェが大腿で歩み寄り、エーベルトの胸倉をつかんだからだ。

「そなた」

「愚かな、お前のような殺戮者が霸王を名乗ろうとでも言うのか」
ざわめく。けれど、言葉に反してエーベルトの表情は穏やかだ。

エーベルトは優秀な家臣だった。

彼ならば霸王になれるかもしれないとの噂が、クセルクシアにまで届いたこともあった。

が、彼は永和王女を妻に娶り、最後まで永和のために戦い今、永和とともに朽ち果てようとしている。

後悔がないとは言えないだろう、が、何故今さらこのような言葉を吐き出すのか。恨み言を言うのなら何故、そんな顔をする。

彼は、ジャルジェの逆上を期待しているのかもしれない。まるで、自身の死を確実なものとするように。

「シルベスタ・ウッディーンの子孫、予言者の家系を根絶やしにし、さらなる罪を重ねるがいい」

「黙れ!!」

「ジャルジェ様……!」

抜刀したジャルジェは、エーベルトの肩に向けて剣をはらう。衣が切り裂かれる鈍い音が鳴り、一拍置いてエーベルトの肩は血に染まる。

致命傷ではない。

罪人をこんな場所で殺してはならないという理性が、わずかながらも残っていたのかもしれない。

王族殺し、残酷な殺戮者、霸王という御旗の元に隠れる、けれど決して無ではない罪を貴方は背負いなさい。背負ってその上に覚悟をなさい。あれは、…あの娘は決して、半端な覚悟など認めはしないだろう。

エーベルトは受けた傷にまったく興味を示すことなく、ただただ穏やかに笑んだ。

それを見届けたヤーフェは静かに、ジャルジェに元の場に戻るよう告げた。

再び歩き出したエーベルトが、新たな言葉を発することはなかった。

エーベルトは牢ではなく、王宮内の一室に軟禁された。

彼が去った後、議論を始めた重臣達は、彼の処遇に対し一致した見解を示した。

明朝、見せしめの上火あぶりにせよ。

ジャルジエは何も言わなかった。

ヤーフェもまた、何も言わなかった。喉のぎりぎりのところで、彼を生かせるべきだという言葉が燻っていた。

永和の大宰相であった彼の知識と、彼自身の類まれな能力を惜しいと思ったからだ。

が、結局は言えなかった。

敗者の責任は誰かが負わなければならないし、何よりも、エーベルトが生存を望んでいないように思えた。

ああやってジャルジエを負の言葉で煽った彼は、これから先のために自身の死が必然だと思っているのかもしれない。

散会した後、ヤーフェはエーベルトがいる部屋を訪れた。

彼は、まるで目に焼き付けるように、シャーンの街を見下ろしていた。

最初に口を開いたのはヤーフェの方だ、何故あのような暴言を吐いたのかという問いに、やはり穏やかな笑みが返る。

が、直接的な解を告げないまま、伝えなければならないことを思い出したかのように突然告げる。

「もし、永和の臣が必要とあらば、学院を訪れなさいませ。あそこに私の前の大宰相がおります。中立たる学院の者であれば、クセルクシアの臣となることも可能でしょう」

「しかし、貴殿は」

「私はもう、過去の人間です」

既に死を受け入れた男はもう、未来を望むことはない。ヤーフェもこれ以上続けることはできなかった。

ただ、エーベルトがこれからを案じ、ジャルジエのことを氣遣っているということは分かった。

エーベルトは、ヤーフェに会い、告げられたことを感謝した。ジャルジエに対して告げられる言葉ではなかったからだ。

ヤーフェは最後に尋ねた。

ジャルジエは霸王となれると思うか。

問いにエーベルトは複雑な笑みを浮かべた。

「ウツデイン殿」

「私には分かりませんが、あの娘ならば分かるかもしれない
ん」

「あの娘？」

「ええ」

ヤーフェは首を傾げる。王女ではなくあの娘と言ったエーベルトが一体誰のことを言っているのか検討もつかない。なおもヤーフェは問いかけようとしたが、それはかなわなかった。

ヤーフェがいることが伝わっていたからか、きちんとしたノックの音の後に、5人の兵士が現れた。

エーベルトを刑場へと引き立てるためにやってきた者達だった。

1章 アシユタルテ10（前書き）

少しですが、残酷シーンがあります。
苦手な方はご注意ください。

1章 アシユタルテ10

最後に与えられたのは、身を清めるための水と、罪人であることを示す白装束だった。

両側を見張りの兵士に囲まれながら、淡々と動作を繰り返す。

恐れることは特になかった。途中、顔を合わせることもなかったかつての部下が、命乞いの言葉を発してくれるのを、どうしても自分のためのものとは思えなかった。

見上げた空はまだ、暗かった。

アシユタルテの巫女として神殿に上がった日から初めて12の階段を降りたシエラは、差し出されたザキの手を取った。

彼はシエラとともにアヤも連れて行くこうとしたが、シエラが止めた。女官として最後まで仕えてくれたアヤを実家に帰らせてやって欲しいと懇願すると、最初は怪訝そうな様子を見せたザキも、受け入れてくれた。ここで、シエラが従順な態度を硬化させるのを懸念したのかもしれない。兵士を1人、見送りのためにつけようと言った。アヤと別れ、シエラは1人になった。

戦時下という状況から用意が困難だったのか、或いは急いでいたのか、その、どちらものだろう、ザキはシエラを自身の馬に促した。近衛のトップに相応しい、見事な栗毛の馬だ。

ザキは、シエラに気を遣い、幾分ゆっくりとした速さで馬を走らせ、来た道を戻った。

シエラは馬がいななき、蹄を上げた時、振り向いて、白亜の神殿を見上げた。

こうやって、外側から建物を見ることすら2年ぶりだった。2年の間でシエラに許された『外』とは、神殿の建物に四方を囲まれた中庭と、12の階段の最上段のみだった。

戦いの女神の代理として、兵士を祝福した。王族やその使者を迎えることもあった。

使者としてエーベルトが訪れることもあった。

そんな時、12の階段が2人を隔てた。その上に立つシエラと、その下に膝をつくエーベルトと、その距離が父娘に許された一番近いものだった。

隔たりは今、なくなった。

それに大きくはない感慨を抱きながら、視線を戻した。階段がなくなつたところで、自由を得たわけではない。

途中、スピードを緩めることなく、近衛長官の隊列はシャーン城下に入った。姿が目立たないようにと与えられた黒い大きな布で全身を覆ったシエラは、布の隙間から城下を見る。

戦いを終えたシャーンの街はただ、静かだった。ところで火事が発生しているようだったが、クセルクシア軍の兵士が鎮火に当たっているようで、程なく収まるだろうと思われた。

城下に入ったのは真夜中ということもあってか、家々は明かりを落とし、しっかりと錠を差していた。陥落された都に住む人々は、やってきた征服者に怯えているのか、或いは、国を繁栄させることの出来なくなつた王家の滅亡の先に期待を見出しているのか、どちらなのかはよく分からなかったが、ザキに敬礼する兵士を見送るたび、彼らの永和のものは異なる軍服を見るたび、永和は滅んでしまったのだと、改めて思い知る。

幼いシエラは王宮へと向かうこの道を何度も通つたことがある。いつもより上等な服を着せてもらい、心弾ませながら。けれど、今、向かう先に。

イズ・イリア王も、ルクレツィア王女も、誰もいないのだ。

誰も、大宰相、も。

1人1人顔を思い浮かべ、ふと、思う。

もしかしたらというささやかな希望とともに、シエラは後ろで手綱を握るザキを振り返る。城下に入ってから往來があるため、随分

スピードを落としていた。

「近衛殿、大宰相は」

最後の戦いに出た大宰相はどうなったのか。

あの人が負けて逃げ回る姿など想像できない。捕らえられ、敗者の責を負うことになるのだろうか、まだ、あの人は、生きているのだろうか。

最期に一目、会うことはできないだろうか。

「大宰相はどうしているのでしょうか」

「王女？」

シエラの突然の言葉に、ザキは意外そうな表情を浮かべた。

何故、突然臣下の名が出るのかという疑問もあったし、告げた一瞬、完璧に見えたシエラの表情がほころびを見せたような気がしたからでもあった。

年は16、年相応の不安げな表情を垣間見たような気がした。

「近衛殿」

シエラはなおも問うた。今度は先ほどよりもなお感情を含んだ声で。「彼がどうなるのかは分かっています。私が知りたいのは彼が、まだ生きているのかどうかということです」

過去か、近い未来か、どちらにしてもあるのは死だ。それを前提とした問いかけにザキは一時、言葉を失った。

彼女の言葉をそのまま文字にすれば、冷酷な台詞に他ならない。が、わずかに声がふるえているのを聞き留め、だからこそ、この問いかけがシエラにとって重要なものと気づく。

「王女」

だからこそ、ザキは解に迷った。

「彼は私にとって、父のようなものでした」

感情を抑えようと努めた声でシエラは偽りを綴る。同情でもなんでもいい、疑われることなく解を得られたらそれでよかった。けれどと、ちらりと思う。

自分が告げた言葉はあながち間違いではないのかもしれない。あの

人にとって第一は永和で、大宰相としての務めで、シエラの父であることは、ずっとずっと後回しだった。

「我が父永和王が、先に自害したのならば、今回の戦いの終結とクセルクシア軍の勝利を示すために、他の、…高貴な存在の血が必要でございましょう」

頬の皮膚が引きつる。

父のような、という言葉聞いたザキは、シエラのあまりに明晰な解に対し、返答を躊躇う。

彼女は冷静だ。けれど、それは薄皮一枚のところを保たれているもので、些細な衝撃で慟哭に変わる、そんな気がした。怖かった。

彼女が崩れるのを見たくないような、けれど、もう片方で、一層のこと子供のように泣いて欲しいような、相反する感情を抱く。

ザキは、ひどく動揺していた。

神殿を訪れ、階段の上にシエラが現れるまで、ザキにとって『王女』はジェルジェの野望にとって役立つもの、という思いしかなかった。この大陸の悲願、再び永和を勝ち得るためならば、代償の1つや2つあって当然だと思っていた。

けれど、シエラのあまりに冷静な言葉と、自らを道具のように扱う姿が、かえってザキに彼女もまた、心を持つ存在なのだと思いつけるのだ。

実の父は自害し、自身はただ1人クセルクシア軍の前に引きずり出される。ジェルジェは決してやさしくはないだろう。こんな少女に更に追い討ちをかけるというのか。

エーベルト・ウッディーンはおそらく、もうすぐ死ぬだろうと。

ザキは躊躇う。すると、シエラは双眸を真っ直ぐにザキへと向け、強い口調で言い放った。

「近衛殿、今この時、言わないことこそが非情な行いとは思いませんか」

そして、手綱を握るザキの手を上からつかみ、馬に喝を入れる。

「ルクレツィア王女っ!？」

もし、まだ、生きているというのならば。

声が聞きたい。それがかなわないのならば、せめて、顔を見たい。

もし、シエラの下にも等しく神の慈悲というものが存在するのならばせめて、最期に一目、父に会いたい。

馬は街中をスピードを上げて駆ける。

そのまま王宮の前まで大通りを駆け抜けようとするが、それはかなわない。

王宮前の広場には多くの人が集まっていた。

明かりを落とした家で皆、息を潜めているのだと思った。が、その考えは間違っていた。

集まっていたのは、シャーンの住民だった。皆、不安げに広場の中心に視線を向けている。纏うのは黒、喪服だった。

中心で行われているのは。

シエラは一度空を仰いだ。夜明け前の夜よりなお深い闇に包まれた空を見上げ、自身の前で行われていることを悟る。

永和では、罪人の処刑は必ず、夜が明ける寸前に行われる。

愚かな者が為した重い罪を、女神の前に突きつけるために、そして女神が、罪人の哀れな御霊を絡め取っていくようにと。

「あ、ああ」

シエラはうめいた。戦いを終え、こんなに早く処刑されるだろう罪人をシエラは、1人しか知らない。

「王女」

ザキもまた、目の前の状況を理解する。そして、聡い彼女はすべて知ってしまったのだと思い、思わず顔を背けた。

父のような存在だと彼女は言った。

その人の死さえも突きつけられてなお、彼女は宿命を受け入れなければならぬ。

馬から飛び降りて、シエラはその場に立ち尽くす。その動作で黒い布の一部が滑り落ち、細い肩が露になる。

目の前にいるのは16歳の少女だ。

「ルクレツィア王女」

シエラは、立った場所から動かなかった。目の前の人だかりの中を突き進み、処刑台の前まで行くこともできるのに、彼女はそれをしなかった。

彼女の身長では、人だかりの先を見ることはできない。

エーベルトは見えない。

が、シエラは食い入るように前を見る。歯を食いしばり、涙をこらえるように上を向き、露になった喉で、数度、浅い呼吸を繰り返し、ふるえる声を発しようと、唇を半分ほど開き、けれど、それは寸前で止められる。

シエラが今ここで、父様と叫ぶことは出来なかった。今のシエラにそれは許されないことだった。

「王、女…」

シエラは再び、真っ直ぐに前を見た。

『大宰相は王女をこの神殿の巫女姫にあらせられると偽られる所存、シエラ姫様には王女を偽り、この神殿にてクセルクシア軍を食い止めよ、とのことでございます』

兵士の言葉が思い出される。

あれは本当に、遺言となるのだ。

最期のお言葉、その、お言葉のままに。

シエラの目には入らない、けれど、もう少し手をのばせば届くような場所で、今、この瞬間。エーベルトの命は奪われる。

一拍を置いた先で上がった悲鳴の直前に、執行せよという、執行人の声が聞こえた気がした。

安らかに、お眠りくださいませ、…父様。

シエラは前を見据えた双眸を落とし、深く深く、頭を垂れた。

その背後に、一筋の光が差し込む。

細い細い一筋は、シエラの亜麻色の髪を照らす。

冷たい夜明け時の風を受けた長い髪は揺れ、きらきらと、光の色に

溶ける。

深く息を吐き出し、ザキは目を細めた。ゆっくりと、ゆっくりと、光は暗闇を侵食し、程なく暁の刻を迎えるだろう。

刎ねた大宰相の首を刺した剣先が、天上に向かって突き上げられる。

「我々を、お許しくださいませ」

ザキは感情を抑えた声で告げ、落ちかけた黒い布をシェラにかけてやる。ぱさりと落ちた布の感触に肩をふるわせたシェラは、ゆっくりとザキの方を向いた。

「ありがとう」

一時、時間をくれて。見届けさせてくれて。例え声を交わすことも姿を見ることができずとも、この瞬間、この場所にいられたことは幸運なのかもしれない。

シェラの中に思い浮かぶのは、厳しい表情をした父の姿と遺言だけだった。遺言となってしまうた命令が、シェラの心を縛り付ける。この場にしゃがみこんで泣き叫びたいと思うのに、苦しくてたまらないのに、一筋の涙も出ない。

シェラに代わって、民衆が泣いてくれるのだろうか。耳を鳴咽がすすめる。

シェラはもう、遺言に縛られるしかない。

いつの間にか痛いほどに握り締めていた拳を解き、1つ息を吐き出す。

「近衛殿、参りましょう」

（お願い、一緒に逝かせて）

「王女」

「早く、お願い」

（今、この瞬間、喉をかききってしまいたい）

シェラは、心の中で自身を叱責し、唇に笑みを乗せ。表情を、はりつかせる。

ザキは息を飲んだ。

差し込んだ暁の光が、シェラの頬に差し込んだのだ。

ただただ、美しいと思った。

どうして彼女はこんなに痛ましいのだろう。泣くことも、わめくこともできず、代わりに笑みをたたえるその、造形ではなく意思の強さこそが作る美貌に捉われる。

アシユタルテは人だ。否、目の前に不可触の女神が立っている。

ザキは思わず頭を垂れた。

これほど美しい女を見たことがないと思った。

（シェラ、どうか）

（どうか、どうか、どうか）

（幸せに、なってください）

そして、ふたたび馬上の人となった彼らは、最も目立たない北門より、シャーン王宮内に入った。

1章 アシユタルテ11

「ネイサ様」

「お待ちください、ネイサ様！」

お付の侍女達が悲鳴のような声を上げて呼びかけてくるのにも構わず、今回のシャーン侵攻にも同行を許されたジャルジェ唯一の妾、ネイサの足取りに迷いはなく、幾分早足で何度目かの角を曲がっていく。

彼女がシャーン王宮に入ったのはジャルジェに遅れること数時間、昨日の夕方近くのことだった。開城された王宮内には少なくはあったが女官が残っており、敗北を知った彼女達は早々に新たな主を得ることになった。最後の最後まで王宮に残り、王家に仕えた高級女官達は、少ない女達しか伴っていなかったクセルクシア側にとって、すぐにでも雇いたい人材だったのである。

ネイサが巨大な王宮内にあっても道を迷わないのは、昨日、その女官達におおよその内部の構造を聞いていたからだ。確かに広いが、あまり複雑な造りをしているわけではない。ただ、豊かではない状況を反映してか、メサの宮殿より装飾品は格段に少なく、殺風景さに廊下の区別がつきにくいということはある。

ネイサが急いでいるのは先ほど近衛のザキがジャルジェの元にやってきたからだ。その時、ジャルジェの側に侍っていた彼女は、優雅に退席するような素振りを見せながら、何気なく始まった会話に耳立てていた。そして、最初の数言を聞くと早々に翻したのである。

「ネイサ様が行かれるような場所ではございません」

「何故？」

なおも追いかけてくる侍女達にふと、足を止める。流れるようなその動きに、思わずつまずきそうになる者もいたが、なんとか体勢を立て直し、ネイサと向かい合うことになる。

「私のような卑しき身分の者が、高貴な方に会うことは許されぬと

でも？」

「そ、そのような」

「では、他に何の問題が？」

華やかな笑みを崩すことなく、けれど、決して笑みではない視線を侍女達へと向ける。

ネイサの言うとおり、彼女に付けられた侍女達は皆、かつて娼館の住人であつた彼女をさげすんでいた。侍女達の中に心底彼女に仕えようとしている者など一人もない。命じられやむを得ず仕える者達の中には、彼女の近くにいたいことより、あわよくば自身が次の寵愛をと思っている者さえいる。

事実、ジャルジェは見目のいい侍女に手を出すこともあつた。が、2度、3度と続けて通う者はまだネイサ以外にはいない。

今日も主に対抗するように見目麗しく着飾つた侍女達の様子を内心せせら笑いながらネイサは告げた。

「未来の正妃様に少し、挨拶をするだけです」

「ネイサ様」

「下がりなさい」

感情を含まない、けれど、相手をひれ伏せさせるのに十分な声音を響かせ、彼女は再び、目指す部屋へと歩き出した。

明け方、北門より王宮に入ったシェラは、そのまま侵略者の前に通されることはなく、王宮内の一室へと通された。

牢ではない。まさかルクレツィア王女がそんな場所に通されるはずもないが、控えの間にクセルクシアから連れてきたのだらう侍女が2人、そして、入り口の向こうには見張りの兵士が立っているのだから、実際には牢に入れられているのと変わらない状況である。

それでも、奥の間にシェラは1人だった。

逃げることを防止するためだらう、宛がわれた部屋には鉄格子がはめられていたが、それでも窓を開け、外の景色を眺めることが出来

た。

視界にはシャーン城下が広がる。つい数時間前、大宰相の処刑が行われた場所は、警備のクセルクシア兵以外は人気も少なかった。

神殿の巫女として長くシャーンを離れていたシエラにとって、懐かしい風景だった。

大宰相と王の妹を両親に持つシエラは、小さい時からよくこの王宮を訪れていた。特に母が死んでからはなおさら父が屋敷に戻ってこなくなり、娘である彼女でさえも会おうと思えば王宮に出向かなければならないような状況だった。

おそらく、他の場所はそうではないのだろうか、この部屋の中は静かだった。懐かしい場所、そして、意外にも与えられた静寂な時間に、張り詰めていた気が緩みそうになる。

喉が鳴り、手で目を覆おうとする。

一拍の後に泣き出してしまいそんな自身を自覚したシエラは、手を耳元から髪の方へと向ける。そこに、髪飾りの冷たい感触を見つけ、こらえようとする。

今は静かな、王宮前の広場で、父は殺された。

シエラは、遺言となってしまった言葉のために生きなければならぬ。逆に、今、自分が生きていて、この場所にいるのは、それだけの理由だ、とも思う。

永和を滅ぼした男は、この大陸の覇者になる者に相応しいか、否か。冷静になればまったく理解ができないとは言えない。が、こんなに早く、おそらくためらうことなく父の命を奪った男が、それに相応しいはずがない。そう、断じてしまっただけならならぬだろうか。

「ただ、敵として、殺して」

そうして、その、同じ手で、自らの命さえも絶ってはならないだろうか。

手をすべらせ、アヤがきれいにまとめてくれた髪の乱れを直し、1つ、息を吐き出す。すべてが、早く終わってしまった方がいいと思った。突如、静かだった空間を破るような、声が響いた。

「どうか、お控えくださいませ」

「お待ちくださいませっ」

控えの間が騒がしくなる。控えの間の侍女の声だ。シエラはぱつと顔を上げ、髪の方にやっていた手を下ろす。纏う巫女の正装の裾を直し、長椅子へと腰を下ろす。

来訪者だろうか。侍女達にとってはおそらく予定外な相手なのだろう。クセルクシア大公、ではないのだろうか。

「お待ちを！！」

「控えなさい」

命じる声の後、扉が開く。

シエラは立たない。ただ、真っ直ぐに前を向き、来訪者を迎える。入ってきたのは美しい女性だった。シエラよりはずっと年上に見える。大公が連れてきた女性なのだろう、クセルクシアの貴婦人らしい、青を多用した衣装が華やかだ。

おろおろとした侍女が彼女の後ろに控える。片方の侍女はおそらく誰かに報告に行くのだろう、その場から離れようとしている。

女性が何者かは分からなかったが、シエラが今騙る名からすれば、それより高位の女人は、この大陸には存在しない。

が、女性は、臣下の礼を取ろうとはしなかった。

「ルクレツィア王女ですね」

観察するようにシエラを見、続いて笑みを浮かべる。亡国の王女など、取るに足りないということか。

「ネイサと申します、どんな方がお会いしたくてうかがったのです」
同じ後宮に住むことになるのですから。

回りくどい表現にシエラは知った。

彼女はおそらくクセルクシア大公の妃で、彼は、ルクレツィアをその、1人に加えようとしているのだということ。

否、もっと前、シャーンの陥落を知った時から分かっていた。シルベスタの予言を忠実に辿ろうとした時、それは一番容易い選択であり、故に、エーベルトはシエラをルクレツィアの身代わりにしよう

とした。

現実味はあまりなかった。

ネイサと名乗った女性にも興味を持つことはなかったが、さりとて邪険にするわけにもいかず、無言のままただ、視線だけを向けた。

ネイサは、侍女の鬱陶しい叫び声を遮断するように扉を閉め、改めて目の前の少女を見た。

最初に抱いた感想は、随分と幼い、というものだった。

確か16歳だったか。自身の国は破れ、父である国王は死んだ。その状況にあつてこんな少女が1人、敵軍の前にいるのだと思うと哀れみさえ抱く。

こんなか細い少女に、これからの大陸の行く末は委ねられていると本当に皆、思っているのだろうか。

シエラと向かい合ったネイサは最初、そんな印象を抱いた。

だからシエラの結い上げられた髪に視線をやった時、そしてそこに銀色に光る髪飾りを見つけた時、あまりの違和感に眉を寄せた。

「失礼致します、王女」

間違いないと思った。

突然近づいてきたネイサにシエラは身体をずらそうとするが、それよりもネイサの方が一瞬早く、彼女は決してシエラの髪を崩すことなく、髪飾りを抜き取った。

シエラは緋の双眸を見開く。が、反論をすることはなかった。内心は多少なりともあせっていたが、今の状況で、何かを口走ることの方が躊躇われた。ネイサは、クセルクシア側の人間だ。

ただ、普段の視線へとごく自然に戻していく、わずかさえも動揺も見せない様子に、ネイサは、ネイサの中での評価が微妙に変わる。

髪飾りは確かに、シエラの髪型にはいささか不似合いだった。左の耳飾りだけを装飾とした方がずつと際立つ、にもかかわらず彼女がそれを挿していたのには理由があつた。

返せとも告げず、シエラはネイサを見る。

先が異様にとがったその、細い刃にも似た髪飾りは、身1つで敵軍の元にやってきたシエラにとっては、唯一の武器だった。さすがに剣を持ち込まずにはいかず、ここまでうまくいつていたものの、目の前の女性には気づかれてしまったらしい。

霸王に相応しき者でないのなら殺せ、それがエーベルトが遺した命令だ。それは、果たさなければならぬ。

「王女は、クセルクシア大公を殺したいのですか」

髪飾りの意図を正確に取ったのだらうネイサの問いは、あまりにも直接的なものだった。

「兵をお呼びになりますか、ネイサ様」

一筋ほどの動揺さえも感じさせずシエラは応じる。慌てて繕ったところで逆効果だらうと思った。

「あの方は霸王に相応しくないと、お思いですか」

「私を手にする者が霸王になると、予言者は言い残したとか」

この状況で不利なのは明らかにシエラだ。今ここでネイサが叫びでもすれば、そうして髪飾りのことをばらしでもすれば、シエラは牢にでも押し込まれるのかもしれない。

が、この時、追い詰められているのは自分の方なのかもしれないとさえネイサは思った。

何に、とかではない。シエラに何かを求めている様子はない。が、ゆっくり立ち上がるうとしたシエラに、思わず一步引いてしまう。

そうしながら視線は引きずられる。

王女クレツィア、大陸の未来の鍵となる者。

最初、16歳の少女の運命に同情さえを抱いた。が、油断すれば食われるのはこちらなのかもしれない。

ジャルジエは、この少女を手に行けるのだろうか。生まれてこのかた、おそらく1人の女すら本気で欲したことのないだらう男の隣に立つ少女の姿を想像し、違和感を覚える。

何よりもこの瞬間、強い視線を目の当たりにしたネイサは、彼女も

またジャルジエと同様に予言の言葉など信じていなかったにもかかわらず、この少女は確かに何かを持っているのかもしれないと思ってしまう。

彼女は、ジャルジエの手を取るだろうか。

興味を持ったネイサは思わず、自らの下衣の内にひそませていたものを取り出した。

「ネイサ様」

その時、初めてシエラは怪訝そうな表情を浮かべた。

「その衣の内に隠しておかれるのがよろしいでしょう、こちらの方がずっと役に立ちます」

ネイサが手渡してきたのは、彼女がいつも護身用に持っている短剣だった。

研いであるとはいえ髪飾りの先は細い。確かにそちらの方が武器としては役に立つだろうが、何故目の前の女性がそれを渡してきたのかが分からない。

「何故？」

「貴方の選択を見てみたいと思ったからです」

ネイサは笑う。

暁を手にする者が霸王ならばその暁とはただ、霸王に引きずられるだけの存在か？

寧ろ、暁こそが霸王を選ぶのではない。そう思ったネイサはこの時、気まぐれを起こした。

この少女は、あの男に、どういふふうに関わっていくのだろうか。

あの男は、この少女さえもをただ、ただの器のように組み敷くのだろうか。

この少女ならばそれを、容易く許すはずがない。

「早くお隠しなさいませ」

ネイサの手に押され、シエラは短剣を受け取る。ちょうどその時、人を呼びに行っていたのだろう侍女が戻ってきたのだろう、ざわめきが大きくなり、扉が何度もたたかれる。

「貴方は、ジェルジエ様を変えることができるかしら」

シエラには聞こえないような声でつぶやいたネイサは、渡した短剣がしまわれたのを確認し、何事もなかったように扉の鍵を開けた。突然開いた扉になだれ込むように入ってきた兵士や侍女に、感情を読み取らせてない笑みを浮かべ、こんな子にジャルジエ様の妃が務まるのかしら、ねえ。と話しかけさえる。

侍女に駆け寄られ、シエラは何事もなかったとうなずいてみせる。ネイサは、クセルクシア大公唯一の妾に相応しい華やかさとともに立ち去っていく。

自分が渡してしまった短剣が、シエラに、そしてジャルジエに、何を引き起こすのだろうかと考えながら、追いかけてくる侍女を無視して歩く。

「貴方は、あの方にさえ心動かされることはないのかしら」
その声は、誰にも届かない。

1章 アシユタルテ12

広い議場の中央は、つい2日前までは大宰相エーベルト・ウツディーンが座っていた場所だ。そこに、エーベルトの処刑を命じた男が当然のように座る。

なんて皮肉だろう。同じ場所にお茶を出すのに、手にする男は違う。複雑な感情を抱きながらも、完璧に表情を作った女官は優雅な一礼を残し、その場を立ち去る。

議場は、謁見の間とは異なる、重臣達が顔を突き合わせて議論を交わす場所だった。豊かではなく、また、外圧にさらされていた永和において、この場所で行われる話に明るいものは多くなかった。政治にあまり興味を持たなかった永和王イーズ・イリアが出てくることは少なく、多くは大宰相であったエーベルトが場の中心にいた。

午後早々に始まった集まりは、すっかり陽が傾くまで続いた。議題は幾つかあったが、多くの時間が割かたのは、降伏した永和の文官や軍人の扱いや、長く鎖国を続けていた国をこれからどうしていくかというものだった。捕らえた者達の多くは予想していたよりも従順で、これならば有能な者をクセルクシアの臣下として取り込んでいけるだろうと思われたが、逆に、未だ降伏をよしとせず、抵抗する者の存在も残っていると思われた。

「確かに気になるな」

ヤーフェ以下、主だった将の報告を聞き終えたジャルジエは、渡された資料に視線を落とす。

彼らが持ってきたのはうまく行き過ぎているという、永和軍の解体の状況と、予想していたよりも少ない数を示したものだだった。

永和軍の抵抗は大きなものではなかった。エーベルトは闇雲に戦いを引き延ばそうとはせず、潔く降伏をした。彼自身は死を当然のものとして受け入れたが、永和の多くの者達が従順なのは降伏前、彼がアシユタルテにこそ仕えよという言葉を残していたのだと、色々

な場所から話が漏れ聞こえてきた。

ジャルジエはそれを利用した。

早朝、ザキが王女を連れて戻ってきたと報告をしてきた後程なくして、自身は対面することすらせず、クセルクシアが王女を『保護した』という情報を流した。ザキの有能さを信じていたし、別途永和の女官達に遠巻きに確認させたところ、あの方がルクレツィア王女ですという解が戻ってきたからでもあった。

王女の存在は、それからの行動を円滑にした。それは、この国においてルクレツィア王女、というより、予言の女神がどれ程の意味を持っているかを如実に示しており、反面でその利用価値を忌々しく思いつつも、彼女を必ず手の内にしていなければならないという意思を改めて強くした。

順調に進む永和軍の解体に対し、1つの懸念が生じた。

永和の文官達に用意させた軍の資料から割り出すと、降伏をした兵の数が少ないのである。その差、3000ほど。アッサワでの激突、その後も幾つか小競り合いがあったものの、そこまでの兵を殺したという感触はなかった。総じて降伏は早かったのである。

将軍が数人見つかっていないのも気になった。捕虜とした者に尋ねたところで、このどさくさで分からないという返答が戻ってくるばかりであり、おそらく軍の状況をすべて把握していただろう総指揮官、大宰相ウツディーンは既にこの世にはない。もう少し吐かせてから処刑すればよかったという声があったところで、今さらだった。既に敗北を覚悟していたウツディーンが、一部の兵の任を解いていたという話もあるようですが」

「例えそうだとしても差が大きくはないか」

「セトル将軍が見つかっていないのも気になるな」

「大宰相の意に背いて抵抗か」

理由がはっきりとしない、それは、永和において軍が2つに分かれたのではないか、ということを危惧させた。

片方はエーベルトの意に従い降伏を、もう片方が背いて抵抗を。

「違うか」

ジャルジエは呟く。

「アシユタルテにこそ仕えよ、か」

「ジャルジエ様」

その呟きに最初に反応したのは、アシユタルテの神殿から戻ってそのまま、一睡もせずはこの場にやってきたザキだ。

「何処かに抵抗勢力が潜んでいるとしても、王女さえ抑えておけば取るに足りん。なんなら王女を引き連れて国内をくまなく回ってみるか」

くつりと笑う。その、ゾツとするような冷ややかな双眸にザキは眉を寄せる。

戦いに明け暮れた先のクセルクシア大公を引き摺り下ろす形で大公位についたジャルジエは、すぐさま先代の仕掛けた戦いの停止のために動き、疲弊した国土と民衆のために内政の建て直しに動き出した。懸命に国のために尽くす姿は民衆から慕われ、彼がシャーン侵攻を決めた時には、この人ならば大陸を1つにまとめることが出来るかもしれないと皆、期待をしたものだ。

期待をしているのはザキも同じだ。

ただ、この人は。

毛嫌いしながらも、同じ道を辿る。戦いに明け暮れた前大公である彼の父のように女を侍らせる。戦いに使うのと同じだけ後宮にも大金を費やした前大公と異なるのは、ジャルジエは娼館巡りを繰り返して、自身の後宮にはネイサ1人しか入れなかったことくらいだろうか。

父は毎日のように女を変え、後宮の主であつた母もまた、宮殿内の男に手を出した。そんな環境の中で成長したジャルジエははなから女性に感情を向けることなど馬鹿馬鹿しいと思っているし、その扱い方は非情とさえ言える。

幼馴染みとしてザキも何度か意見したことがあるが、ジャルジエは聞かない。というより、分からない。ネイサを後宮に連れてきたの

だって、身体の具合がいいのと、多分、彼女が自身をよくわきまえているからなのだろう。そこに情やらというものは存在しない。

自分が何を言ったところで無駄なのだろうともう、ザキは諦めている。こんなことは周囲が言ったところで仕方がない。ジャルジェ自身が考えなければどうにもならない。執政者としては優秀なのだから、前大公よりは100倍ましだろうと言い聞かせてきたのだが、この時、ザキの胸は痛んだ。

明け方、この王宮まで連れてきたルクレツィアのことを思い出す。父の死を知ってなお、彼女は自身の宿命だからと神殿で迎えを待っていた。そして、父代わりだというエーベルト・ウツディーンの処刑を無言のまま見送った。王宮に通されて彼女は多少なりとも休んでいるのだろうかと気がかりでなかった。きつと、今行っても彼女は、神殿でそうしていたように待っているのだと思う。あの時はまだ彼女に仕えていたらしい女性も一緒にいた。が、今はクセルクシアの侍女に囲まれ、内心では不安がっているのではないかと思う。

まだ彼女は16歳だという。そんなまだ幼いと言っていい、しかも肉親を失ったばかりの少女があのジャルジェの前に晒されると思うと、哀れでならなかった。

会議は結局、夜の9時近くまで続いた。

永和の残党には注意を払うことでまとなり、以後は、随分寂れた王都をいかに再建していくかの話にもっぱら費やされた。

長い会議を終え、疲労感を表に出した者達は、それでも仕事に戻るべく議場を出て行った。

途中、ふと思いつ出したのだろう、大臣の1人が、ルクレツィア王女はどのような方だったのかとザキに聞いてきた。すると興味を持ったのだろう、他の何人かも立ち止まり、ザキに注目した。

ザキがどう答えていいのか迷っていると、未だ椅子に座ったままだ

ったジャルジエが立ち上がり、近づいてきた。

「それは明日、しっかりと教えてやろう。その具合も含めてな」

意味深な笑みに乗ってくる者とそうではない者と二手に分かれる。

後者はおそらく、その対象が高貴な女性だからだろう。

程ほどになさいますと、將軍のヤーフェは苦言を告げた。彼はその年もあつて、ジャルジエに対する、そういう意味での苦言も恐れな人物だ。その彼も次のことに忙しいらしい、それ以上続けることなく、議場から出て行った。

結局、誰も本気でジャルジエを止める気はない。止められないと分かっているからだし、予言を引き寄せるためにはある種必然だとも思っているからだ。

議場にはジャルジエと、ザキが残る。近衛を務めるザキの第一の仕事は大公の身近にいて、安全を守ることにある。

「ジャルジエ」

他にいる者といえは自身の近衛の部下くらいだったので、敬称をつけない、幼馴染みらしい呼び捨てで名を呼ぶ。自分はひどくあの少女が気がかりらしい、それを自覚しながら、せめて一言くらいは言っておかなければと思ったのだ。

「相手は永和の王女様だと分かっているんだろうな」

「なんだ、ザキ、お前がその手のお小言か？」

「普通は婚礼の儀を最初にするものだろうが」

「親の死の原因になった男のために婚礼衣装など纏いたくもあるまい」

「ならば、しばらくそつとしてさしあげるといふのは」

「まさか。王女は役に立つ、さつさと妃にして隣に立たせたい」

公都メサを発つ前から、ジャルジエはルクレツィアを妃にすると決めていた。あの予言の言葉からすれば当然出てくる考えだし、都合のいいことにジャルジエには正式な妃はおらず、多少年は離れているとは言え、王族の結婚相手としては相応な方だろう。

高貴な結婚では、愛情やらというものは時に後回しになる。なれば

名ばかりの夫婦になればいいだけなのだが、この男は、早々に、その身体だけは試そうとしているのだ。

「頼む、あまり傷つけるな。王女はまだ16だ」

「ザキ、お前らしくもない」

思わずザキがため息をつくとき、ジャルジェはニヤリとした。

「お前好みか」

「馬鹿な」

「お前の好みは嫌いじゃないんだ」

「ジャルジェ！」

なんなら飽きたら試させてやろうかと言われ、ザキは押し黙る。とてもじゃないが、そんな軽口の相手をする気にはならない。

離れないのだ。

神殿の階段の上に現れたあの存在感、そして、泣くこともなく大宰相を見送った姿が。

黙り込んだザキをしばらく見ていたジャルジェは、思い出したように告げる。

「3時間、いや、2時間後でいい。王女をお披露目するから広場に民衆を集めておけ」

「お前……！」

「つまらない儀式に興味はないが、『アシユタルテ』様を我が妃として見せ付けることには意味がある。永和の残党狩りのためにもな」

「ジャルジェ！」

「何を、荒れている」

ジャルジェの視線が不思議そうにザキを見る。

欲しいのは王女の名とその名が背負う予言だ。泣こうがわめこうが関係ない、ただ、利用するものは利用する、それだけのこと。

たかだか16の小娘1人、うまく扱えないとも思えない。

「とりあえず、王女の部屋に行ってくる」

「」

「近衛長官、ついてこないのか？」

問いかけにカツとしたザキは、ブーツの音を大きく鳴らして、ジャルジエを追う。

議場から出てしばらくのところに、ネイサが待っていた。

いつもながらに最初に視線が胸に行くようにと狙ったような衣装にザキは絶句する。

「ジャルジエ様？」

艶を含んだ問いかけに、ジャルジエは無言のまま細い腰を寄せ、くちづけを落とす。

「王女のところに行ったと聞いたが」

「ご挨拶にうかがっただけですわ」

その時、ネイサの唇が奇妙に歪んだのだが、誰も気づかない。

「誰が行っていいと言った」

「かわいなお嬢さんでしたわ。貴方の好みから考えるとちよつと貧相だけど」

「ネイサ」

すつと手を離し、歩調を速める。ネイサはなおも追おうとすると、ジャルジエが振り返る。

「寝ずに待っている。遅くなるだろうが、部屋に行く」

「分かりました」

「ザキ、彼女を部屋まで送れ」

もうここでいいと告げる。

階段を上った先にはルクレツィアのいる、部屋がある。

「分かりました」

足を止め、ザキは頭を下げる。それを見ることなくジャルジエはいつもと変わらない歩調で階段をのぼっていく。

その場にはザキとネイサ、そして彼女の侍女が残された。

1章 アシユタルテ13

会議を終えた老将ヤーフェ・クリスタは、部下に対し短い命令を与えた後、1人、馬で王宮を出た。

馬が用意されるのを待っている間、早足で回廊を歩くザキを見つけただけ、呼び止めることはなかった。近衛のトップにいるザキはヤーフェと直接の上下関係にない。従って、話すこともなかったし、話すことがあるとすればそれは、苦々しいものであると分かっていたからだ。

会議の後のジャルジエの態度と、明け方やってきたという王女のことを考えれば、これから起こるだろうことは容易く想像できる。そして、そんな夜に近衛の彼が慌てているというのは、ジャルジエがまた、何か面倒なことを言いつけたということだろう。

やがて、下男が馬を連れて来る頃には多くの近衛兵達が動き始め、何を始めるのかおおよそそのことが分かった。

ザキの命令により城下へと出る近衛兵達を横目に見つつ、ヤーフェは城下の東へと馬を向けた。

向かったのは王宮からそう遠くはない、永和の中でも比較的大きな屋敷が集まっている場所だ。その奥の方、他の屋敷から少し離れた場所にある、他と比べても広大な敷地を持つだろう屋敷、そこが目指す場所だった。

しかしながらその時、屋敷の主は不在だった。

呼び鈴を鳴らしてしばらくして現れた家人は、ヤーフェのクセルクシア軍の軍服をちらりと見た後、主は不在であると告げた。

しばらく待たせてもらいたいと申し入れたものの、今日は戻らないだろうというのが返事だった。

もしかしたらクセルクシアの軍服を警戒をしているのかとも思ったが、特にヤーフェを恐れるような素振りもなく、丁寧な言葉で不在の詫びを入れた家人は、大きな鉄の門を閉じた。

実際に、屋敷の主、ウルスラ「エランヴィアは不在だった。

彼がその時訪れていたのは自身の屋敷とは逆の方角、城下の西側にある、とある屋敷だった。

ウルスラの屋敷と比べても決して引けを取らないその屋敷は、ひっそりとしており、彼が門を叩くと、馴染みの家人が出てきた。

敷地に対して、働く者は少ない。それでもしっかりと管理されているその屋敷に、断りの1つも入れることなく、中へと足を踏み入れる。

足取りに迷いはなく、地下へと向かう。地下にある部屋の1つ、この屋敷の主人が使っていた書斎に足を踏み入れた男は、その部屋の大きな本棚の前に立ち止まった。

壁に一面、本棚が並ぶ。5つの本棚のうちの1つ、一番左端のものは、その大きさから想像されるのに対し、容易く横に動いた。そしてそこに、隠し階段が現れる。

家人から与えられた蠟燭の明かりだけをたよりに、ウルスラは階段を降りてゆく。

階段の下には新たな部屋があった。長く使われない、独特な匂いが立ち込めるその部屋が、彼の目的の場所だった。

部屋の明かりを入れ、壁に、求めていたものを見つける。

彼が今日、こんな時間にこの屋敷を訪れたのは、どうしてもそれを見たいと思ったからだ。

「お前は、随分と身勝手だ」

対面に置かれた長椅子に腰を下ろし、ただ1人、語りかける。

「何が後は頼みます、だ」

しゃあしゃあと言つてのけて、その言葉の通り、この屋敷の主はウルスラを、昨日まで屋敷の中に閉じ込めた。そうして男を部外者にして、彼を生かせた。

本当に、気に入らない。これ以上口を開けば悪態ばかりが出てきそうだと思った彼は、挑むような視線を壁にある、それに向ける。言葉の通りなのかもしれない。

生き残った者には、遺された理由がある。その、理由から逃れられない。だから今夜、此处を訪れたのかもしれない。自らに、突きつけるために。

ウルスラは振り切るように立ち上がり、明かりを消す。再び蠟燭の細い明かりだけとなり、先ほどまで見ていたものの輪郭もおぼろげとなる。

階段を上り、カモフラージュとなっている本棚を元の位置に戻し、まるでこれが用事だったとばかりに、そこから数冊の本を取り上げる。

上階に戻ると、この屋敷の家人ともう1人、フードで頭をすっぽりかぶった、若い女性が待っていた。

「戻ってきたのか」

アヤ、と、彼はさして驚くことなく、アシユタルテ神殿の女官となりシエラに仕えていた者の名を呼ぶ。

「はい、最初屋敷に寄ったところ、こちらにお越しとうかがったので」

「ああ、借りたい本があったものでな」

視線を集めるように本を持つ手を少し上に上げる。

「そうですか」

アヤもそれ以上問うことはなかった。彼女にとっても此処はとても馴染みの深い場所で、久しぶりの来訪に、少し感傷的になっていたのかもしれない。

「それで？」

そんなアヤを引き戻すように、ごく押さえた口調での問いが向けられる。

「お元気であられたか」

「はい、あの場所はまだ、安全です」

「そうか」

一度言葉を切ったアヤは、ちらりと家人の表情をうかがい、ウルスラに屋敷を出るよう促した。彼は特段それを咎めるようなことはな

く、また来ると言い残し、アヤとともに屋敷を出る。

「それよりも。シェラ様は」

アヤの顔に朱が差す。

アヤがシェラと別れたのは昨夜だ。それから、シェラが昨夜、命じた通りにアツサワに向かったアヤは、けれど、その命令に含んでいた意図に反し、ウルスラの元に戻った。ずっとシェラのこと案じられてならなかった。女だてらに荒馬を乗りこなし、本来であれば男でも厳しい道のりを1日で往復しシャーンに戻ってきてみれば、夜だというのに、多くの人が大通りに出ていた。

皆、不安げな表情をしていた。

その原因が、彼らを扇動しているクセルクシアの兵士だと気づいた時、不安は更に大きなものとなった。

昨夜も同じように民衆が集められ、王宮前の広場は大宰相エーベルト「ウツデー」の刑場と化したという。

ならば今日は？

それにシェラが関係していると嫌でも結びつけてしまう。

「クセルクシア兵が民衆を集めていました」

「民衆を？」

ウルスラがこの屋敷にやってきた時にはそんなことはなかった。彼もまた、アヤと同じように昨夜の光景を思い出し、更に、これから起こるだろうことを予想する。

「クセルクシアの考えることは、…分からんよ」

「ウルスラ様」

ウルスラの口調に含んだものを感じたものの、アヤはそれ以上追求しようとはしなかった。

「物騒ですから、屋敷までお送りします」

アヤはウルスラを送った後、自身は広場に向かうつもりだった。どちらにしてもあと数時間もすれば分かることだろう。

もし、シェラ様に何かあれば容赦はしない。そんな物騒なことを頭の中で考えていると、アヤの考えに反し、ウルスラは自分も行くと

言い出した。

「ウルスラ様、危険です」

「私はただの、引退した人間だよ」

「それを本気でおっしゃっているのなら、見識を疑います」

「お前は相変わらず手厳しいね」

「ウルスラ様！！」

ウルスラは当然のように馬を王宮の方向へと向ける。

アヤは慌ててウルスラを追った。どうか屋敷にお戻りくださいと何度も言うが聞き入れられない。貴方が心配なのだと叫びかけ、直前で躊躇する。そんなアヤに対してウルスラはふと、口を開く。

「アヤ、会うのはお前がシエラとともに神殿に下って以来か」

「え、あ、…はい。2年ぶりです」

「そうか」

感慨ぶかそうにつぶやくウルスラに、アヤは口を噤む。

ウルスラもまた、それ以上何かを言おうとはしなかった。

気まずい時間は長くは続かなかった。

王宮に近づくにつれて人通りが多くなり、馬で進むことを諦めた2人は、近くの民家に馬をつなぎ、歩き出した。

王宮内の一室に軟禁状態になっていたシエラの平穏が破られたのは、もうすぐ陽が暮れようとしている時間だった。

控えの間にいたのとは異なる、おそらくもう少し位の低いだろう侍女が2人、シエラのいる部屋のその先、寝室の準備にやってきたからだ。

丁寧なおじきをして寝室に向かう彼女達をシエラは呼び止めようとしたが、彼女達が応じることはなかった。ただ、一瞬目が合って、哀れみとも揶揄とも取れる視線にぶつかった。

彼女達がいたのはほんの短い時間であったが、自らのこれからの運命に気づいたシエラは身を硬くし、出て行くのを見送る余裕さえな

かった。

再び扉が閉められるのを確認したシエラは、立ち上がり、窓辺に寄った。

静かな城下はまるで、2年前と何も変わらないようで、今この場所にいる自分が滑稽に思えてくる。

「暁を手にする者、永和を導く覇とならん」
つぶやく声がかすれていた。

発したのは、彼の予言者の言葉だ。400年の昔、クレアツァーデイアーナの下に膝を付いた先祖は一体、何を思ってこんな言葉を遺したのだろうか。

今、シエラがこの場所にいるのに何の意味があるのだろうか。自分が此処にいるのは父の遺言のためだと思いつつ、苦いものが込み上げる。

ルクレツィアが哀れだと思った。

ただ、男達が覇王を争い、そんな男達の野望のために振り回される存在こそが女神だともいうのだろうか。

そこに、女神の意思など存在しないのだろうか。

そして、そんな女神を手にしうとする男に、最初に対する自分という存在は一体、どんな意味があるのだろうか。

何故、あんな命令が遺されたのか。

シエラが選べと言っているようなものではないか。

生かすも殺すもお前次第だ、そんな声が聞こえるようでシエラは唇を噛んだ。

先ほどネイサと名乗った女性に渡された短剣は、衣の内にしまわれている。シエラはそれを取り上げ、侍女が整えたばかりの寝室に入った。

シエラとて、その意味をまったく分からないほど子供ではない。

歯がカタカタと鳴った。

シエラは何か恐ろしいことでもするように、重なる枕の下に短剣をしまう。

もし、女神という存在が、ただ霸王に従い、霸王の飾りとなるだけの存在だというのならば。

もしかしたらエーベルトは、あの、偉大なる大宰相は、シエラに見極めよと言いながら。

或いは。

選ぶのではなくただ、クセルクシア大公を霸王と認めたくないがためにシエラを、この『偽者』を。

彼の前に突き出したのかもしれない。

ジャルジエがシエラのいる部屋を訪れたのは、シエラが短剣を寝台に隠してから、更に数時間経ってからだった。

ザキとネイサを追い払い、部屋の前までやってくると、警護の兵士とともに侍女が2人、ジャルジエを待っていた。

うかがうように見上げてくる侍女に一瞥を与えた後、一時、躊躇した。

その時、思い出したのは何故か、今朝がた殺したエーベルト・ウツデインのことだった。

ジャルジエのこれからを呪うかのような言葉を吐いたあの男は何故、あんな穏やか表情をしていたのか。

死にゆく顔さえも満足そうで、ジャルジエの方こそがまるで、敗者ではないかと思った。

「あの男ならば或いは、永和を建て直すことも出来たかもしれない」「殿下？」

「あの男が臣下ではなく、王、ならば」

ジャルジエは、ふがいない王に最後まで仕え、潔く散ったエーベルトを、自らがそれを命じながら、惜しいと思った。

が、それは一瞬のこと。

前を向いたジャルジエは、断りもなく扉を開いた。

「この大陸を手にするのは、俺だ」

だから王女は手に入れる。

控えの間を通り、その奥の扉を開く。

奥の間には明かりはなく、突然の暗闇に思わず、腰の剣に手をやる。かちやりと鳴った鞘に、何を自分は緊張しているのだろうと我に返る。

鉄格子のはまつた窓枠に手を置いて、女が1人立っていた。気配に気づいただろうに肩をふるわせることなく、ジャルジェの背を向けたまま、城下を見下ろしていた。

「お前が、ルクレツィア王女か」

目が馴染むと、暗闇と思った場所が、そう暗くないことに気づいた。明かりがない代わりに、城下の明かりが部屋をわずかに照らす。

色を確かめられるほどの明るさではなかった。が、細い明かりが1つにまとめられた髪を照らし、光を作る。一筋こぼれ落ちた長い髪は稀有な、金に見え。

この女が王女だと、確信をする。

「こちらを向かれよ、王女」

顔を早く見たくて一歩、また一歩とジャルジェは近づいた。もう少しでシエラの肩にふれようかとする直前、小さな呼吸音が聞こえる。ゆっくりとシエラは振り返った。

両の双眸が真っ直ぐにジャルジェを射抜く。

咄嗟にかつて見上げた絵の女神の色彩を思い出そうとし、けれど、そうするより前、モノクロの強さに引き寄せられる。

「クセルクシア大公、ジャルジェ」フォン「クセルクシア、か」

抑揚のない声に、ジャルジェの方が一瞬、戸惑った。

これが、永和王女、予言された女神として1人、生き残った女か。「ザキが気に入ったのはこの目か」

笑って見せたのは緊張を隠すためかもしれない。

ジェルジェ「フォン」クセルクシアともあろう者、永和を陥落された霸王たる者が、一瞬たりともたかだか16の小娘に目を奪われたなど、認められない。

ただ、思う。

面白い。

ジャルジエは目の前の女が自身の前に屈し、嬌声を上げする姿を想像し、シエラの腕をつかむ。

もう片方の手で顎をつかみ、無理やり顔を自身に引き寄せると噛み付くようなくちづけを落とす。

「っっ！！」

驚きに目を見開いたシエラの細い身体を抱き上げると、早足で隣の間へ移動し、寝台へと放り投げる。

「お前は俺の妃となる、俺のためにせいぜい役に立ってくれ」

シエラは上半身を起こしかけ、ジャルジエを見上げる。

手の届くところに短剣がある。

（私が、為すべきことは）

目を閉じる。

「大人しくしている、やさしくしてやろう」

ごつごつとした、剣士の手がシエラの足を割る。

シエラは投げ出された手をほんの少し動かし、枕元へとやる。

ジャルジエは、シエラを押さえつけたまま、側の明かりをつけようとした。先ほどの射抜くような瞳の色を、まず見たいと思ったのだ。その一時、ジャルジエの視線が明かりの方に向く。

（目の前のこの、偽の霸王を殺すことだ）

シエラは目を見開き、手をのばす。

「永和殺しが」

低い、低い、声だった。

寝台の上の、女のものとは思えない冷ややかさにジャルジエは一瞬動きを止める。

冷たいものが、首元に当たった。

「お前が、霸王になれるとでも？」

くつりと笑い声上がる。

剣先だ、それを悟ったジャルジエは視線だけをシエラの方へと向け

た。

ジャルジェが見たいと思った瞳の色が露になる。
緋の、双眸が。

10年前、大臣に連れられ初めて王都シャーンを訪れたクセルクシア公子は、シャーン王宮の大広間を飾る絵を、食い入るように見上げた。

見上げたのは、かつてこの大陸を統一へと導いた女王を描いたといわれるものだった。

金の長い髪をした女性の姿はただただおやかで、目を奪われた。しかし、意外なことに、あれほど目に焼き付けようとしたにもかかわらず、絵の女神の輪郭はジャルジェの中でおぼろげだった。

絵の半分ほどをうめていた稀有な髪の色がとにかく印象に残っていた。

けれど、どんな表情をしていたのかはあまり覚えていない。
美しい女性だとは思った。

あの女神の。

瞳の色は一体、何色だっただろうか。

1章 アシユタルテ14（前書き）

色んな意味でR指定です。

苦手な方はお気をつけください。

9 / 7 に1章 - 13の後半を修正しました。

9 / 6 に読まれた方は、13を先に見ていただけでも嬉しいです（見てないと14が分かりにくいと思います）。

1章 アシユタルテ14

あの女神の。

瞳の色は一体、何色だっただろうか。

緋の、双眸が、ジャルジエを見上げる。

何色、だっただろうか。

「そうは思いませんか、クセルクシア、…大公殿下」

相手を射殺さんばかりの緋の双眸と決して揺るがない剣先に、ジャルジエは一瞬吞まれそうになる。

16歳の少女のものとは思えないそれに、自らが随分と相手をあまく見ていたことによりやく気づく。

そして、瞳の色彩に気づく。

確かに緋は、この大陸においては稀有な色彩の1つだ。が、何故今まで思い出せなかったのだろう。あの、絵の女神の双眸の色は、この緋より、圧倒的に鮮やかな、『青』だったというのに。

「お前」

表情を変えたジャルジエに、シエラは息を止める。

大公家の人間ならば王宮を訪れたことがあるだろう。ならば或いは、絵を見たことがあるかもしれない。そう思ったシエラは部屋の明かりを消した。ただの姿形だけならば、自分はある絵の女神と、間違えられるほどに似ていると知っているからだ。

けれど、髪の色も瞳の色も、異なるシエラは所詮、『偽』でしかない。

「お前が、霸王であるはずがない」

剣先はジャルジエの首筋にあった。ほんの少し力を入れれば父を殺

した男を討てる、場所にあった。

シエラは手に力を込め突き刺そうとする。が、咄嗟に、本能的としか言えないジャルジエの動きの方が一瞬早かった。

「その細腕で俺が殺せると思うのか！！」

「っ！？」

剣先が平行に動き、自由を奪われる。

シエラの右の手首がつかまれ、寝台に押し付けられる。跳ねるように沈んだ右手から短剣がこぼれ落ちて、白い敷布を切り裂く。

鋭い音が自身の耳のすぐ近くで鳴り、シエラの視線はそちらへと向く。

白い敷布にこびりつくその、色。

「あ、」

それが何を意味するか、気づいたシエラは両の目を、おそろおそろ上方に向けた。

自身を押さえつける男の首元を見る、その、視界の端で、ぽたりと伝った血が、シエラの頬を伝った。

「わ、私は……」

さつと表情が青ざめる。

8歳の時、ウツディーンの屋敷を離れて学院に入ったシエラは、学問とともに、一通りの剣術は教えられている。が、殺意を持って人に剣を向けたの初めてだった。

「今更愁傷な顔をしてどうする」

シエラは決して、あの一瞬を逃してはならなかった。最後まで、突き立てなければならなかった。

「お前は、ルクレツィア王女ではないな」

鬱陶しいとばかりに首元の血を拭い、告げる。ジャルジエ自身によって止められた剣先は、彼の首の皮一枚かすただけだった。多少出血しているものの、放っておけば乾く程度のものだ。

それでも、もしここに誰かがいれば、傷の手当てをと叫んだらう。実際にそうするだろう侍女は控えの間にいるが、彼女達のいる場所

までやり取りは聞こえていないらしい。

この娘は王女ではない。

それを知ったジャルジエに生じたのは怒りだった。

否、怒りと表現していいものなのかも分からない。目の前の女はルクレツィアになりすましずっと、ジャルジエを殺す機会をうかがっていたのだ。

そんな女をジャルジエは王女と間違えた。

お前が、霸王になれるとでも。そうせせら笑ったシエラの声が、エーベルトの声と重なる。

殺戮者とあの男は言った。

最後の最後まで、ジャルジエを霸王と認めることはなかった。あの男は、死んでなお、ジャルジエを嘲る。

お前などが霸王になどなれるはずはない。

「エーベルト！ウツディーンの手の者か」

「つつ！」

肩をねじ切られるような力で押さえつけられる。男の容赦のない力に為すすべのないシエラは、突然発せられた父の名に、唯一自由な両の双眸で睨む。まるで、ジャルジエの言葉を肯定しているとは思えない反応に、彼の中に闇い感情が生まれる。

この女を、どうすれば苦しめることが出来るだろうか。

エーベルトのように刑場に送るか、或いは。

ジャルジエの口元に、歪んだ笑みが浮かんだ。

「つつ！？」

突然シエラの肩に押し掛かっていた重みが片方なくなる。咄嗟にそちらの方の肩を起こしかけようとするが、それより前に両手首をまとめて捻り上げられる。

ぴしりと布が引き裂かれる音が鳴った。

それが自身の衣が破られた音だと気づくより前に、割り開かれた太股が押さえつけられる。

目の前にいるのは、女だ。

泣き叫び、はいつくばりただ、許しを乞えがいい。

がたりと音を立て小さな身体が跳ねる。

ジャルジェは抵抗されるのすら面倒とばかりに、まとめたシエラの両手を裂いた敷布の布で縛り、男を一度も受け入れたことのないだろうそこを容赦なく引き裂いた。

想像していたような悲鳴はなかった。

代わりに、その瞬間、呼吸が止まり、噛んだ唇から血がはねた。

ジャルジェはただ強引に腰を進めた。その度に小さな声が漏れる。縛れた両の手は動かすことなどできないのに、それも何がつかもうとしているのが、指先が弱々しく動き、爪が敷布をかすった。

「や、い……や、……やめ……っ」

「先程の威勢のよさはどうした。それとも、よすぎて声も出ないか」そんなことがあるうはずがない。にもかかわらずジャルジェは、かすれた声で問いかける。

泣き叫べばいい、そうして跪け。

所詮女の身で、この力にかなうはずもない。

何度も跳ねる小さな身体からの反応は少ない。狭い場所に何度も腰を打ち付けているうちに、自分が組み敷いているのは人ではなかっただろうか、錯覚すら覚えそうになる。

シエラは抵抗らしい抵抗をしなかった。否、しなかったのではなく出来なかつたのだが、ジャルジェはそれさえも気づかず、普段ネイサにするように、シエラの身体を貪ろうとする。

ジャルジェもまた、追い詰められていたのかもしれない。

メサを出立する時、通り沿いに集まった民衆は、我々の大公こそが霸王になるに相応しいと歓声を上げた。代替わりをした後、内政に力を入れ、自国の発展に心を砕いてきた若き大公は、クセルクシアの民衆にとっては、慕わしくまた、尊敬すべき人物だった。

ジャルジェはシルベスタの予言など信じてなかった。が、信じてい

ないと言いながら、大陸の統一という野望を抱いたのは、その予言の存在故だった。父である前大公が戦いにあけてくれたからかもしれない。彼は、戦いを繰り返し力を削り合うばかりのような今の世界を変えたいと思い、予言の言葉こそが彼の肩を押した。その逆説にすら気づかない。

女神などいない、ただ役に立てばいいと言いながら、その化身と言われるルクレツィアを手にした彼は、或いは、彼女に手を、差し出してもらいたかったのかもしれない。

だからこそエーベルトに、王女の名を偽って現れたシエラに、苛立つているのかもしれない。

「声ぐらい出せ、萎えるだろう」

ジャルジエはシエラを見ようともしせず告げる。
返事はない。

自身の前に屈服するのを見たくて始めた行為だというのに、あまりの反応の少なさにふと、ジャルジエは動きを止める。体勢を変えれば喘ぎの1つもするかもしれない、そう思いシエラの肩をつかもうとした。

その時、その、視界に。血を見る。

最初に見たのは、切った唇にこびりついたものだった。

次に見たのは、太股を伝い、白い敷布を染めるものだった。

途中から動きやすくなったのはこの血のせいかと何気なく思い、ふとシエラの顔を見下ろす。

血の気を失った色味を失った頬には幾筋もの涙が伝う。切れた唇は痛々しくて、さすがのジャルジエの胸にも罪悪感が込み上げる。

「おい」

先程までとは異なり、幾分いたわるように声をかける。

「おい、お前……！」

「……殺せば……いい……」

あれ程力のあつた緋の双眸も今は虚ろだ。

「死なせ……」

その時、シエラが抱いたのは、死への渴望だった。

短剣を振り払われたあの一瞬が、シエラにあった最初で最後の機会だった。その機会を逃したシエラにはもう、ジャルジエを殺すことはできないだろう。

シエラは、負けたのだ。

ジャルジエにいいように身体をむさばられながらも、シエラはそれを、何処か遠いもののように感じていた。大きな力に翻弄される自分あまりに弱く、もう、どうでもいいと思ったのだ。

そうした時に浮かんだのは、死だった。

命令に応えることが出来なかった自分を大宰相は許してくれないかもしれない。それでも父の所に行きたいと思った。

もう、無理だと、思った。

だから、目の前の男に殺せと告げた。

目の前の男だけがシエラを殺すことが出来る。父を殺した憎いはずの男を、唯一の救いとさえ錯覚をした。

押さえつけた大きな手が、首を捻じ切ってはくれないかと願った。が、期待した衝撃は訪れなかった。

シエラの尋常ではない様子にジャルジエは彼女から引く。手の自由さえ奪われたシエラに出来ることは多くなかった。

が、その数少ない自由さえもが奪われた。

「馬鹿が！」

自身の舌を噛み切ろうとしたシエラに気づいたジャルジエは、容赦なく彼女の頬を平手打った。

二度、三度と打たれ、唇に新たな傷が出来る。ジャルジエにしては多少力を加減しているのだが、シエラにとっては大きな衝撃で、打たれた部分が赤く腫れる。

それでもシエラの渴望は消えなかった。そのことに気づいたジャルジエは一瞬思案をし、続いて、シエラの口に自らの手の甲を押し込みながら、声を上げた。

「永和の女官を連れて来い！！」

突如、寢所から響いた荒々しい声に、騒然となった。

控えの間にいた侍女は、寢所への扉の手前に膝を付き、いかなされましたかと問うた。それでも決して扉は開けない。いいと言われる前に扉を開ければ、ジャルジエが不機嫌になると知っているからだ。

ジャルジエは再び同じ命令を下した。

永和の女官を連れて来い。

何故突然そんなことになったのか、分からないながらも侍女は命令に従うべく、護衛の兵士達にそれを伝えた。

待っている時間はさほど長くはなかった。

既に仕事を終えた時間であり、まだ信用が置かれていない彼女達は1つの部屋に入れられ、部屋の入口には監視が置かれていたからだ。程なくしてジャルジエの前に10人程の女官が連れてこられる。

自らの手の代わりに布を口へと押し込んで一度シエラから離れたジャルジエは、扉の前でそのうちの2人に対して中に入るよう命じた。命じられた女官達には拒む術はなく、おそろおそろ寢所へと踏み入る。

刹那、1人は短い悲鳴を上げ、もう1人はシエラ姫様、と声を上げた。

「ほう、この娘、シエラと言うのか」

女官が思わず発してしまったことで名を知ったジャルジエは、彼女達に動くなと命じた後、再び寝台へと戻った。

シエラの口から布を取り、顎を掴む。

「分かるか、王宮に仕えていた女官達だ」

そう告げられるより前にシエラは彼女達を凝視していた。シエラの中に半分残る正気な部分が、彼女達の存在を放置できなかった。

2年間俗世より離れていたものの、彼女達のことは覚えていた。エーベルトの側近くに仕えていた女官のはずだ。

「昼間、この女達にお前を見せ、あれは王女かと問うた」

「」

「それに対し、そうだと答えた」

ジャルジエは突然話し出す。その言葉の意図するところをはかりかね、シエラは身構える。

「偽りだな、お前はシエラという名らしい」

「な……にを……」

痛いほどに顎をつかまれ、視線が合う場所まで押し上げられる。その時にはもう、続く言葉が分かる気がした。

この男はシエラの、最後の願いすら断ち切ろうとするのか。

「お前が死のうとすれば、今この瞬間、この者らを殺す」

「……」

「易々と死なせるわけがあるまい」

ジャルジエは淡々と、だからこそ決して偽りとは思えない声で告げる。

告げながら、自分は何を望んでいるのかと、胸の内で自問する。

この娘を生かしておく理由はなかった。死にたいのならば死なせてやった方がいいだろうと思いつながら、生きなければならぬ理由を作った。

代わりに殺すと言えばこの娘は死ねないはず、それが知っている者ならなおさらだ。

確信だった。

「死ねぬな、シエラ」

宣告のような声にシエラは押し黙る。

無言は肯定だった。

他の人間の、しかも自分の知っている相手の死を突きつけられてなお、気にせずに命を捨てれるほどに、シエラは狂ってはいなかった。けれど、生き延びる理由もなかった。

ただ呆然と目の前の男を見つめるシエラを、ジャルジエは放り出した。

自分は何故、こんな娘を生かせるのか。

偽者ならば、目の前の女官達より価値がないはずだ。そう思うのに、望みをかなえてやろうという気にはならない。

やがて、ああと思う。

自分はまだ、この娘に対して満足していないのだと。はいつくばり、許しを乞え。そして、自身が発した言葉を取り消せ。

ああ、そのためだ。

そう念じたジャルジエは、一層のこと、女官達の前で押し倒してみても面白いなどと想像し、笑った。

1章 アシユタルテ15（前書き）

続・色んな意味でR指定です。

1章 アシユタルテ15

2時間で民衆を集めろと命じられたザキは、ネイサを部屋へと送った後、それに従うべく近衛の部下を集め、城下へと走らせた。

彼自身城下に出、不安げな民衆達を先導する。

2日目の仕事となる部下達は手慣れたもので、少ない呼びかけで多くの民衆を集めていく。

長官は王宮に戻っていて構いませんよとさえ言われたのだがザキはそれを断った。昨日から一睡もしておらず身体は休息を求めているのだが、王宮に戻ったところで休めないことがよく分かっていただけだ。

気がかりは自身が連れてきた王女のことだった。

神殿の階段の前に現れた少女の圧倒的なまでの存在感、彼女は父王の死を知りながら自身の宿命を受け入れ霸王を待っていた。

そして、あの時。

父代わりと言っていたエーベルト・ウツディーンの処刑を遠巻きに見送った時、決して声にはならない慟哭を見た気がした。それでも自身が受け入れた宿命から逃げ出さない姿に胸が締め付けられた。どうしようもなく心捉われた。

そんなザキにジャルジェは、お前好みかと問いかけてきた。ザキには分らない。

彼にとつて彼女は、世俗からは離れた、言葉通り、女神を想像させるものだった。

けれど彼女は人だ。

父の死、父代わりの死、国の滅び、そして予言。あまりに大きな悲しみと宿命の上で少女は笑みを刻む。その笑みはおそらく、更に悲しみや苦しみを得てなお、崩されないと思うからこそ、これ以上そんな感情を抱えて欲しくないと思う。出来ればもっと、年相応の笑顔を見てみたいとさえ願う。

ジャルジエはそうは思わないのだろうか。

今までもザキは、何度もジャルジエが女性のもとに通うのを見たことがあるし、彼に頼まれ女性を寝所まで連れて行ったこともある。けれど、今回だけは傷つけて欲しくないと思う。

あの、単なる欲望のはけ口としか扱わないようなことはして欲しくない。そんなことを考え、ザキはため息をつく。せめて動いていれば考えずにすむかもしれないと思ったが、それはかなわなかった。結局、城下を走り回っている間中シエラのことを考え、いつの間にか時間が過ぎていた。

優秀な部下達は、命じられた時間通りに民衆を集め、今朝と同じ景色が視界に広がっていた。

王女を、晒すために集められた人だ。

確かに大陸の統一のために、ルクレツィアという存在は必要とは思ったが、組み敷いた女をそのまま引きずり出すようなやり方は納得がいかなかった。

それも、あの、少女だからだ。

集まった民衆を横目に王宮に入り、ザキはジャルジエの元に向かうべく重い足を引きずった。

ジャルジエは皆に出て行くように命じると、まるでそうしなければならぬように、再びシエラを組み敷いた。

シエラは相変わらず抵抗しない。

が、彼女が再び死のうとしないことは分かっていた。

シエラの命は今、女官という人質を介して、ジャルジエの手の内にある。

それで自分は満足したのだろうか、その解はジャルジエ自身にもなかった。ただ、そうしなければならぬかのように、無言のまま、何度も腰を打ち付け続けた。

それはザキがやってくるまで続いた。

「ジャルジエ様」

どのくらい時間がたったのだろうか、二度のノックの後、ザキの声が聞こえ、ジャルジエは動きを止めた。

「ご命令の件、民衆を集め終えております」

扉越し告げられ、ジャルジエはこの部屋に来る前ザキに命じたことをぼんやりと思い出す。

そう、王女をお披露目するためと民衆を集めるよう命じたのだ。

ジャルジエは感情のない目でシエラを見下ろす。長い間、ジャルジエの欲望の前に晒されていた少女は死人のような顔をして意識を失っている。それを何か、人ではない物のように思いつつ、軽く着衣を整え寝台から降りる。

「ジャルジエ様」

「ザキ」

扉を半分ほど開ける。その先に控えていたザキは、一呼吸置いて表情を変える。寝室に立ち込めた血の匂いに驚いたのだが、当然ながらジャルジエは気づかない。

「ジャルジエ、お前あの方を……！」

普段、人前では決して呼び捨てにするようなことはないのに、あの王女がと思うとザキは我を忘れた。

「王女は怪我をされて」

「ザキ」

思わず寝室に入ろうとしたザキをジャルジエの力強い手が押し止める。

「ジャルジエ？」

「シエラ、という名を知っているか」

「シエラ？」

「あの娘の名前だ」

「！？」

ザキは驚愕に目を見開く。あの偽者を俺を刺そうとしてきたぞ、そう告げジャルジエはかすれた笑い声を上げた。

「まさか」

「予言者の絵の女神の目は青、あの娘の目は青ではなかった」

あの娘は王女ではないと言い切る。

戸惑うザキをジャルジエはただ眺める。間違えたお前が悪いという罵りの言葉はない。糾弾したいわけでもない。ただ、淡々と告げる。「そう言えば女官はシエラ姫と言っていた。どこぞの貴族の姫かもしれないな」

「シエラ、姫？」

あの少女が王女ではなかったと、未だ信じられないまま、ザキはジャルジエの言葉を追う。シエラという名、貴族の姫、その2つと、自身の中にある永和の情報をつなぎ合わせていく。

永和は長く鎖国をしていた。まったく人の出入りがなかったわけではないが、王家の人間ならばともかく、貴族の姫の情報など他国に流れることは稀だ。

しかしながら、ザキの持つ情報の中に『シエラ』という『姫』の名は存在した。

「ザキ？」

「まさか」

彼女が王女ではなかったということすらまだ納得できていないザキにとって、達した解は更に信じがたいものだった。

が、確かにそれならば辻褄が合う。

父代わりだと言った、少女を思い出す。

あの、無言の慟哭は、父代わりのためにではなく、父その人のためのもの。

ゴクリと喉が鳴った。

「シエラ姫」

「ザキ？」

「確か、大宰相エーベルト＝ウッディーンのご息女の名が、そのよ
うな名前だったかと」

恐る恐るザキは告げる。

聞いた名にジャルジエは固まった。そして、一拍の間を置いて、自身の背後を振り返った。

「ジャルジエ!？」

続いて弾かれたように寝台に駆け寄り、意識のないシエラの胸倉を掴む。やさしさなど欠片もない動作で何度かゆすり、それでも意識が戻らないのを確認すると、二度ほど頬を打った。

シエラはぼんやりと目を開ける。無意識に目の前の男を視界に入れ、ぴくりと肩をふるわせる。

「もう…、いや…」

「お前、ウツディーンの娘なのか!？」

「」

揺さぶられ問われても、しばらく何を言われているかさえ理解できなかった。が、朦朧としていたシエラの意識は、何度目かの呼びかけに突如として呼び戻される。

「おい、答えろ」

「…それを、知って、どうするのです…」

肯定はせず、問いかけを返す。否定しないことが肯定を意味するということのような意識はなく、ただ本当に疑問に思ったことをそのまま言葉に発する。

発しながら、意識をはっきりとさせていく。

「お前が、ウツディーンの娘…?」

改めてジャルジエはシエラを凝視した。が、エーベルトの面影はシエラにはあまり見つけられない。本当は髪の色が同じなのだが、明かりの少ない場所では分かるはずもない。

この娘が、ウツディーンの娘。

ジャルジエはシエラの腕を掴んだまま、その意味を理解しようと頭の中で何度も繰り返す。

この娘が、ウツディーンの娘。

この、娘が。

突如、笑い声が上がった。

「お前がウツディーンの娘か！」

だからかと、自身の行動に納得をする。

エーベルトにシェラが重なった、あれは、親子だったからかとか、だからこの娘を許せなかったのかとか。今まで抱いていた澱んだ感情をすべて、親子だったという事実には押し付ける。

ジャルジエは笑い続ける。

おかしくてたまらない。今朝、殺したばかりの男がまだ亡霊のように漂って、此处で、娘という存在を借りて、ジャルジエを罵る。

シェラの背後にエーベルトを見る。

あの男はジャルジエを否定した。

一度殺したくらいでは死なないということか。ならば一層のこと、この女の胸に剣を突き立ててやろうか。

ジャルジエはシェラを見下ろす。一瞬、ジャルジエの視界からエーベルトの影が消え、哀れな少女の身体を捉える。

この娘は誰だ。

シェラ「ウツディーン、あの宰相エーベルト」ウツディーンの忘れ形見。

ああと、突如としてひらめく。

あの男は死してなおジャルジエの邪魔をする。

今ここにあの男の娘が偽者として現れたのも、あの男がジャルジエを罵り、嘲笑うためなのかもしれない。

あの男は、お前など霸王に相応しくないと言うために偽者の王女を送り込み、あまつさえ、ジャルジエを殺そうとさえたのだ。

「それほど王女が大切か、ウツディーン」

ならば、その大切な大切な王女など何の価値もないのだと突きつけるのも面白いかもしれない。

ジャルジエはそもそも予言の存在など期待していなかったはずだ。

ならば、中途半端に利用しようなどとせず、切り捨ててしまえばいい。

そして。

「ザキ、民衆を集めたと言ったな」

振り返り、ザキを見る。

ザキは息を呑む。目の前の、幼馴染みであるはずの男が何か、別のもののように思える。

冷たいものが背を貫いていく。

ジャルジエはこの時、自らが抱いた闇い感情ばかりを追い、衝動に突き動かされた。予言などどうでもいい、王女は利用するだけの存在と言いながら、決して王女の居場所を教えなかったエーベルトに剣を持って挑んできたシエラという偽者に苛立つ自身が、どれ程予言に捉われているのかを自覚することなく、シエラの腕を引いた。

「――」

傷つけられた身体がザキの前に露にされる。

一度殺して死なないのならば、二度、殺せばいい。

王宮側の広場には民衆が集まる。

民衆は、霸王と王女が現れるのを待っている。

王女はこの瞬間この場所に、ただ、存在さえすればいい。

「お前、王女の身代わりなのだろう？」

名を奪われ、存在すらも奪われ、女神様とあがめられ。

エーベルト「ウツデインが自身の娘を身代わりとして送り込んでまで渡したくなかったルクレティア王女の名を、偽りで踏みにじればいい。」

「そうすればお前は死ぬか、ウツデイン」

ジャルジエはゾツとするほど低い声でつぶやき、シエラの短剣で切り裂かれた敷布の片割れとともに、シエラの身体を抱き上げた。

1章 アシユタルテ16

ジャルジエはシエラを抱えたまま、早足で階段を昇っていく。

途中、ざわめきに気づいたネイサがジャルジエを追ったが、何かに憑かれたようなジャルジエの目は、まったく彼女に気づかない。

抱えられたシエラは、振動とともに走る痛みに表情を歪めた。

が、その腕から逃れようとはしなかった。そうしたところで今のシエラにはジャルジエの手を押しつける力はなかったし、彼の突然の行動の意味をはかりかねてもいた。

王女の身代わりなのだろうと問われた。

その問いに対する答えは、是だ。

シエラはエーベルトに命じられこの場所に来た。見極めよと言われたが、ルクレツィアではないシエラが見極めることに意味があるとは思えなかった。だから、殺してルクレツィアを守れと命じられたのだろうと思った。

が、シエラはジャルジエを殺せず、死ぬ自由さえも奪われ、今なお生きている。

身代わりとして命令を果たすことの出来なかった自分が、今更この男に何故、必要とされるのか分からない。

何故この男はシエラを放り出し、本物のルクレツィアを探しに行かないのだろうか。

シエラを何処に連れて行くとうのだろうか。

ジャルジエは階段を昇る。勝手知ったる王宮だ、シエラはジャルジエが向かおうとしている先にやがて気づく。

これは最後の階段だ。

この階段の先にあるのは。

「ルクレツィア王女」

ジャルジエは直前で立ち止まりシエラを見た。
名を呼ぶ。

シエラとではない、何故この男は今更、シエラを見ながらルクレツ
ィアと呼ぶのか。

シエラの身代わりとしての役目はもう、終わったはずだ。

「俺は予言など信じていない」

「」

「民が信じているのならば利用してやろう、そう思いザキに王女を
探させた。だが、女神を手になければ王になれないなど、あろう
はずもない」

「な、にを」

「この大陸の統一のために必要なのは力なき王女ではない、力だ」
だから、女神など女であれば誰でもいいんだ。そう言ってジャルジ
エが笑った時、シエラの背に冷たいものが走った。

エーベルトはルクレツィアを守れと言った。

ルクレツィアとよく似た顔をしたシエラは、王宮で大切に育てられ
るルクレツィアを尻目に、家を離れ学院に入れられ、そのまま神
殿の巫女となり、父の死すらも娘として見送ることも出来ず、こん
な場所に送り込まれ。

それはすべて、ルクレツィアを、アシユタルテを守るためではなか
ったか。

ジャルジエの言葉はシエラの胸の深く、彼女の根幹を作るものを容
赦なく揺さぶる。

「俺はこの大陸を統一する」

「！！」

「だからお前は俺のために、演技切れ」

本物に意味がないのならば、その偽者には何か、意味があるのだろ
うか。

ウルスラとアヤはその時、集められた民衆の中にいた。あまり目立
たないような場所を確保し、それでも心配だとアヤは周囲に目を走

らせる。

民衆の視線の先には王宮のバルコニーが見える。今は誰もいないその場所におそらく現れるだろうジャルジェと、彼の言葉を皆が待つ。
「先程、屋敷の前でクセルクシアの軍人を見ました」

ふと思い出したアヤはそれをウルスラに告げた。彼を探して最初エランヴィアの屋敷に立ち寄った時、家人と問答をする軍人を見たのだ。永和においてウツディーン家と並ぶ名門であるエランヴィア家の屋敷である。当然クセルクシアがやってくるのも想像できるが、彼が1人だったことと、1人でやってくるには高位すぎるとしか思えない軍服に違和感を覚えた。

「軍人が？」

「ええ、高位だと思われる方がお1人だったので気になったのです」
ああ、それ以上前に出ないでください。話しながらも決して警戒を怠らず、アヤはウルスラを後ろに下からせる。

ウルスラは苦笑しつつ、首を傾げた。

「高位の軍人か、知らんな」

「そうですか」

ウルスラの反応にアヤはほつと息を吐く。

ウルスラはエーベルトの前の大宰相だった。エーベルト亡き今、唯一生存する官僚のトップの経験者をクセルクシアが利用する可能性があると危惧をしていた。

「何用であつたのだろうな」

よく分からないという顔をしながら、ウルスラはやってきた高位の軍人が誰かと考えていた。

誰であっても、その行動は想像通りのものだろう。本来であればクセルクシアはエーベルトこそを取り込み、重用すべきだった。

それが出来ずあっさりと予言者の末裔を処刑したのは、クセルクシア大公の短慮さ故だろう。否、それ程の暴挙に出させたエーベルトの勝利と言った方がいいだろうか。

「何であろうと、私はもう、決めているが」

「ウルスラ様？」

ウルスラのつぶやきの真意を知ろうとアヤは問いかける。

が、それは最後まで言葉にならなかった。

アヤの方を向いていたウルスラの視線が、前を向く。周囲がざわめき、誰もが同じ方々を向く。

バルコニーの両側に立てかけられた、クセルクシアの国旗がたなびいた。

シエラを抱いたまま階段を昇りきったジャルジェはその先の、バルコニーに出た。

眼下には集められたたくさんの民衆が見える。

昨日はエーベルトの処刑を見るために集まった彼らが、今日はジャルジェと、『アシユタルテ』を見上げる。

この民衆、永和の国民は皆、霸王の出現を待っていた。予言の成就こそを願っていたはずだ。こんな小さな内陸国で鎖国をしていては、いかに優秀な官僚がいたとて国が栄えるはずもない。

永和は、滅びるのが宿命だった。

それを具現すべき『女神』は今、ジャルジェの手の内にある。目の色が、髪の色が異なる、けれど絵の女神の面影を持つこの少女を、誰も偽者だとは思わないだろう。

王宮の奥深くに飾られた絵を、一体どれだけの者が見たことがあるのだろう。

所詮皆、欲するのは名だけに過ぎない。

「皆」

発せられた声にその場が、多くの人の気配を感じさせながら、しんと静まる。

「このジャルジェ・フォン・クセルクシアの名にかけて、永和王家を滅ぼした者として、この大陸を統一し、このシャーンに再び、彼の女王の治世のごとき繁栄が訪れんことを誓う」

ジャルジエははつきりとした口調で告げる。

シエラは肩をふるわせた。目の前の男がこの時、初めて見せた真摯な姿に動揺する。

ジャルジエが告げた言葉に偽りはなかった。大陸の統一と、かつての栄華を取り戻すという強い意志が、東の若き大公をシャーンに引き寄せた。

ただ、偽りなのは。

「シャーンの民にアシュタルテよりの祝福を」

続いて、シエラにくちづけを落とし、言葉どおり、女神の祝福を民衆に分け与えるように空いた片方の手を大きく広げる。

刹那、とどろくような歓声が上がる。

永和王家の滅びは皆の希望だった。滅びこそが霸王を生む。この国はそんな皮肉を抱えたまま400年、細々と生き延びてきた。

その霸王が今、この場所に立っている。

シエラは呆然とした。

シエラが殺そうとした男が、永和の国民に祝福され、霸王と認められる。

彼に抱き寄せられる『女神』が、偽者のシエラこそが、ジャルジエが霸王たらんことを知らしめるのだ。

（私は誰）

シエラは胸の内で自問を繰り返す。はっとして違うと叫ぼうとしたものの、かすれた喉からは声が出ない。例え声が出たところで民衆の歓声にかき消されるくらいのものだっただろう。

（この男は誰）

ジャルジエはシエラにしか見えない角度で笑った。

本物のアシュタルテになってみた気分はどうだと小声で問われる。

「違う、私は」

否定しようとしても目の前の現実が突きつける。シエラという個などどうでもいいのだと知らしめるような歓声に、彼女をぎりぎりのところでつなぎ止めていたものが決壊をする。

突然、抱きかかえた少女の重みがなくなったような気がして、ジャルジェは思わずシエラを覗き込んだ。

「シエラ？」

呼びかけるのに反応した様子はないのに、シエラは顔を上げる。

露になった双眸に何ら意思はなく、けれど、そうすることが必然かのように頬に笑みを刻み、言葉を刻んだ。

意思など持たない人形がただ、風に吹かれ髪を揺らすように。

「ジャルジェⅡフォンⅡクセルクシア、我が覇王に、…アシユタルテの加護を」

シエラはシエラという自我を放棄し、生まれてこのかた自身の意思により道を選んだことのない彼女という『器』は、隣立つ権力者の言葉の前に跪いた。

1章 アシユタルテ17

アッサワはシャーンから東の公都メサに抜ける街道沿いの町である。また、シャーンからリディア、ラステイニア、イシス、の各国へと向かうための街道もアッサワを基点としており、この町はかつて、フィレンジア・セラ最大の商業都市であった。

しかしながら、永和が実施した鎖国により、数百年に渡りこれらの街道は閉じられてきた。各国の大公がシャーンを訪れる際など、数年に一度の例外があったものの、シャーン・メサ間のみとは言え、正式に街道が開かれたのは正に300年以上ぶりといってよかった。この大陸の統一を目指す者にとって、全盛の時代の古都にして永和王家の直轄領、大陸の中央に位置するシャーンを押さえていることはあらゆる意味で重要な事項であり、ジャルジェも当然ながら、自身の拠点をメサからシャーンに移動することを考えていた。そのため、シャーンおよびシャーンからアッサワまでの街道を押さえ次第、多くのクセルクシア商人をシャーンに移住させようと考えていた。

また、永和王を討ったクセルクシアに対し他国がどのような動きを見せるかという懸念はあったものの、続いて他国との街道を開くことも検討していた。

しかしながらこの時、他の3つの街道は未だ開けないどころか、メサとの間の街道についても、自由な往来を認められない状態だった。アッサワはシャーンへの侵攻の際、クセルクシア軍の通り道になった。途中、多少の戦闘は避けられなかったとは言え、かつての栄華からは想像できないほどに廃れてしまったこの町は、早々にクセルクシアの軍門に下った。

ジャルジェはこの町を將軍の1人に任せ、1000人程の兵士を残した。わずか2000人程の農業を中心とした町に対して残された陣容は十分であり、1000という数を置いたのもアッサワという

要所に対し敬意を払ったという面が大きかった。
実際、民衆は従順であり、支配は容易いと思われていた。

アッサワには『地下』が存在する。

何故、そのようなものを作ったのか、否、その存在を知る者さえもが少なかった。

16年前、当時の大宰相ルトザ・ウツディーンは、その位から降りる直前、『地下』の建設を命じ、実際の建設は次代の大宰相位に就いたウルスラ・エランヴィアが当たった。そして、機能させ始めたのは更にその次代の大宰相、エーベルト・ウツディーンだった。

『地下』は16年間、常に動いていた。

そして、クセルクシア軍がシャーン侵攻を開始したと伝わった時、その動きは顕著となった。

『地下』には煌々と明かりが灯され多くの者が行き交っていた。

そこを周囲の者達とは趣きを異にする1人の女官が、繊細な硝子細工の茶器を持って歩く。

『地下』は深い。

その『地下』の深く、再奥まで向かった彼女は、重い木の扉をゆっくりと開ける。

扉の先には1つの部屋があり、幾重にも重なる布が部屋を2つに分けられていた。

中に入った女官は、入ると同時に聞こえる声に大きく目を開いた。

「して、彼の方はなんと」

「手はずどおりに、このことでございます」

「しかし、クセルクシアも強引なことをやったものだな」

「…はい」

5人ほどの女官が控える場所で、1組の男女が小声で話をしていた。その片方、影の者の装束を纏った女は、女官の姿に気づくなり膝を

つく。

「これは、御前失礼を致しました」

「来ていたのか」

女は視線を伏せ女官は複雑な視線を彼女へと向ける。女官が見ている以上、決して女が顔を上げることはない。それが分かっているからこそ女官の方が最初に動き、布によって隔たれた内へと向かう。

「水を、お持ち致しました」

女官は膝を付き、恭しく礼を取る。女官という立場ではあるが、高貴な家の出である彼女が臣下の礼を取る相手は多くない。

「ルクレツィア様、お加減はいかがでございますか」

女官の言葉に、長椅子にゆったりと座った少女の顔が上がる。

灯された明かりの下で、青の双眸が露になる。

「大事ありません」

ルクレツィアは唇を緩め、たおやかな笑みを乗せた。

ジャルジエがシャーンを陥落させてから6日後、彼が『アシユタルテ』とともに民衆の歓迎を受けて3日後、それは突如として勃発をする。

アッサワにおいて突如民衆が蜂起し、クセルクシア軍の将軍が捕えられたのである。

2章 騙り1

はつきりとした口調で、けれどまったく感情の伴わない声が告げた。
「ジャルジエ」フォン「クセルクシア、我が覇王に、…アシユタル
テの加護を」

シエラはジャルジエの前に頭を垂れた。

その時、ジャルジエは咄嗟にシエラの顔を覗き込もうとした。

確かにこの場にシエラを連れ出したのはジャルジエだ。苛立ちの勢いのままに演じると命じ、彼女から逃げ場を奪った。

が、シエラから発せられた言葉はジャルジエが予想したものではなかった。民衆の歓声によりかき消されてしまう声、ジャルジエのみに聞こえるだけのものならば、言葉に意味はない。

直前に何故か、小さな身体の重みが、なくなった気がした。

何が起こったのか気づいたのは、バルコニーから屋内へと戻り、明かりの下で改めてシエラを見た時だった。

「シエラ？」

ジャルジエが掴んでいた手の力を緩めると、重力のままに、意思を失った身体は床に沈もうとした。慌てて引き摺りあげようとした時、上向きになった表情に息を呑む。

先ほどジャルジエを糾弾した緋の双眸は、何に視点を合わせようとせず虚ろにさまよい、唇からは色が失われていた。

「我が覇王に、加護を」

祝福か或いは呪詛か。否、どちらでもない、本を棒読みするかのよ
うな抑揚のない声に、背に、冷たいものが走る。

剣を突きつけられる、まだそちらの方がましかもしれないと、今さらながら思う。

「シエラ姫様」

2人を迎えた中の1人、ザキは、シエラの様子を見やった後、複雑な視線をジャルジエへと向けた。

ジャルジエの腕の中に16歳の、いたいけな少女がいた。

ジャルジエの闇い感情に傷つけられた少女の顔は、当然ながらエーベルトのものなどであるはずもなく、叩き付けられた容赦のない仕打ちに自我が失われていた。

機械仕掛けの人形がジャルジエを祝福する。

今さらながら、自身がやったことに怯える。

この娘は、誰だ。

エーベルトの亡霊、とは思えなかった。そう思うにはあまりにも目の前の少女は哀れだった。

目の前にある、自身の行為の結果に、我に返ったのかもしれない。抱いたのは後ろめたさだった。

恐ろしいものを見るかのようにシエラの腕を掴む自身のそれを見る。力任せに掴んだ手首は細く、こんなに力を入れては折れてしまうのではないかと思い、慌てて手を放す。

ぐにやりと足が曲がりシエラはその場に崩れ落ちた。それでも痛いと言うことなく、再び発する。

我が覇王に加護を、と。

「やめる」

ジャルジエは強い声で命じ、踵を返す。これ以上シエラを見ているのが嫌で、彼女を置いたまま逃げるように立ち去る。

ジャルジエ、とザキが呼んでも彼は振り返ることはなかった。同様に近くにいたネイサが追いかけていく。

シエラは、ジャルジエがいなくなっても変わらず、覇王を祝福し続けた。

まるでそれこそが、自身が生きる意味であるかのように。

ヤーフェ・クリスタ將軍が毎日供も連れずに城下に出ておられる、そんな話がジャルジエまで届いたのは、それから2日後のことだった。

ヤーフェは元はと言えば前々大公、ジャルジエの祖父の時代からクセルクシアに仕えてきた重鎮である。祖父から父の代へと横滑りしていった軍上層部の多くはジャルジエが大公位に就いた時に軍を引かせた。引き摺り落とした父の遺産を抱えていては、自身の治世が立ち行かなくと踏んだからである。

そんな中、ヤーフェはジャルジエの元に残った。無謀に戦場を広げていく前大公に異を唱えた彼は、ジャルジエに忠誠を誓い、彼の元に軍を取りまとめたのである。当然ながら信頼は厚い。

「城下にか」

「はい。部下の激励に、というわけではなく、毎日貴族の屋敷を訪れているようです」

「貴族の？」

ザキが振ってきた話にジャルジエは首を傾げる。

永和王家が滅びた後、永和軍は一度解体され、選別の上、クセルクシア軍に再編成されることとなっている。他の3国との微妙な情勢などを鑑みれば、決してヤーフェが暇なはずはないのだが、一体何をしているのだろうか。

「ジャルジエ様が何か命令されたものかと思っていたのですが」

ジャルジエの反応は意外だったようで、ザキの口調がわずかに変わる。

ジャルジエはちらりとザキを見る。

今、この部屋には誰もいない。にも係わらずいつもの言葉に改めてこないのは、この2日間変わらない。始まりは明確だ。あのバルコニーの1件からずっと、ザキはジャルジエに何かを言おうとし、けれどそれを留めているようだった。口を開けば出てくるのは文句しかないのかもしれない。だから、口調を正し、必要以上のことを口走らないようにしているのだろう。

それに居心地の悪さを覚えてもそれを指摘しない。そうすることでジャルジエは逃げていた。

あの娘はどうなったのか、喉元から出てきそうに出てこない場所に

常に抱く言葉がある。

寝苦しい1晩の後、幾分冴えた頭で考えたのは、何故あんなことをしてしまったのだろうということだった。

あの娘はエーベルト・ウツディーンではない、そう気づいた時に抱いたのは罪悪感だ。例え彼女がここにやってきたのがエーベルトの意を含んだことだったとしても、たかだか16歳の少女にできるのは父の敵と剣を振り回すくらいのことだっただろう。例え一振り何処かを切りつけることができたにしても、万が一にもあの細腕がジャルジエの命までもを奪うことはできなかった。

何故あの時、見逃してやる度量がなかったのか。

結果を思い出すにつけ、苦いものが込み上げる。

自分も、追い詰められていたのかもしれない。

永和を滅ぼし、エーベルトを処刑した。霸王になると意気込んで来た身にエーベルトの言葉は辛辣だった。

霸王になる、その野望は、決してすべての人の歓迎の下にかなえられるのではない、当然のことを突きつけられ、ひどく、苛立ったのかもしれない。

あの娘を、どうしたらいいのか。

大宰相が王妹との間にもうけたのだというシエラは、永和においてはおそらく、王女に続く高貴な女性といってもいいだろう。

が、ジャルジエにとって王女以外は意味がない。それなのにジャルジエは、王女の名を騙らせてしまった。

あの後も変わらず王女を探させ続けている。見つけたらどうするのだろう。シエラと取り替えるのだろうか。王女など名ばかりだと言いながら結局王女を欲しているのは滑稽とさえ言える。

そうしたらどうなる？

「ジャルジエ様」

しばらく考え込んでいたジャルジエをザキが怪訝そうに呼んだ。

「クリスタ將軍には私の方から確認しておきましょう」

「いや、いい」

ヤーフェの話をしていたのだと、ジャルジエは顔を上げる。告げた否定の言葉は思案の結果のように受け取られているだろうか。

「その貴族、名は聞いているか」

思い出したように尋ねると、ザキは複雑な表情を浮かべた。それで既に調査済みだと知る。誰かを密かにつけていたのだろう。我が国きつての將軍にすら警戒を怠らないあたりさすがは近衛長官と言ったところか。確かに、不可解ではある。

「エランヴィア家の屋敷を訪れておられるのかと」

「エランヴィア？」

知った名にジャルジエは驚く。

永和の双頭、東のエランヴィアに西のウッディーン。力ない永和王家が何故400年も生き延びたか。確かにシャーンに攻め入ろうとする気概がある者が出なかったというのもあるが、2大名家が代々優秀な臣下を差し出してきたというのも大きかった。

「あの、エランヴィアか」

「おそらく」

「確かに不可解だな」

ええとうなずきザキはジャルジエの言葉を待つ。命じれば詳細を確認しておくということだろう。しかしながらジャルジエはそれを拒んだ。

「俺が確認をする」

「ジャルジエ様」

ザキは露骨に嫌な顔をする。署名を終えた書面の束をザキに渡し、ジャルジエが立ち上がったからだ。首をこきりと鳴らし上着を取り上げる。

「危険です」

「お前、俺を誰だと思っている」

ジャルジエはニヤリとする。

「供は必要ない」

既にお見通しならば話は早い。既に今日中に署名すべきものは済ん

であり、後はザキが部下に指示を与えれば足りる。

元々メサでは暇を見つけては城下に降りていたような人物だ。今まで王宮で大人しくしていた方が寧ろ意外と言える。ジャルジエは国の状況は自身の目で確かめることを善しとしている。部下を信頼していないわけではないが、書面に落とされた時、それが故意ではないにせよ肝心の情報が失われることがままあるからだ。ついではかりに娼館まで巡られるのはたまったものではないが、ジャルジエのこのような行動をザキは好ましいとは思わないものの、間違っていないと考えている。

ジャルジエが負けるような相手は早々にはいない。供はいらないと言われている近衛は形無しなのだが、おそらく、1人でなりたいたのではないかとも思う。

「城下には兵を配してはありますが、気をつけられますよう」
「分かっている」

短い思案の末、苦々しくも承諾をしたザキの脇を通り過ぎ、ジャルジエの方が先に部屋から出て行く。

残されたザキは、驚いた見張りの兵に部下の名を告げ呼びに行かせる。それとなくジャルジエの行き先に近衛を配置するためだ。

ザキはため息をついた。

手にした書類に視線を落とし署名の横の走り書きを軽く目に通す。

臣下としては喜ばしいことなのだが、いつもながら手抜かりのない仕事ぶりを目にしつつも、苦々しい思いは消えない。

ジャルジエが外に出るからではない。

あの姫をどうするのか、口元まで出掛かっていながら、今日も聞くことができなかった。

確かに最初間違えてしまったのはザキだ。けれど、あれ程までに容赦なく傷つけてしまったことに対しては憤りしかない。

どうしてこんなことになってしまったのか。

ジャルジエは気にしているような素振りは見せない。けれど、決して気にしていないわけではないと伝わってくるから追求すること

できない。幼馴染みだ、決して全く心のない人物ではないことはザキが一番よく知っている。

ザキはこの後、部下に書面を渡してから行動を考える。

おそらくあの、冷たい部屋を訪れるのだろう。

気がかりでならなかった。

何よりも憤りを抱くのは、自我を失ってしまった少女が呼び続けるのが『霸王』ということだ。

なんて皮肉か、彼女は自身を傷つけた『霸王』を待っている。

遣り切れないと、能面のような顔を思い出す。

あの少女に。

今のシエラに、神殿でザキを見下ろしたあの、双眸の強さはない。

「あの馬鹿、どうするつもりだ」

本人がいなくなってからようやく口調を戻したザキは、しばらくしてやってきた部下にジャルジェの警護を命じ、仕事に取り掛かるべくその場を辞していった。

2章 騙り1（後書き）

ザキさんは苦勞人です…。

2章 騙り2

エランヴィアの屋敷を見つけるのは容易かった。

特に確認することなく城下へと降り、東との言葉通り馬を東に向けた。途中、商人らしき男に道を聞いたのだが、当然のように場所を教えてくれた。やはり、この国においてエランヴィア家は有名な。

大通りから曲がり東の方角に向かう。通りさえ見つけてしまえば後はどうということはない、一番奥にある屋敷がエランヴィア家だった。

ジャルジェは馬から降り入り口の大きな門へと視線を向ける。

既に彼は来ていたらしい。

「ヤーフェ」

門の手前側で話しているのはヤーフェである。そして、彼の向かい側にはこの屋敷の侍女だろうか、女性が受け答えをしている。

將軍の名を呼び捨てにできる者は多くない。侍女との話を止め、ヤーフェは驚いたように振り返る。息を詰める音が続く、けれど名は発せられない。ジャルジェはこの時上着を着ていた。さすがに大公が1人で城下に出ているとばれるわけにはいかないので軍の支給品を着てきたのだが、名を出してはならないと咄嗟に判断したらしい。

「何故、このような場所に」

「お前がこの屋敷に執心だと聞いたものでな」

だから来たと当然のように告げられヤーフェは内心頭を抱える。ジャルジェが城下に降りることは驚くべきことではないが、それはメサであることが前提だ。

しかも、彼がここにやってきたことがいいのかどうか判断しかねる。ヤーフェがエランヴィアの屋敷を訪れ始めて3日がたった。

その間、もっともらしい理由をつけられて、未だウルスラ・エランヴィアとは会えていない。

戦勝国の将軍がわざわざ会いに来ているのだ。敗戦国の人間ならば腰を折って迎えるのが当然だろう。が、そうはならない。ヤーフェの方も幾分、強引に出にくい立場でもある。

或いはウルスラ「エランヴィアという男、自分を高く売ろうとしているのかもしれない。ならば、将軍ではなく大公直々にやってきたとなれば門を開けるだろうか。が、それはあまりに軽々しくはないか。

或いは。

敵と、なる気か。

考えすぐに否定した。ヤーフェはエーベルト「ウツディーンという男が告げた最後の言葉を基本的には信頼していた。ジャルジエに暴言を吐き続けた意図は分らない。が、あの穏やかな笑みを浮かべていた男が、ただ闇雲にジャルジエを否定していたとは思えない。

そのエーベルトが残した名、しかもあのエランヴィアだ。

役に立つ男であればクセルクシアの臣下として組み入れ、特にシャーンの安定に当たらせたいとヤーフェは思っていた。何しろ永和の名門だ。

ただ、王女が未だ見つからず、代わりにシエラが送り込まれてきたことが懸念の種だった。あれもまたエーベルトの策略だとしたら、既に亡き男がヤーフェにここに来させた意図は何処にあるのだろうか。

だからこそジャルジエに知らせる前に自分が先に会い、見極めたいと考えていたのだが、実際にここまで来てしまったのでは隠せないだろう。内心でため息をついたヤーフェは、告げ口したのは近衛あたりかと想像をする。ザキ「リミットは有能な男である。

「お会いしたい方がいるのです」

「エランヴィアの当主か？」

「当主かどうかは分かりませんが、ウルスラ「エランヴィアという方です。お忙しい方らしくなかなかお会いできないのですが」

そうであつたな、とヤーフェは苦笑じみた視線を侍女らしき女性に

向ける。が、彼女は返答することなくヤーフェ、ではなくジャルジエの方を向いていた。

「この方の、御名は？」

そして、冷やかな声で問う。

先ほどまでヤーフェに対し、主人は手が放せないのですと申し訳なさそうにしていた女の表情が豹変する。

殺気を隠そうともしない。

はっとしたヤーフェは無意識に束に手をかけ、ジャルジエをかばうように自身の位置を変える。

ちらりと女性に目を向けたジャルジエは内心驚く。

この女、本当に侍女か？

おそらく相当な使い手だ、と構えようとしたものの、解は程なくして告げられた。

「クセルクシア大公、ジャルジエ」フォン「クセルクシア様、ですね」

「そなた、侍女ではないな」

ジャルジエの双眸にも剣呑なものが走る。

彼女は名を尋ねてなどいなかったのだと知る。そう、『御名』と敬称を告げた、敢えてそう告げたのは既に知っていたからだ。

「侍女で、ございます」

「名は、何という」

名前を取ろうとするジャルジエに向かって彼女は笑んだ。

悲しい、悲しい笑みだ。今にも泣きそうな顔をしながら、まるでジャルジエを親の敵かのように睨みつけてくる。

「アヤ、……エランヴィアと申します」

アヤは硬い声で告げた。

エランヴィアという名にクセルクシアの2人は顔を見合わせる。

そうだろう、彼らが会いたいと言っているウルスラ「エランヴィアと同じ姓だ。分かっていたからこそアヤは敢えてその名を名乗った。普段は決して名乗ってはならない名だ。」

「ウルスラ」エランヴィアの」

「ウルスラは父でございます」

あっさりと肯定しながらアヤは首を振る。目の前の男達に名乗りたい本当の肩書きはこれではない。

肩がふるえる。

緊張に冷たくなった手を胸元にのばし潜ませた短剣を掴みたい衝動に駆られる。

この男はクセルクシア大公で、シャーンを滅ぼした。おそらく今、この大陸の覇者となるのに最も近い場所にいる人物だ。

が、アヤにとってそれは、ある意味どうでもいいことだった。

「クセルクシア大公、そなた、シエラ様に何をしたっ！？」

その場の空気を切り裂くような問いかけにジャルジエは言葉を失う。が、次の瞬間、ジャルジエはアヤの腕を掴む。

「ジャルジエ様！？」

ヤーフェは頭を抱えたい気分になる。

女性に対し、しかもエランヴィアの令嬢かもしれない者に対し、取っ払い行動ではない。が、シエラという名は今のジャルジエにとつては何にも勝る導火線だ、そのことはヤーフェにも伝わってきている。

「お前は、シエラを知っているのか」

「私は、シエラ様の侍女です」

「侍女？」

「シエラ様に会わせてください」

ひどいと全身で訴える。

遠目に見ただけだ。けれどアヤには分かる。クセルクシア大公に抱えられ『ルクレツィア』として現れた。それがどれ程の痛みを生んだか分からないはずがない。

大宰相の最後の命を受けた時の覆い隠された悲しみを知っている。アヤが腕の拘束から逃れようとする素振りを見せると、それは思った以上に簡単になう。

シエラの侍女かと、ジャルジエは呟いた。

その時、新たな足音に最初に気づいたのはヤーフェだった。門の向こう側から人が1人、こちらに向かってくるのが見える。

ジャルジエ様と呼ばうとした。立ち尽くしたアヤは足音に気づかず地面を睨んでいる。

穏やかな風情の、エーベルトよりは年上に見えるもののヤーフェよりは年下だろう男だった。

細められた双眸が、苦笑しているようにも見える。

この男だと、直感だった。

「ヤーフェ」クリスタ將軍」

「貴方様は」

「そして、ジャルジエ」フォン」クセルクシア、…大公殿下であらせられますね」

ヤーフェではなく、当然のように、一般兵士の上着を纏ったジャルジエに礼を取る。

「ようこそお越しを。このような場所で立ち話をしていては人目につきましよう。お入りくださいませ」

ウルスラの背後ではアヤが、まるで護衛のように控えていた。最初のあの剣呑な表情は変わらない。彼女の言葉は喉元の口に程近い場所にある。ほんの少しでも均衡が崩れれば爆発する、そんな危うさを放ちながらアヤは黙っている。

ウルスラがそれを命じたからだ。

この2人は本当に親子なのだろうかと多少興味を持つものの、ジャルジエもヤーフェも言葉にはしない。

そんなことのためにここに来たわけではないし、ウルスラ」エランヴィアという男の存在がそれをさせない。

初老の男は一見、穏やかな雰囲気醸し出している。が、その穏やかさはエーベルト」ウッディーンが持っていたものと似ている。

そして。

ああそうだと、ヤーフェはエーベルトとは違う男を思い出す。そう言えば年も同じ頃かもしれない、決してどんな時も笑みを崩すことなく、皮一枚裏側で何を企んでいるのか分からない。南、ラスティニア大公ウィラ・ラスティニアに似ているのだ。

それはそのまま、目の前の男が優秀であると認めたということなのだが、だからこそウルスラが何故2人を迎え入れ何をしようとしているのか簡単には判断できない。そもそもたった2人でこんなところまでやって来たのは間違いではなかったか。ウルスラ本人はともかく、アヤはおそらく、かなりの使い手だ。

「さて、まずはクリスタ將軍、日々通っていただいていながらお会いできずに申し訳ありませんでした」

「いえ」

ウルスラはあつさりと自身の非を告げ、頭を下げる。しかしながら、ヤーフェに何故と追求させない雰囲気醸し出す。別に殺されると恐れていたわけではないし、高くとまっていたわけでもない。ただ、3日にも渡って会わなかったことには理由があつたのだが、それは今、2人に告げるべきことではない。

「そして今日、何故大公殿下がお越しのなられたのかは多少図りかねるのですが、用向きを伺ってもよろしいでしょうか」

ヤーフェは喉を鳴らした。

この場で答えなければならぬのはジャルジエではなくヤーフェだ。ただ既に、ウルスラはもう知っているような気がする。

あの、最後の言葉は。

2人の間で仕組まれたものではないのか。

その意図は、何だ？

「あの命を粗末にした男が私の名でも遺しましたか。このウルスラ」
「エランヴィア、前大宰相の名を」

ウルスラは相変わらず笑みを崩さない。

前大宰相という言葉にヤーフェは息を呑む。確かにエーベルトが告

げた名だ、ただ者ではないとは思っていたが、前の大宰相と言われ
多少なりとも驚かないはずがない。

「確かに永和は不可思議な国です。力弱き王の元貧しく暮らしなが
ら日々霸王の誕生のみを待ち望んできた。そんな国をこれから支配
するのに何人か、永和の者を取り立てたいという気持ちがあるからな
いわけではない」

「エランヴィア殿」

「でも、だからこそ不思議にも思うのですよ。何故、今さら私のと
ころに来たのかと」

ひたりと、細められた双眸がジャルジェを見る。

何故、エーベルトを殺したのか、とは問わない。

単純に能力だけで考えればエーベルトは最適な人物だっただろう。
現大宰相だ、内政のすべてを知るあの男は、その地位に値する優秀
さを兼ね備えていた。

しかし、王が先に自害し、大宰相の元で軍は動かされていたのだ。
その責を問わせることは戦勝国として彼を殺したのはやむを得ない
こともある。何より、例えそれに目をつぶったとしても、エーベ
ルトはジャルジェにひれ伏すさなかつただろう。

あの男は死に急いでいた。それどころか、あの日、死ぬことを使命
とさえしていた。

エーベルトは再びシエラに会うつつもりはなかった。

あの男が為した、ジャルジェへの慈悲は、ウルスラの名を遺し、シ
エラを引き合わせることでたった。

「大公殿下、ご存知ですか」

ウルスラは突然口調を変える。この国の次代の大宰相を選ぶことが
できるのは現代の大宰相だけなのですと、突然何の脈絡もなさそう
なことを話し始める。

「大宰相が次代の大宰相を選ぶ」

「この国では正しく大宰相を選べるほど賢き王は、もう何代も出て
おりません」

そして、大宰相が次代の大宰相を選ぶ基準はただ1つです。その者が次代の大宰相足りえるか。相応しい者であれば家柄も年も、性別も問いません。当初よりの教育の賜物か、ウツディーンやエランヴィアから出ることは確かに多かったですが、街角でのたれ死にかけていた孤児が大宰相まで登りつめたこともあります。そこまで告げてウルスラは一度言葉を切る。ジャルジエもヤーフェも相変わらず話の展開に困惑している。

更にウルスラは話を進めていく。

「エーベルトを次代に据えたのは私です。あの時私はまだ40にもなっていないかった。が、エーベルトの才にひれ伏し、早々に地位を譲った。あの男は優秀だった。生まれる場所を間違えなければ今頃、殿下の出現を待たずともあの男が霸王となり、この大陸を統一していたかもしれない」

「ウツディーンが、霸王に」

ジャルジエの表面が引きつる。自身を差し置かれたこともあるが、永和とともに散った男と霸王という言葉が馴染まないと思った方が大きかった。

しかし、ウルスラはあっさりとジャルジエの言葉を打ち消す。

「大宰相になった者なら誰もが思ったでしょう。我々が、弱き王を殺したてまつらんと一度も考えたことがなかったと、本当に思われますか」

エーベルトも考えたしウルスラも考えた。エーベルトがそれを諦めたのは別の理由だが、ウルスラが諦めたのは、自身の若かりしころにはアシユタルテは存在しなかったからだ。

女神を手になければ霸王になれない。霸王でなければこの大陸は統一できない。

霸王ではなく永和王を殺した者をなんというか。

大罪人だ。

その罪を背負って突き進む強さはウルスラにはなく、結果、可能性を打ち消した。

これを弱さでなくして何というのか。

「しかし、女神が」

問うたジャルジェの声がかすれていた。

責めるような口調にウルスラは気づく。ジャルジェは今、誰よりも女神を欲しているのだと。

ジャルジェはこの400年誰もできなかったことを成し遂げた。彼が大陸を統一するに値する者であるかどうかを問う前にウルスラはおそらくエーベルトも、自身が為せなかったことをやり遂げたことをまず賞賛する。少なくとも自分には出来なかったことだ。

そして、女神という『名』に縋ろうとする弱さをも理解する。

しかしながらジャルジェの問いには敢えて答えなかった。彼はまだ何も、知らなくてもいいからだ。

だから代わりに告げる。ウルスラが突然唐突のない話を始めたのに、はもちろん、意味がある。

「私はエーベルトの才能の前にひれ伏した者です。そのエーベルトが選んだ次代が誰か、ご存知ですか」

「ウツディーンが選んだ、次代？」

「ええ、私が不思議に思ったのは、私の力を借りようとする前に、その者の力を何故借りようとしなかったのかということですよ」

エーベルトは貴方に、前代と次代の大宰相を教えたはずですよ。

ウルスラは笑みを深める。

教えたという言葉にジャルジェは思わずヤーフェを見る。しかしながらヤーフェが聞いたのはウルスラの名だけだ。

「聞いておりませんが」

恐る恐るヤーフェが答えると、ウルスラはわざとらしく首を傾げる。

「おや、既に殿下のお側にいると思いますが、あれは、何処かに逃げ出しましたか」

ウルスラ様と、初めてアヤが口を挟む。

ジャルジェは自分の側にいる永和の人間を思い浮かべた。

解体中の永和軍の兵士がいる、あの中に優秀な者がいるのだろうか。

または、文官だろうか。

或いは。

ジャルジエはウルスラを凝視する。

ふと、近くにいる者を一人、思い出したのだ。

「エーベルトはあれを、ゆくゆくは大宰相に据えるつもりでいました。もし、殿下という存在が現れなければ確実に」

「まさか」

「エーベルトの一人娘にして私の大切な教え子、あの娘の方がこの老いばれよりずっと役に立ちましょう」

揶揄するような口調だった。

その娘にお前は何をしたのだと糾弾するようにジャルジエには伝わっただろうか。

それでよかった。

けれど、ウルスラはただ事実を伝えただけだった。

処刑されたエーベルト「ウッドレーン」は、『永和殺しを成し遂げた者』に自身の願いを託した。

故にエーベルトはシエラを、女大宰相という孤高の地位に立たせる代わりに、ジャルジエの元へと送り込んだのだ。

ウルスラはひっそりと笑った。

予言などクソ食らえだと言い放つエーベルトの声が聞こえるようだった。

2章 騙り3

ゆくゆくは大宰相に据えるつもりだったと言われた時、最初に抱いたのは驚きだった。

あの夜、シエラと一緒にいた時間は長くはない。その中で強烈に残っている彼女の顔は最後、バルコニーから戻った時に見た、人形じみたものだった。

代わりにそれより前、剣を突きつけてきた時やその後の、組み敷いた時の印象はあまり残っていない。そう言えば緋の瞳をしていたかと思ったりもするが、その強さは思い出せない。

その娘をエーベルトが選んだなどと言われてもすぐには信じられない。

しかもシエラは16歳で、女なのだ。

が、ウルスラの言葉に思うことはあった。

「シエラは、ウツディーンに言われて王宮までやってきたのか」

「あの娘はルクレツィア様によく似ています」

「しかし」

「瞳の色と髪の色が2人を異なる存在に為らしめる。ルクレツィア様は本物でシエラは偽者。我々は偽者をアシユタルテ神殿の巫女にし、本物を王宮深くに隠した。ただの永和殺しに易々と王女を奪われないためです」

ジャルジエが何かを言おうとするがウルスラはそれを押し止める。

描かれた女神と言ってもそれを実際に見た者はあまりに少ない。多くの者が知るのは『ルクレツィア王女が予言された女神だ』という事実だけだ。だから永和は王族筋の姫が代々巫女を務める神殿の巫女としてシエラを立てた。王妹エルザの娘であるシエラは立派な王族筋の姫だ。そして、少ない情報の中でクセルクシアはシエラとルクレツィアを間違えた。

しかし、本当にそれだけで間違っただのだとジャルジエは思っている

のだろうか。ウルスラは値踏みをするようにジャルジエを見る。ザギが間違えた理由の半分は確かに、永和の思惑によるものだろうが、もう半分は他でもない、シエラという存在故だ。

大宰相の地位をエーベルトに譲った後学術院の長となったウルスラは、シエラを次代とすべく必要な知識を叩き込んだ。

シエラはウルスラとエーベルトにより作られたと言ってもいい。

が、最後にシエラをシエラ為らしめるのは、彼らが与えたそれらのものではない。

ジャルジエが見たシエラは、どんなものだったのだろうか。彼はまだ知らないのかもしれないと考えつつ、おそらく興味があるだろう方向に話を振る。

「シエラが逃げることなく神殿で待っていたのは、エーベルトがそれを命じたからです」

予想通り、エーベルトの名にジャルジエの表情に緊張が走った。

「もし、このシャーンが陥落するようなことがあれば、お前はルクレツィア様より前に敵と見え、断じよ。霸王にふさわしき者であるというのならばルクレツィア様の元に、そうでなければその命を賭けて殺し、ルクレツィア様を守れ」

それがシエラが神殿に行くことになった時にエーベルトが告げた言葉だ。あの頃、苦々しい顔をして教えられたのをよく覚えている。

「あとは、…アヤ」

実際に引き金となる言葉を聞いていないウルスラはアヤに教えるようにと促す。一度ウルスラの名を呼んだきり再び黙っていたアヤは、相変わらずジャルジエを糾弾する視線を収めてなかったが、彼の命令に従う。

「直接は聞いていませんが、王女を偽り神殿でクセルクシア軍を食い止めよ、というようなことを」

「それが、エーベルトがシエラに残した、遺言です」

遺言という言葉に反応したジャルジエは苦々しげな表情を浮かべる。エーベルトは次代の大宰相をジャルジエに残したという言葉に、シ

エラが王宮にやってきたのはやはり、エーベルトの命令によるものだったのだと知った。

シエラは遺言に従って王宮にやってきたのだ。そしておそらく、ジャルジエが霸王でないと考え刃を向けた。

シエラはジャルジエを霸王とは認めていない、分かっていたことだったが、シエラがエーベルトに託された娘だと知るとなおさら、胸に重く押し掛かった。

霸王ではないからシエラをルクレツィアだと間違えた。霸王でないからこそジャルジエは未だ本物のルクレツィアの居場所さえ見つけていない。

永和を滅ぼした後ジャルジエがしたことは、大宰相の処刑とシエラに対する陵辱だ。

こんな男の手を王女は取るだろうか。

女神など利用するだけの存在だと言いながら、ジャルジエの中には常に、その女神の存在に縋りたい自身が存在している。

そして、改めてシエラのことを考える。シエラがエーベルトに命じられたのは、どういう言葉で飾ったとて、人殺しだ。

16歳の少女に直面するには、しかも実の父に直面させられたのであればなおさら酷な命令だ。にもかかわらずそれに従い、実際に遂行しようとしたシエラの状態は普通だったとは言い難い。そんな彼女に自分は何をしたのかと考えると、自身の非道さを理解するしかも仕打ちだけではない。ウルスラは遺言と言った。人殺しの命令を遺言としてしまったのはジャルジエだ。

せめて後1日処刑を踏みとどまっていれば、エーベルトとシエラが対面する機会があれば、こんな風にはならなかったのかもしれないと思い、例えそれが仮の話であったとしても、後悔を抱く。

城下に出たのはエランヴィアの屋敷に通うヤーフェが気になったというのもあったが、自身の気晴らしという面もあった。

が、結局、ここでウルスラに聞かされた言葉はジャルジエに更なる罪悪感を抱かせる結果となる。

おそらくこれからルクレティアは探すだろう。だが、ならばあのジャルジェによって民衆の前に引きずり出された娘は、どうしたらいいのか。

父のいない屋敷に返すか、或いはこのウルスラに託すか。

王宮に置き、父を殺した男を霸王と呼び続けさせるのはあまりにも酷だし、おそらくジャルジェも耐えられない。

しかし、シエラはエーベルトが次代の大宰相と決めたのだとウルスラは言う。そんな娘をややすと手放していいのかという打算がちらりと頭をかすめる。

前大公の時代に戦争にあけていたこともあり、未だ軍人優位のクセルクシアにおいて、それでなくとも優秀な文官は喉から手が出るほど欲しいものだ。

優秀な文官と言えばこの男もだと、前にいるウルスラに視線を移す。確かにこの男、聡明だと思う。穏やかな物腰は一瞬たりとも崩さないまま、おそらくらしくもなく饒舌に語り、ジャルジェの多くの情報を与え翻弄させる。

しかも元は永和の大宰相だ。

おそらくヤーフェも進言してくるだろう。が、彼がそれに応じるだろうかと想像し、ジャルジェは皮肉げな笑みを浮かべた。ひどく卑屈になっている気がする。

「エランヴィア殿」

ジャルジェは重い口を開いた。

「頼みがある。あの娘を頼めないか」

家臣になってはくれないかとは聞かない。確かにそう言いたいという思いはあったが、それより先に、頼みたいのはこちらだと自身に言い聞かせた。

今告げて、返答を聞くのが怖かったのかもしれない。

するとウルスラの表情に一瞬ではあったが、怪訝そうなものが浮かぶ。

「シエラをでございますか」

「貴方の教え子なのだろう」

「女神にされてしまったあの娘を、殿下はもう、必要ないと」

「壊した。あの娘はもう女神の身代わりにはなれまい」

「貴様っ」

ジャルジエの言葉に反応したアヤが詰め寄ろうとする。咄嗟にヤーフェが構えるが、ウルスラが2人を制する。

「やめよアヤ」

「しかしウルスラ様」

「いまさら詰め寄ったところで何も変わらん」

変わらず穏やかな物腰だ。が、言葉の端に含む怒りのようなものを感じ取り、ジャルジエの背に冷たいものが走る。

醸し出す存在感の重さに怯える。そしてその重さはエーベルトにも感じたものだと気づく。

ウルスラは問いただすように尋ねる。

「殿下はシェラを捨てると?」

「そういう意味では」

「では、どういう意味ですか」

ジャルジエは黙り込む。一度言葉を切ったウルスラは見透かすようにジャルジエを見る。

正気であればシェラが女神の身代わりなどを引き受けるはずがない。偽者であるからこそ本物を畏怖する。守るための身代わりならばいい、が、本物に代わり晒されるなど、耐えられまい。

それだけ追い詰めたのだ、この男は。

この男は霸王足りえるか。ウルスラの脳裏に問いが生じ、その解を得るために試そうとする。

「お望みとあらばお引き受けいたしましょう」

「エランヴィア殿?」

「ですがエーベルトにより霸王を見極めよと命じられた者です」

もしシェラが認めないのであれば、私も貴方を霸王とは認めますまい。

変わらぬ淡々とした口調で宣告する。

認めない者に仕えることはありません、と。

確かにジャルジェは永和を滅ぼた。

しかしウルスラが、エーベルトが、そしてシエラが否定する。

それをジャルジェは恐ろしいと思った。

これまで、弱きこの国を支えてきたのは彼らだ。彼らの否定はそのまま、永和の総意と言ってもいい。

ウルスラの双眸が取るに足りない者としてジャルジェを写す。

その時、彼らのいた部屋の扉が叩かれた。

シエラは王宮内の一室にいた。

南向きの日当たりのいい部屋だ。窓を開けると入ってくる風はまだ幾分冷たいが、陽射しは春めいて心地よい。

シエラは長椅子に腰をかけ顔を窓の方へと向けていた。

城下を見つめる緋は硝子玉のようで、懐かしい城下を彼女の目が本当に捉えているのかどうかは誰にも分からない。

「シエラ姫、失礼してよろしいですか」

ジャルジェから受け取った書類を部下に渡した後、ザキはシエラの部屋を訪れた。

入った途端窓から差し込む明るい日差しに目を細め、続いてシエラに目を落とした時、その陽射しが少しもシエラの心を癒していないことを知る。

呼ばれても振り返ろうとしないシエラにかかる影はそのまま彼女の凍ってしまった心を表わしているようだった。

神殿での印象が強烈に焼きついているザキにとって今のシエラは別人のようだった。

土産にと持ってきた果物を女官に渡し様子を聞くと彼女達は首を振るばかりだ。シエラが少しでも安心して過ごせるようにとエーベルト付だった女官を配しているのだが、彼女達と言葉を交わすことも

ないらしい。

あのバルコニーの件から3日、シエラは言葉通り、人形のようになった。

食べることも眠ることも忘れ、ただそこに存在する。そして、何が琴線ふれるのか時折、霸王を讃える言葉を発する。

まるでそれだけが存在意義かというような様子が痛ましい。が、ザキがいくらやめると言ってもシエラは聞かない。聞かないというより、言葉が届いていないような気がする。

これが自分が引き起こしたことの結果だと思ふとやり切れなくなる。確かにシエラをこうしてしまった直接の原因はジャルジエだ。しかし、神殿からシエラを連れてきたのはザキだ。

先に目の色を聞いておけばよかったと後悔をする。

が、あの時、シエラこそがルクレツィアだと判断したことを未だにザキは否定できない。

あの場所に現れたシエラはその存在感を持ってザキを圧倒した。

芝居だったとしてもあれが16歳の少女に為せるものか。しかもシエラはあの時、本物の父親の処刑を見送ってなお、その時浮かんだ悲しみさえもを女神と思わせるのに利用したのだ。

今、目の前のシエラにあの時の面影はまったくくない。

寧ろ本来の年よりも幼くさえ見える。こちらのシエラが本物のシエラに近いのだろうかと考えかけ、すぐに否定する。

どちらでもないと思う。この少女は心から笑ったことがあるのだろうか。

出来ることなら見てみたいと思う。明るい空の下、満面の笑みを浮かべるシエラは女神というには少し違うのかもしれないが、それでも十分に人の目を引き付けるだろう。

「姫、窓を閉めましょうか。風が冷たい」

話しかけても返事はない。

頭の片隅に、この少女をジャルジエから貰い受けることは出来ないだろうかという考えが浮かぶ。

ジャルジエはシエラを女神の身代わりにしたが、それでも身代わりだ。未だ本物の王女の搜索は続いているし、今のシエラではもう、無理だ。

自分であれば大切に慈しむだろう。

王宮から離れた場所で穏やかな生活を送らせてやりたいと思う。そこまで考えザキは苦笑した。

まるで恋でもしているようではないか。

何処かでそうなのかもしれないと肯定しつつ、改めてシエラを見る。不意に、シエラの口が開き、再びあの言葉が綴られる。

我が霸王に加護を。

その瞬間、窓を閉じかけたザキの背に冷たいものが走った。

「ジャルジエお前、何とかしろ」

吐き出すように告げる。

分かっている、今のこの少女を救えるのは『霸王』しかない。

自分はきつとシエラのために穏やかな場所を作れるだろう。が、それでシエラが救えるわけではない。

「女神ではないと言ってやれ」

ザキが乗せた願いもシエラには聞こえない。

が、その時、突如としてざわめきが走る。

「近衛様、近衛様はいらっしゃいますか…！」

控えの間の方から声が響いた。

女官はザキの持ってきた果物を用意しにでも行っているのだろう。

控えの間から彼女達の声は聞こえない。

ザキはちらりとシエラを見、続いてここにいると応じる。

シエラは誰の言葉も聞いていないと思ったからだ。

「此処で騒ぐな」

「近衛様、一大事でございます」

ザキの叱責にも謝罪1つしてこない。

それ程の一大事ということか。

「姫、少し外します」

兵士に部屋の前で待つよう告げ、ザキの方がそちらに出向く。

シエラのいる部屋と控えの間を隔てる扉がザキによって閉められる。直後、窓を向いていたシエラの視線は反対側へと動き、ゆらりと立ち上がる。

それは本能的な行動だった。

王女を演じよというジャルジェの命令に膝を付いたシエラは、それから、その命令の上をふわふわと漂っていた。

正気であれば決して受け入れられない命令を押し付けられ、民衆の前に押し出された時、確かにシエラの中で何かが壊れたのだろう。が、すべてを失ったわけではなかった。

ずっとジャルジェの言葉に支配され続けていた頭に、波紋のように、声が響く。

「お父様」

シエラはそつと、ザキが閉じたばかりの扉を少し開けた。

刹那、言葉が飛び込んでくる。

「アッサワで反乱が勃発し、我が軍は壊滅。イリアス將軍が捕らえられたようです」

「アッサワで反乱、どういうことだそれは？」

控えの間を出たところでザキと兵士が言い合いになっていた。シエラのことを警戒していないせいか、2人は声量を落としていない。

「詳しいことは現在確認しています。とにかく議場にお越しください」

「分かった」

足音が遠のいていく。

シエラは1人その場に立ち尽くす。

「アッサワで、反乱」

虚ろな声が綴る。

アッサワという言葉が頭の奥の方で引っかかる。

やがて、女官が食事を摂るのをやめたシエラのために果物を果汁にして持ってきてくれた時になってもなお、シエラはその場所から動

けずにいた。

「姫様、いかがなさいました」

長椅子から扉までは数歩に過ぎないが、シエラが自身で動こうとしたのはこの3日で初めてだった。心配と期待を織り交ぜて声を掛けてくる女官達ではあったが、シエラは彼女達に一瞥も与えることなく扉にもたれ掛かるようにして外に出る。

「シエラ姫様！」

くらりと揺れる身体に女官が思わず手を差し出そうとするがシエラはそれを払う。

「アッサワで」

一体、何が気に掛かっているのだろう。

その答えを自らの中に見つけることなくシエラは歩く。

「ルクレツィア様」

泣きそうな声は何を意味しているのかを分かる者は、この時シエラの側にはいなかった。

2章 騙り4

アッサワで反乱が起こった、その情報は程なくしてエランヴィアの屋敷にいたジャルジェとヤーフェの元にも届けられた。

とにかく王宮にお戻くださいとやってきたのは近衛の兵士で、ジャルジェとウルスラの会話を断ち切ったのはそれを告げる家人の言葉だった。

あまりに慌しい様子に火急の事態が発生したことを悟ったジャルジェは突然去る不躰さを詫びる。対するウルスラは急がれるのがよいでしょうと氣遣ってみせる。

「では、今日は失礼する」

「大公殿下」

暗にまた会うことを想定した物言いに応じるようにウルスラが呼び止める。

「殿下に1つ、お願いしたいことがあります」

「手短に済むことか」

「はい。明日、アヤとともに王宮に参ってもよろしいでしょうか」

「エランヴィア殿？」

突然の言葉にジャルジェは怪訝そうな表情を浮かべる。気が急いでいるせいか言葉に含まれる意図を読み取る余裕はないようで、あからさまに続きを促す視線を向けられたウルスラは思わず苦笑する。

「シエラとはこの2年会っておりませんし、是非会いたいと思っています。そしてアヤはずっとシエラに仕えていました。側にいれば役にも立ちましょう」

ごく自然な物言いだ。

しかしながらそれを告げたのがウルスラという事実がやはり、何か含むものを予感させる。そして、ウルスラの方にはもちろん意図はあった。ここで否と言われると、少しばかり厄介なことになるのだ。ウルスラはちらりとアヤに視線を送った後、何気ない口調で言を継

ぐ。こう言えばジャルジェが反応すると、分かっていた。

「もし殿下が本当に、シエラを私に頼むと仰せであれば、そのままこの屋敷に連れ帰っても構わないとも思っておりますが」

ウルスラの予想通り、ジャルジェは弾かれたよう彼の方を向いた。シエラを頼むと最初に告げたのはジャルジェの方だ。しかしながら、シエラが認めないのならば仕えるつもりはないと断言した男からそれを言われると、あっさりと肯定できないものがあるのだろう。

一度息を吐き出したジャルジェは急いた自身を宥め、改めてウルスラに向き直った。

ウルスラのこともある。が、そもそも自身はシエラをどうしたいのだろうか、改めて自問しようとする。

「ジャルジェ様」

焦れたヤーフェが促す。

ジャルジェは考えがまとまらないまま分かったとだけ返す。目の前の男が、ジャルジェの許可を前提としたものに自身の意図を左右させるとは思えなかったし、少なくとも2人とも、シエラの身を案じていると分かるからだ。

見知った人に会えばシエラの気も晴れるかもしれない。シエラの今の状態を見れば驚くかもしれないが、それも既に想定しているだろうと思えた。

「分かった」

「ありがとうございます、殿下」

屋敷を後にする2人を門まで見送りに出たウルスラは、彼らの後姿が小さくなるまでその場から動かなかった。

ただ、その頃には彼の表情からはきれいに笑みが消えていた。

「さて、お手並み拝見といこうか」

が、笑いをこらえるように喉が鳴る。

背後に控えたアヤは何も言わない。アヤはシエラの元に行かせてやるというウルスラの提案に乗り、昨日から今日にかけて、アッサワを往復し、伝言を伝えただけだ。

戻ってきたアヤに対し、ウルスラはジャルジェとヤーフェを招き入れることで応えた。今日ジャルジェがやって来たのは計算外だったが、より容易くかなったのだからアヤとしては構わない。

ただ、全く知らないわけではないが全てを知るわけでもないアヤは、何処かでウルスラの行動を疑っている。

アヤが第一に案じるのはシエラのことであつて、既に引退したとは言え、永和の臣下のトップを務めたウルスラの见ている世界とは異なる。そもそもエーベルトのシエラに対する命令だつて納得しているわけではない。

「シエラ様をこれ以上、傷つける気ではありませんね」

責めるような口ぶりにウルスラは目を細める。

「アヤ、お前はシエラに仕えシエラを守れ。そして、友人であればよい」

「ウルスラ様」

ウルスラはジャルジェ達が去つた方向から背を向け、歩き出す。慌ててアヤがついて行こうとするが下がれと命じられる。そして1人つぶやく。

「霸王為りえぬ者なら切れ、霸王足る者ならば選べ。緋を持つて生まれたお前に宿命というものがあるとすれば、それが、お前の宿命だ」

エーベルトの『願い』をかなえてやれ。

それはそのままウルスラの願いでもある。

願いを背負わされた者は決してそれを望まないかもしれないが、16年前、ルクレツィアとシエラが生まれた時、その場にいた誰もが願つたのだ。

あの忌々しい予言など壊れてしまえと。

戻る途中、アッサワでの反乱を教えられたジャルジェとヤーフェは、夕暮れ時の混雑する大通りであるのも構わず、馬の背に鞭を打った。

とにかくアツサワより戻ってきたという兵士からの報告を聞いたかった。

何故、あれ程にあっさりと陥落したアツサワで今さら反乱が起こったのか。

気がかりはあった。

「殿下、お帰りなさいませ」

門までではなく王宮の入口まで直接馬で乗りつけた2人を迎えたのは、近衛の長、ザキだった。

「お待ちしておりましたジャルジエ様、クリスタ將軍。主だった者は既に議場に集めております」

「既に報告は聞いたのか」

「一通りは。比較的軽傷だったためその者も議場に留まらせております」

「分かった、急ごう」

馬を部下に渡し、ジャルジエは足早に議場へと向かおうとする。後ろにはヤーフェとザキ以下、多くの護衛の兵が従う。

この階段を上り切り左に曲がった突き当たりが議場というところだった。階段の一段目を上り、顔を上に向けた。

その時、ドクリと胸が鳴った。

階段を昇りきった場所で、硝子玉のような緋の双眸が、真っ直ぐにジャルジエを見ていた。

「シェラ」

つぶやいたジャルジエはシェラの後ろに控えるように立っていた女官達へと視線を向ける。何故この娘がこんなところにいるのかという無言の問いかけに、彼女達もまた、困惑の表情を浮かべる。

それはつまりシェラ自身がここまでやってきたということだ。部屋に閉じこもり世界を閉じていた少女が、どんな理由であれ、多少なりとも外に視線を向けたということか。そうであればいいと、安堵

にも似た思いを抱く。

シエラは何も言わない。が、ジャルジエの方を向き、喉元を押さえる表情は、何かを言いたげに見える。

「シエラ、どうした」

急かそうとする者達にすぐに行くと言え先に行かせる。そうして、視線を合わせるために腰をかかめる。

それをらしくないと思う。が、目の前の少女をこんな風にしてしまったのは自分だ。

見たくないと思う。そして、今すぐ此処から立ち去らなければならぬ理由もある。

だからこの場からすぐに立ち去っていいのだと自身に言い聞かせつつ、もう片方で、何に優先しても、どんな罵倒でも聞かなければならないとも思う。

エーベルトの娘であるシエラは、彼が次代の大宰相にと選んだ少女なのだという。

しかしながら顔を覗き込んでみると、やはり何か違和感を覚えずにはいられない。

こんな小さな肩でこの大陸の未来など背負えるはずがない。

けれど、彼女はエーベルトに命じられ、此処までやって来た。

エーベルトはこの少女に選べと言った。

ウルスラはこの少女が選ばぬ者を認めないと言った。

彼女は、2人の大宰相によって託された存在なのだという。

ならば、今のこの硝子玉のような双眸が元の色彩を取り戻したならば彼女は、どうするだろうか。

彼女の視界の先に、この大陸の未来が存在するのだろうか。

「言いたいことがあるのなら言え、何でも聞く」

ウルスラの言葉のすべてを信じるわけではない、それでもシエラの告げる言葉を聞いてみたい気がした。

が、シエラは相変わらず言葉を発しなかった。怯えているのかもしれない。当然だ、と自身の今までの行為を省みつつ、反面で急かさ

れる。ジャルジェは今すぐにも議場に入り、詳しい報告を聞かなければならない。

「お前が構わないのなら後で、お前の部屋に行くが」

その時に聞くのでも構わないかと暗に伝えたと、シエラの肩がはねた。

その動揺をシエラの自身に対する恐怖心の顕れと受け取る。ジャルジェは1つ息を吐いた後、後ろに控える女官に部屋に連れて戻るよう命じた。少し休んで落ち着いた方が、いや、自分ではなく、例えばザキなどであればうまく聞くことができるのではないか。

はいとうなずいた女官達はジャルジェの言葉に応じるべくシエラの手を取ろうとした。

が。

「お待ちください…！」

その手をさえぎり、ついに声を発したシエラは、一歩ジャルジェへと近づいた。

発声の衝撃に弱った身体が耐えられなくなったのか、膝が曲がり、その場に倒れそうになる。

「シエラッ」

ジャルジェは咄嗟に手を出し膝を床に打ち付ける前に支えてやる。刹那、片手で容易くつかめる腰の細さに呆然とした。そして、思わず視線をやるうとした時になって、ようやく自身の行為に動揺をする。

メサでは毎日のように娼館に通い、自分が現れたと同時に女性達に囲まれるのが当然のような生活をしていたジャルジェにとって、これほど女性に対して戸惑うのは初めてと言っていい経験だった。

女性というよりは子供と対する時に似ているのかもしれない。16歳と言えば決して子供という年ではないが、小柄なシエラは少し力を入れると壊れてしまいそうな気がする。よくこんな少女にあれ程無体なことが出来たものだ、自分で自分が信じられない気さえる。

だからジャルジェはシエラが恐怖を露にする、その前に手を離そうとした。しかし、それより前にシエラの方がジャルジェの上着を掴んだ。

「シエラ？」

怯えた手の力は当然ながら弱いものだった。ほんの少し腕を振れば払うことが出来る。が、本来であれば近づくのさえ嫌なはずのシエラが必死に掴んだものを、簡単には振り払えない。

「シエラ、何が言いたい」

自分に出来る一番やさしい声だ、とジャルジェは思った。傷つけないように、大切に、あやすように、問いかける。すると、シエラは喉を押さえながら、かすれた声で告げた。

「アッサワに、行かないで」

「シエラ」

ジャルジェはシエラを凝視する。そして、シエラもまた、ジャルジェを見上げる。

硝子玉と表現した、世界を写すことをやめたようだった緋が揺らめきながら、躊躇いながら、ジャルジェを捉える。

ザキと兵士との会話を聞いた時、シエラの脳裏に浮かんだのはとにかくアッサワに行かせてはならないということだった。

何故だめなのか、アッサワに何があるのか、それらを考えるより前にただ、感情ばかりが込み上げた。

「お願いします」

「シエラ」

相変わらずシエラはジャルジェの上着を掴んでいる。

視線を最初に逸らしたのはジャルジェの方だった。

皮肉なことにシエラの必死の物言いこそがジャルジェに教えた。

アッサワにはルクレツィアがいる。

だからこそシエラは行かせまいとするのだと結論付けた時、一瞬、ジャルジェの胸中に、小さな肩をつかみ、揺さぶり、無理やりにも望む言葉を告げさせたいという感情が過ぎった。

が、実際にはそれに反し、片方の手でもう片方の手首を痛いほどに掴み、自らを押し止める。

生じた凶暴さのままに再び傷つけることを彼の理性が拒む。それにより得た結果が目の前に存在する。この少女の唇が再び霸王に加護を告げれば、ジャルジエはそこから逃げ出したい気分になるだろう。ならばどうすればいいのか。うなずいてやればいいのか、否定すればいいのか。或いは問い詰めればいいのか。

ジャルジエはどうしていいのか分からずただ、彼女を見下ろすしかなかった。

2章 騙り5

居心地の悪い沈黙はしばらく続いた。

やがてそれを破ったのは、ジャルジエでもなくシエラでもなく、ジャルジエを呼びにやってきた近衛兵だった。

シエラが弾かれたように顔を上げ、兵士を見る。

ジャルジエはシエラを気にかけてつも兵士の言葉にうなずいた。

急がなければならない、それは分かっていた。

それでもシエラのために時間を取った。それは彼女を優先しなければならなかったからだ。

想像していたのは自身に対する罵倒のようなものだったが、意外にもシエラはアツサワに行くなと訴えてきた。

罵倒ならば謝りもしただろう。が、彼女の訴えは聞き入れられるものではない。

シエラの言葉を欲する。が、それが手に入らないからといって、立ち止まれるわけではない。

ジャルジエは永和王を殺した。

もう、戻る場所はない。

「大公……！」

シエラは叫ぶように呼ぶ。

それには応えず議場へと足を向ける。

「アツサワに行くのはおやめ下さい」

その背に向かってシエラは再び繰り返す。兵士が気遣わしそうに見える。

ジャルジエは足を止めた。

抱いたのは自身と少女との間にある深い深い溝だ。それでも振り返った彼は、その時見たものに驚く。

緋の双眸が真っ直ぐにジャルジエの方を向いていた。

一時それに目を奪われた後、この目だったかと今さら気づく。

この王宮にやって来た日、ジャルジエと初めて対面した時も、シエラはこんな視線でジャルジエに対した。

闇い闇い、絶望にも似た、けれど強い、ジャルジエを殺そうと狙っていた目だ。

ジャルジエはそれを壊し虚ろな人形を作った。けれど、アッサワが引き金となつたのか『こちら側』に戻ってきた双眸に、あの時シエラを氣に入つたと言つた自身を思い出す。

あれはきつと、この目のせいだつたのだらう。

シエラはジャルジエの背に言葉を掛けながら、彼が振り返れば目を逸らした。ジャルジエもまた、何も告げることなく、今度こそシエラを置いて立ち去つた。

残されたシエラは、ぱつと顔を上げ、更に言及すべきだつただらう言葉を自らの胸の内に探す。

アッサワに行かないで。

あそこにルクレツィア様がいる。

ルクレツィア様は渡さない。

そつという言葉を見つけようとした。

が、シエラの中にそつという言葉はなかった。

アッサワという言葉がシエラを現実に取り寄せた。が、その先にあるのはそれを否定するような思いだつた。

エーベルトはシエラに命じた。シエラはその命に応えられなかった。そこでシエラの役割は終わつたはずだ。今、シエラがここにいるの

はジャルジエが女官の命を盾に取つたからで、そうでなければ今頃、既にエーベルトと同じ場所にいたはずだ。

もし、ジャルジエが霸王なのだとすれば、ルクレツィアは彼に会わなければならない。

もし、ジャルジエが霸王なのではないとすれば、ルクレツィアは彼を断じなければならない。

どちらにせよルクレツィアはジャルジエに会わなければならない。なのに何故、シエラはジャルジエを止めなければならないのか。

「大、宰相は」

シエラはぼつりとつぶやく。

大宰相は、シエラに、ジャルジエを殺せと命じた。

大宰相は、シエラに。

「選べと、言った」

シエラの思考はそこで止まる。これ以上考えることを恐怖し、その場に座り込む。

何を恐れるのか。

それが何であれ、怖いのであれば、死ねばいい。死ぬ術が奪われたのなら、命じられたように心を殺し霸王と讃え続けられたい。やめると言われるその、時まで。

所詮自分は、命じられた通りに生きるしかない存在だ。

シエラは1つ瞬きをしそのまま目を閉じようとする。

自身のすぐ側に深い深い、虚ろな世界があつて、そこに引き摺られてしまえば何も考えずにすむ。

そこに飲み込まれてしまえばいいと意識を飛ばそうとした時、姫様と呼ばれる。

ジャルジエとのやり取りを聞いていた女官の1人だった。この女官達と引き換えにシエラの命はジャルジエのものとなった。それを彼女らに責めるのは筋違いだと分かっているが、彼女の声は、シエラをぎりぎりのところで引き止める。

女官は座り込んでしまったシエラの側に膝を付き、氣遣わしそうな視線を向けてくる。

「お加減が悪いのですか」

もう1人の女官は2人を隠すような位置に立っている。

それは、ごく自然な動作だった。

主人の不調をいたわりながら、口をシエラの耳元へと寄せる。

息が掛かるほどに近い場所で告げられた言葉に、シエラの表情が固まる。

アッサワのことならば姫がお気をやむ必要はありませんと告げた女

官は続いて、シェラに容赦のない衝撃を与える言葉を発した。

「アッサワを率いておられるのはセトル將軍です」

「!？」

「そして、この件は学術院のエランヴィア様も関わっております」

「どう、いうこと」

シェラは横を向き、エーベルトに仕えていた女官達を凝視する。

彼女の言葉はシェラを、現実の世界に引き寄せる。

「ユリス様とウルスラが？」

どちらも知った名だった。

ウルスラ「エランヴィアはエーベルトの前の大宰相で、今は学術院の長として後進の教育にあたっていた。ユリス「セトルはエーベルトの信頼の厚い永和の若き将で、あと数年後には軍のすべてを掌握するだろう期待を受けた人物だった。」

かつて巫女となる日まで多くの知識を与えた父親代わりとして厳しくやさしく接してくれた人と、数度しか話をしたことがないものの許婚である人の名にシェラは知る。

主君を失った永和の生き残り達は、至高の存在を抱え、未だ足掻き続けているのだということ。

さて、お手並み拝見といこうか。

ウルスラがそれを発した時、同じ時異なる場所で、同様の言葉を発した者がもう2人、存在をした。

立場も思惑も同じというわけではない。が、言葉を向けた先もまた、変わりない。

アッサワで永和の残党が反乱を起こしイリアス將軍が捕らえられた。その情報を持ってシャーンに戻ってきた兵士とは別に、数時間後、アッサワ方面よりもう2頭の早馬がシャーンに到着をした。

最初の兵士とは異なり交戦し負傷したという様子はなかったものの、彼らが持ち帰った報告は更にクセルクシア側を騒然とさせた。

アッサワはシャーンの要である。

町の外れには他の4国へとつながる街道が存在する。

その1つ、シャーン・メサ間の街道はジャルジェのシャーン侵攻によって開かれたが、他の3つの街道は未だ閉ざされたままである。

ジャルジェはアッサワにイリアス將軍と1000の兵士を配置したのと同時に、3つの街道で永和の勢力範囲が届くぎりぎりの場所、国境となる3つの砦にそれぞれ500ずつの兵を置いた。

それは決して戦うためのものではなく国境警備とわずかながらの牽制のためのものだった。故にそれ程地位の高くない者に指揮を任せている。

裏での策略めいたものを予想しなかったわけではない、しかしながらこの時期に表立って動くことはないかと踏んでいた。少なくとも南と西、共に齡50を超える大公達は状況を見極めるまで高みの見物を決め込んでくると確信していた。

『何処からか』現れた永和の残党と交戦したアッサワ駐留軍は敗北、指揮官のイリアス將軍は永和側に捕らえられ安否は不明。その交戦の地はアッサワの中心より少し南東寄り、クセルクシアとの国境線の大きな部分に横たわるエトナ山の麓近くだったという。

対して、南のラスティニアおよび西のイシスとの国境近くに突如としてそれぞれの軍が出現した。交戦目的があるかどうかは判断できず。ただ、砦に配した者の調べではそれぞれ5000程の兵を国境手前に出してきたということだった。

アッサワの残党の件はイリアス將軍ともあろう者が不覚を取ったという点で予想外ではあったが、まだ想定の内だった。しかしながら、南と西の話はまったくの寝耳に水と言っている。一層のこと、北の暴君が兵を出してきたという方がよっぽど納得が出来た。

南にラスティニア、西にイシス、そしてアッサワに永和の残党。

何故このような事態が同時に起こったのか、判断するには情報が少なすぎたが、分かっていることがある。

3方に分かれる合計13000の軍に一度に対しなければならぬ

事態が発生したということだ。

永和の残党には心当たりがあった。彼らがアツサワまで移動するだけの時間が何処にあったのかは分からなかったものの、書面上、解体中の永和軍の数に3000程の差異が出ている。

シャーンへの侵攻は想像よりずっと容易く降伏も早かった。とてもではないが3000もの死者が出ているとは考えられないし、実際に死体も見つかっていない。

イリアス将軍が捕らえられたと聞いた時、ありえないと一度発した者達はやがて、この3000を結びつけた。

或いは、エトナ山に潜ませていたか。あの山にはそれ程の兵を隠せる場所が存在していたのか。

そんなことに思いを巡らせた時、ジャルジェが思い出したのは落ちて着き払ったエーベルトの顔だった。

あの時、表情だけ見れば勝者と敗者が入れ替わったようにも見えただろう。

あの男はルクレツィアを隠しシエラを王宮に送り込んだ。

これもまた、死してなお存在感を失わない男の策略ではないか。

あのあつさりとした降伏は見せ掛けのものだったとしたら？

王宮を明け渡して後の戦いを予想し、最初からアツサワに兵を隠していたとしたら？

そして。

1人でも多くの兵を残すために降伏をしたのだとしたら、大人しく解体されている兵士達すらじっと、蜂起を命じられるのを待っているのだとしたら？

けれど、エーベルト亡き今、誰にそんなことが出来る？

自らの胸の内に問いを投げかけ刹那、背筋が凍った。

思わず大きく見開いた双眸を、大きな鎌を背負った死神が通り過ぎていった気がした。

人ならば、いる。

前の大宰相ウルスラ・エランヴィア、そして、亡き大宰相が次代と

して選んだ、シエラ。

その内シエラの方はすぐに打ち消し、けれどウルスラならば出来るかもしれないと警戒する。

そうなれば13000ではなくそれ以上の数だ。しかも此処は永和のお膝元、クセルクシアにとっては慣れない土地と言っている。

シャーンはあっさりと陥落したと、思っていた。

が、寧ろ永和との戦いはこれからのなのかもしれないと想像し、ジャルジエは愕然とした。

エーベルトの笑い声が聞こえるようだった。

そしてシエラだ。

あの娘は今、どういう立ち位置にいるのか。何を知り、何を知らず、アッサワに行くなど言ってきたのか。

アッサワを攻めてルクレツィアを手にするどころか討たれるのはこちらかもしれない。

まさかと片付けてしまうにはあまりに揃った状況に言葉を失う。

議場での話し合いは長いものではなかった。

闇雲に想像したところで不確定要素は多かったし、何よりもとにかく、急ぎ出陣の準備を進めなければならなかったからだ。

終了と共に多くの者達が急ぎ動き出した。それを議場の中心に座りしばらく見つめていたジャルジエはやがて、立ち上がった。

今、彼に出来ることは多くない。寧ろ、常にこの場で報告を待つことこそが必要な役割と言ってもよかった。

しかしながら彼は、しばらく離れるとザキに言い残しこの場を立ち去った。その時合わせてウルスラ「エランヴィアを王宮に呼ぶよう命じる。

懸念は多くあったが、おそらく最も大きな懸念となるだろう男はジャルジエに言ったのだ。

もしシエラが認めないのであれば、私も貴方を霸王とは認めますまい。

あの言葉は、偽りか真実か。

そんなことを考えつつ真っ直ぐにシェラの部屋を目指した。

2章 騙り6

バルコニーから庭へと出たウルスラは、暗闇の空を見上げた。春を前に冴えた月が彼の上衣を照らし長い影を作る。

彼は待つていた。

内陸部に位置するシャーンでは、実際に春を感じるにはもう少し時間が掛かる。

花は、咲いているだろうか。

その時、ウルスラの影を邪魔するように、小さな影が月を遮った。影を作ったのは一羽の鷹で、その直前、ほんの少しだけ速度を下げたそれは、籠手をつけたウルスラの腕へと舞い降りた。鷹の足に括りつけられていた、書状を取り上げ、丁寧に折り目をのばす。

小さく小さくたたまれた間に、桜の花びらを見つける。

それはちよつとした『彼ら』の遊び心なのかもしれない。風雅な友人達の顔を思い出し、ウルスラの唇が緩む。

「旦那様」

その時、屋敷の内からウルスラを探す下男の声が聞こえた。

彼は緩んだ唇のままで表情を作る。

「今年もカルロツサの桜は、見事に咲いているのでしょね」

誰かに問うように発し、声のした方へと視線を向ける。

書状を持つ手を下げた時、花びらが数枚、風に乗った。

女官達を控えの間に下げシエラは1人長椅子から月明かりを眺めていた。

胸の内がさざめいている。その意味を測りかね、彼女は自問を続ける。

シャーンが陥落する前にルクレツィアは脱出しアッサワへと逃げた。

かつて交通の要所であつた町は、エーベルトによつて影の町へと変えられた。

あの町には多くの地下壕が掘られそれらはトンネルによつてつながっている。そして、普段一般民衆として暮らしているあの町の住民の多くは、本来兵士でもある。『影の者』とも呼ばれ息を潜めている彼らは、何かがあればルクレツィアを守るべき存在となる。

その数1500ほど。

シャーンが陥落する前、最初の前線となつたアツサワは簡単にクセルクシア側に降伏したのだという。それは、圧倒的なクセルクシアの軍勢力の前に万が一の勝ち目もないと踏んだ『影』達は、ルクレツィアのために無傷でいることを選んだということなのではないか。そしてあの、女官の言葉だ。大宰相付きだった女官の言葉を偽りとは思えない。そもそも彼女がシエラに嘘をつく必要はないし、もし彼女がその意図に従っているのだとすれば、シエラも味方として巻き込もうとするだろう。

ユリスがアツサワを率いている。

つまり、大宰相がユリスをアツサワの残党の指揮官として選んだ。優秀な軍人である彼は大宰相によつてシャーンで朽ち果てるという選択肢を許されなかった。

そして、あのウルスラもまた、アツサワに関わっているのだという。シャーンを明け渡したエーベルトは死に、生き残った者達がジャルジエからルクレツィアを死守する。

どれほどに大宰相はルクレツィアをジャルジエに渡したくなかつたのだらうかと考え、シエラは迷った。

彼は決してルクレツィアをジャルジエに渡すつもりはなかつた。当然だ、そうでなければシエラは何のためにここまでやって来たのか。すぐさま結論づけようとし、けれど寸前でとどまった。

不可解なことがある。

抱いた疑問を自覚した時シエラははっとした。自分の心を揺らしているのが『それ』だと気づいたからだ。

周囲はジャルジェとルクレツィアを遠ざけようとする。シエラ自身もその道具の1つとなり、失敗をした。

それは亡き大宰相エーベルト・ウッディーンの遺言と言っていい。ならば、シエラのこと、ユリスのこと、アッサワのこと。すべてエーベルトの意思だというのなら。

彼が、ジャルジェ・フォン・クセルクシアを否定しているというのなら、何故彼自身はこうもあっさりと死んだのか。

ジャルジェがそうしたからだとすぐさま解を出そうとし、シエラは感情的な自身を宥める。

確かに永和は弱かった。

長きに渡ってろくな王は生まれず、鎖国した厳しい自然の国土では、冬を生き延びることが出来ない者も多い。そんな、小さな国だった。永和はいつか滅びるのが運命だった。けれど、王も大宰相も死んだこの国が、現れた永和殺しの男の手を借りず、女神だけを守り、どうやって本物の覇王を見つけることができる。

大宰相は永和なき世界をどう描き、どういう信念をもってジャルジェを否定しようとしたのか。

否、彼はそもそもジャルジェを拒んでいたのだろうか。

シエラは大きく目を見開く。

1つ問いがある。

エーベルトはシエラに見極めよと言った。それをシエラは彼の否定として捕らえた。当然だ、シエラなどが覇王を見極められるはずもない。

何故見極められないのか。

それはシエラが選ぶべき者ではないからだ。けれどそれは、エーベルトも同様に当てはまる。

選ぶのはシエラでもなく、エーベルトでもなく、ただ1人、ルクレツィアその人しかない。

否定するも肯定するも、ルクレツィア自身がジャルジェを見て選ぶべきだろう。なのに何故、エーベルトはそれを逆行するような遺言

を残したのか。

自分こそが選ぶ者だとも驕ったのか。否、ならば何故、こんなにあっさりと命を放り出したのか。

更に疑問が続く。

シエラは緩く首を振った。生じた新たな問いに、エーベルトの行動への疑念は決定的になる。

何故、ジャルジエを否定するような遺言を遺しながら、あのエーベルトをして、これほどに中途半端なのか。

ジャルジエを殺すために送り込んだというのならば、確かにルクレツィアによく似た相貌が彼に近づきやすくなったものの、この細腕は明らかに役不足だった。そして、ユリスが率いることになったとて巨大なクセルクシア軍に対して1500という数では圧倒的に足りない。

シエラのことはあわよくばと捨て駒にしたと考えればまだ理解できる。けれどアツサワはどう考えればいいのだろう。

「まさか、他にも兵を残していた……？」

可能性がないとは言えない。エーベルトが本気でルクレツィアを死守するつもりだったのならば、1人でも多くの兵をアツサワに向かわせたという方が寧ろ自然だ。

1つ問いが片付く。が、それでも問いは残る。

「大宰相は」

父ではなく大宰相と呼ぶ。

大宰相はこの国の現状を憂えていた。優秀な政治家であつた彼をしても永和の困窮を覆すことは出来ず、多分、彼もまた、心の底では王家の滅びとその先にある覇王の出現、しいてはこの大陸の統一を期待していたはずだ。

もし、本当に、ジャルジエを否定していたのならば。

否定しながら永和の屋台骨であつた自身の命をこれほど簡単に散らせたのだとしたら。

「大宰相は、永和なき世界で誰がこの国を守ると考えておられたの

か」

こちらの問いには解は見つからなかった。が、解がないはずはないとシェラは父の姿を思い出す。

もし、解がないのなら、王なき国に残された人々はこれから先、一体どう生きていけばいいのか。

あの父が、永和の民を放り出したとは思えない。

シェラはしばらく考え込んだ。

自分は何か、何処かで、大きな思い違いをしてないか。

思案に入っていた彼女の表情は人形めいた、昨日までのシェラのそれとよく似ていた。

しばらく続いた沈黙を破ったのは、女官の、らしからぬ少し上ずった声だった。

「姫様は既にお休みになっておられます」

「お帰りくださいませ」

シェラは閉じていた目を開き、控えの間とを隔てる扉を見やる。

シェラのことを思いやってか、または同様にエーベルトから何かを命じられて王宮に残っていたのかもしれない彼女達が何かを含んでか、どういう意図であろうとこんな遅い時間にやってくる来客は1人しか思いつかない。

シェラはわずかな衣ずれの音を立て立ち上がる。

何をしに来たのだろう。

言っていたように、アッサワに行かないでくれと詰め寄ったシェラの話の聞くためだろうか。そうだとすればシェラは何を話せばいいのだろう。

アッサワにはユリスがいると知った今、再び行かないでくれと言え
ばいいのか、行けばいいと言えいいのか。

「アッサワには、ルクレツィア様がいる」

周囲は手を引き、2人は会うべきではないのか。
ゆるく首を振る。

シェラにはもう、アッサワ行きを止めるべきかどうか分からず、こ

れ以上の思考を放棄した。

何を考えたとして無駄だ。

所詮、シエラに決められることではない。

一度立ち上がりながら、再び長椅子へと戻ろうとする。

目を閉じて、女官達が追い返してくれるのを待った。

しかしながら、シエラが望みはかなわなかった。

お待ちくださいと諫める女官達の妨害をかわし扉が開く。その時目を閉じていたシエラは、けれども少しも驚くことなく目を開けて、現れたジャルジエを見つめる。

「いかなされました」

ドクリと心臓が鳴る音を聞く。けれど、落ち着き払った声で問いかけ、立ち上がる。

「お前は俺に言いたいことがあったのではないか」

「大公」

「アッサワに行くかと、お前は言ったな」

議場から真っ直ぐにシエラの部屋へとやってきたジャルジエは気が立っていた。

ここに来たのは後で続きを聞くと云ったからだと自身に言い聞かせながら、実際にはそうでないことを何処かで知っている。

女官達の妨害を遮ってようやく扉を開くのに成功し、立ち上がったシエラが自身を見ているのに気づいた時、この瞬間、細い首を捻じ切ってやりたいというような凶暴な感情が頭をもたげる。

先ほどアッサワに行くかと叫んだ少女は今、まるでジャルジエの動揺を知っているかのように何も言わない。けれど、真っ直ぐな視線が、今の彼女にはしっかりとした自我があることを物語る。

「お前も聞いたか」

クツと喉を鳴らし、1歩引きかけたシエラの肩をつかむ。

「アッサワに行くなとはもう言わないのか」

ほんの少し力を入れたただけだ。けれど、小さなシェラの肩にジャルジェのそれは強すぎたらしく表情が歪む。

「クセルクシア軍が負けたと聞いて、行かせた方がいいと思ったか」

「」

「シェラ」

「大公殿下!？」

「おやめくさいませっつ」

突然の暴挙に驚いた女官達が叫ぶ。

うるさい、邪魔をするな。

下がれと命じようと口を開きかける。が、それは他でもない、シェラによって遮られる。

「2人とも、下がちなさい」

「姫様」

「ですが」

「下がちなさいと言っています。私は大公と話すことがある」

視線を向け従えと命じる。

シェラには話すことなどもうなかった。そう思い、つい先ほどまでは帰ってくれとさえ思っていた。けれど入ってきた男の濁った目を見た時息を飲んだ。そして肩をつかむ手にわずかなふるえを感じた時、困惑した。

まるで何かを恐れているように見えた。

そう思った時、このまま帰してはならないと思った。

他でもない、シェラからの命令に渋々と承諾した女官達は開けっ放しになっていた扉を閉めた。その間もジャルジェはシェラの肩をつかんだままで、シェラまま、彼から視線を逸らさない。

「お前、セトル將軍を知っているか」

「セトル將軍は、大宰相が目をかけていた将です」

「ではそのセトル將軍が、行方不明になっているのは知っているか」

「行方不明ですか」

「知っているな、シェラ」

確信めいた問いかけにシエラは言葉を返さない。ジャルジエもまた驚かない。自分がこの部屋に入った時、アッサワに行くかと再び告げなかった彼女が、何も知らないとは思えない。

知ったのはつい先ほどか。それともあれは演技か。推し量りきれないままジャルジエは続けた。

苛立つ。

彼もまた自身の手のふるえに気づく。

刹那、シエラの肩から手を放した。目の前の少女がそれに気づいてないことを確認するように視線を向ける。

その時まったく表情を変えなかったシエラは、けれど続いた言葉の衝撃に思わず声を上げた。

では、これを知っているか。

部屋には2人しかない。それなのにジャルジエはまるで誰かに聞かれるのを咎めるように密やかに、シエラの耳元に口を寄せる。

「シャーンの残党が、3000は足りない」

「大公殿下？」

ピクリとシエラの肩が揺れた。そしてわずかではあるが表面に動揺が垣間見える。

一瞬驚きを見せたシエラは、すぐさま硬い表情を浮かべ、何かを思案するように視線をさ迷わせる。

「こちらは知らなかったか」

続くシエラの無言にジャルジエは乾いた笑いを上げる。

彼女の態度はごく自然なものに見えた。これまで演技と言われればお手上げだが、彼女がこの件に足を踏み入れているわけではないということに安堵をする。

その時、自分はこれが知りたくてわざわざ時間を割いてこの場所までやって来たのだと気づく。

何故、知リたかったのか。

解体中の永和軍を彼女が率いる、その可能性は一度排除した。女の身、しかも16という年でそんな大それたことが出来るとは思えな

い。出来る可能性があるとするれば、彼女ではなくウルスラだ。

何か情報を知っているかもしれない。もしそうならば聞き出したいが、この娘は基本、傍観者に過ぎないと考えている。

見ているだけで何の力も持たぬ者。

この少女は小さい。何の力も持っているはずがないと思わせるほどに。

「何をお考えです」

シエラを見つめたまま沈黙したジャルジェに、今度は居心地の悪くなった彼女の方が問いかける。が、それでもジャルジェはシエラから視線をずらさない。

けれどとジャルジェは考える。

シエラは本当に、ただの傍観者か。

今さら小さな情報1つ手に入れたいがためだけに自分は貴重な時間を割いたのか。

もしその通りだとしても、納得したなら戻ればいい。そう思ったものの、ジャルジェの足はまだ動かない。

「いかなさいましたか」

わずかに案じるような表情を浮かべ尋ねてくる。

その時、ジャルジェは息を飲んだ。シエラの後ろにエーベルトとウルスラを見た、気がした。

「お前は、何者だ」

意識するより前に問いを発し、手を取り上げた。

冷たい、体温を感じさせない互いのそれに、顔を上げる。

視線が絡み合った。

緋の双眸に垣間見せる怯えのようなものを見つけたジャルジェは胸の中で自身を嘲笑する。

こんな小さなものを傷つけたのは何故か。

それは、この娘がルクレティアではなかったからだ。ただでさえ戦いを終え、エーベルトの首を奪ったばかりのジャルジェは気が立っていた。

では何故この娘を殺さず生かせたのか。
傷つけてやりたいと思った。

あの時既に民衆は集められており、どんな女でもいいから『女神』
を必要としていた。

利用した。

「お前はどうぞすれば俺に従う」

目の前にいるのは力ないただの少女だ。

けれど、この少女をエーベルトは次代の大宰相として選び、霸王の
器を見極めよと命じ、ウルスラは彼女が認めない男など認めないと
言い切った。

この娘にそんな力があると、2人は本気で思っていたのか。

解はない、片方では半信半疑ながらも、もう片方で切実に望む。

自身の力のみを信じ、予言された女神でさえもを利用する駒だと言
い切っていた男が、その女神ですらない少女に永和を映す。

彼女は、永和によって永和を、託された存在だ。

「シェラ、認めてはくれないか」

「大公殿下？」

シェラはその時、まばたき1つ出来なかった。目の前の真摯な表情
に驚き同時に、この表情を知っていると、記憶を辿る。

そう、あの時だ。

シェラを引きつれ多くの民衆を前に、大陸の統一を高らかに告げた
時。

この残虐な男は、この400年、誰も出来なかった永和殺しの罪を
背負う覚悟を持って、シャーンを陥落させた男だ。

その男の、信念すらを否定してもいいのか。

「いや、俺はお前を傷つけた。許されないと言われても仕方がない」

「」

「俺はお前に父親を返すことは出来ないが」

シェラははっと顔を上げる。

あの時もこうして乞えばよかったのかもしれない。けれどそうせず

にジャルジエは、あの男を処刑台に送った。

永和を背負ってきた男の能力を見抜き、力を貸してくれと言えばあの男は手を貸してくれただろうか。

分らない。けれど、死んだあの男は自身の娘を、自身が次代にと選んだ者を、ジャルジエの前に遺してくれた。

その時、お前が本気ならばこの娘を手放すなという、エーベルトの声を聞いた気がした。

おそらく空耳だ。

それでもジャルジエはその声を信じた。

「シエラ、約束をする。俺は再びお前から何かを奪うことはない。

そして俺は、お前に大陸の統一を、永和を、見せてやる」

「大公」

「だからシエラ、見てはくれないか」

2章 騙り7

永和を、見せてやる。

その言葉を告げられたとき、大きく目を見開いたシエラは、ただただジャルジエを見つめた。

唇が何かを告げようとして震える。けれど何を言えいいのか頭の中でまとまっているわけではなく、言葉にならない。

目の前の男を許せないと思う気持ちがある、恐ろしいという気持ちもある。

けれど、と胸の内が続いた逆説を、シエラは一方で、自身のものではないように感じながらも、考える。

この男は霸王足る者か否か。

解はない。

解を下せようはずもない自分の解など、出なくても構わないのだろうと思っっている。

なのにこの男は何を言っているのだろうか。

シエラをルクレツィアの身代わりにし、民衆の前に押し出した男が、シエラ自身に何を望むというのか。

けれど、馬鹿馬鹿しいと笑うにはあまりにも真摯な声が容赦なく胸を打つ。

喉が鳴った。

怒鳴り散らしたいのか泣きたいのか、そのどちらもなのか、よく分からない。ただ、今声を発すれば、悲鳴に似たものになるのかもしれないと思った。

シエラは齒を食いしばり下を向いた。その時、ようやく自身の手がジャルジエとつながれていることに気づき、思わず振り払う。

「シエラ？」

「つつ」

自由になった手を痛いほどに手を組み合わせる。ほんの直前までつ

ながれていたというのに、それは冷たい。

「どう、して」

「シエラ、俺は」

「私などに尋ねるくらいならば早く、アッサワに行かれるとよろしいでしょう」

意外なことに声は落ち着いていた。が、鼓動は早打つ。

見極めよという父の遺言を思い出しシエラの頭の中で思考がぐるぐると回る。

この男は霸王足る者か否か。

何故お前はこの男にアッサワに行けと言うのか。

行くなと何故、再び剣を突き立てないのか。

それがお前の『選択』か。

耳を塞ぎ首を振る。

この王宮に來た時から、否、違う。おそらく、生れ落ちたその時から。

命じられるがままに生きてきたシエラに初めて選択という命が下された。

既に亡き父から、そして、その父を殺した男から。

それはシエラを現実の濁流の中に引き戻す。

シエラは頭を抱えた。

永和は滅び霸王は女神の力を借りてこの大陸を統一する。その先に彼の全盛の女王の治世がごとき永和が存在する。

幾度となく聞かされてきたおとぎ話は、部外者であるはずのシエラに、そんな言葉では片付けられない過酷さを突きつける。

この瞬間、此处以外の場所に逃げ出したいと思う。

まるで今在る場所を拒絶するように背中を丸めジャルジェから背を向けたシエラを、彼は見下ろす。

声をかけることも手をのばすことも出来ない。

そうした時、拒絶されることを恐れた。シエラの言葉を欲しながら、それが自らの望むものではないかもしれないと考えるとそれ以上問

い詰められなかった。

「遅い時間に悪かった」

だからジャルジエはシェラが次の言葉を発するより前にその場を辞した。

扉が閉まる。その瞬間、はつとしたシェラが顔を上げジャルジエの背中を見つめていたのだけれど、彼はそれを知らない。

アッサワに行け。

それはシェラにとって、ジャルジエを霸王と認めるということを意味していた。

けれどそれは今のジャルジエにとっては、死地に赴けという言葉にも似ていた。

今、シャーンに駐留するクセルクシア軍の中で、動かせる兵士は9000弱。その内7000程は南と西の国境に振り分けられ、残りの2000程がエトナ山へと向かう。

8000はヤーフェともう1人の将軍が率い、ザキはシャーンに残る。エトナ山に向かうジャルジエには参謀はおらず、地の利もなくしかもおそらく、数も足りない。せめてただの残党の集まりであればまだいいが、おそらく率いているのはセトル将軍だ。

あともう1000、兵士を連れていけないだろうかとも思うが、無理だと断じる。

戦いを前に、シェラの言葉を欲した。

緊迫した状況に心弱くなっているのかもしれない。

エーベルトによって託された少女の言葉に自らの勝利を確信したか
つたのだろうか。

が、言葉は得られなかった。

ジャルジエは重い足取りで自身の執務室への道を歩いた。

明日を怖いと思う。

それでもジャルジエは前を向いた。

明日、アッサワに向けて発つ。

アッサワを平定し、ルクレツィアを手に入れる。

そうしなければならぬ。

この大陸を統一し、彼の女王の治世がとき永和を。そのために霸王になるのだとジャルジェはメサを發ち、シャーンを陥落させた。既に賽は投げられたのだ。

ここで引き下がり、ただの永和殺しで終わるつもりはなかった。

あの娘に。

永和を見せてやると言った。

『お前に頼みがある』

『私に出来ることならなんなりと』

まるで隣の書庫から資料を取ってくれとでも言うような口調でエーベルトは言った。だからユリスもまた、軽く応じたのだ。

あの日、エーベルトは予想だにしない『頼み』をした。

シエラをもらってはくれないか。

一瞬言葉を失った。エーベルトが言ってきたのは、1回も若いまだ8歳の少女を自分の婚約者という話だった。

あの時エーベルトは但しと続けた。

『もし、あの娘が18になった時、私が大宰相でいられたらの話だな』

『何を仰せになります、エーベルト様にはまだまだ存分にご活躍していただかなければ』

『そうだな』

そうして何事もなかったように笑った。

もったいないと思ってみたり、12も年下の姫の相手が自分でのだろうか慌ててみたりもしたが、尊敬するエーベルト本人から義息子にと請われる誇らしさに、当時20になったばかりのユリスは素直に喜び、あの時頭を下げたエーベルトの真意を深く考えようとはしなかった。

地下の中心あたり、ひと際大きな壕の一角に陣取ったユリス「セト

ルは、布で覆われた空間の中で1人、エーベルトの言葉を思い出していた。

1つは8年ほど前、シェラの許婚にと望まれた時のこと、そしてもう1つはシャーンが陥落する前、アッサワに行けと言われた時のことだ。

8年前、エーベルトはシェラが18歳になった時自身が大宰相でいたらと、結婚について条件をつけた。そして陥落の前、ユリスがアッサワ行きにを承諾した後、少し寂しげに笑んだ彼は、お前を息子にしそこなつたなとつぶやいた。

2つの言葉が重なったのはアッサワに来て少し落ち着いてからだつた。

思い出した時にはつとした。エーベルトは8年前のあの日、既にこんな日を予測していたのかもしれない。

やがて、それも当然だと気が付いた。

16年前に王女ルクレイアが生まれ永和は女神を手にした。以来、霸王の登場を待ち続けていた永和は確かに、着実に滅びの道を歩み始めていた。

最初からあの方は永和とともに死ぬ覚悟だったのかもしれないと、シャーンからやってきたアヤの話を聞いた時にぼんやりと思った。

8年前、大宰相でいられたらと言っていたのは生きていればという意味だったのかもしれない。おそらく大宰相にとって、その位を降りることは死を、意味していたのだろう。

ユリスもまた、本来であれば既に死しているべき人間だ。にも関わらずエーベルトの命令により生き残された。

それでもシェラを妻にすることはもう、かなわないだろう。

永和の生き残りの高貴な存在は格好の政治の道具となる。第一の人である王女は崇められる地位ゆえに守られることを考えれば、実質上、最上の『戦利品』は彼女ということになる。滅んだ国の将などに手を出せる存在ではない。

婚約者と言っても話したことが数度あるくらいのことだ。恋愛感情

が沸くほどの関係にはなかったし、出来ることならば幸せになって欲しいとは思うものの、縁者に対するような切実な感情はない。何よりも、自分自身の命を長らえることなど考えていなかった。ルクレツィアがクセルクシア側に取られた時点で自分は討たれているか、或いはエーベルト同様処刑台に送られるかと想像していた。死を恐れることはなかった。

現世にまったく未練がないわけではないが、自身の命は既にシャーに尽きているべきものだという意識の方が強かった。

しかしながら事態は彼の予想外に展開をする。

シエラはルクレツィアの身代わりとしてジャルジェの前に突き出され、霸王がやってくるまで王女を守ることこそが自身の任務だと考えていたユリスには、アヤを介してウルスラよりアッサワのクセルクシア軍の、壊滅の命が下された。

それらはすべてエーベルトの意思だという。

訳が分からなかった。それでも敬愛すべき大宰相の遺言だという言葉にユリスは従い、敵の将を捕らえた。

その将は他の隊長達と合わせて柵で囲っただけの簡易牢に閉じ込め、見張りを置いている。

地下に潜む永和の残党は5000近く、決して小さくはない数だが、それでもクセルクシアに勝てる数ではない。戦上手の大公に掛かれば多少こちらに地の利があると言っても、敗北は時間の問題だ。シヤーンには多くのクセルクシア軍がいるし、本国から更なる兵を出してくることも考えられる。

アッサワでの戦いに勝てたのは単に向こう側の油断と数の差故に過ぎない。

こんな戦いを続けてどうする。

最後の1人になるまで戦い、殉じよとも言っのか。

ユリスは元々シャーンで死のうと思っていた身だ、自身のことならばまったく構わないが、多くの兵士を道連れにしたくないし、そもそもそうして戦ったところで何が得られるのかが分からない。

永和を滅ぼしたクセルクシア大公は霸王ではないのか。

もしそうでないとして、万が一こちら側がクセルクシア軍に勝利したところで、その先どうするのか。

東よりも南や西の方が霸王に相応しいということなのだろうか。そうだとするならば、もう少し兵を減らし、王女を連れてエトナ山に潜む方がよっぽど時間稼ぎが出来るというものだ。

ユリスは自身の行動の意味するところが分からず途方に暮れた。

指揮官の表情1つが軍の指揮に影響する場合があることはよく分かっていたが、さりとて部下達を鼓舞して勝利したとて、その先にあるものが分からない。

「アシユタル様、どうか我らに加護を」

思わず手を組み合わせる。

祈りの相手は、かの全盛の女王クレアツァ・ディアーナの2つ名であり、今はルクレツィアにも冠される、本来はこの大陸を守護する女神の名だ。

ユリスは決して信心深い方ではないが、軍人たる者、戦いの女神でもあるアシユタルテに縋ることも多い。そしてこの時、女神の輪郭として思い出したのは、ルクレツィアではなくシエラ、アシユタルテ神殿の巫女姫のことだった。

ユリスがシエラと最後に会ったのは1年前のそう、こんな頃だ。

4月、新たに兵士となった者達を引き連れて巫女姫の元を訪れた。

アシユタルテは元来、戦いの女神とも言われる。その女神に自身らの加護と永和の繁栄を願うため、儀式は毎年行われる。

12の階段の上に白い長衣を纏った巫女姫は立ち兵士達を祝福した。あれから1年、あの、年を裏切るように大人びた、すべての悲しみや憤りというものを打ち消して笑っていただろう人は今、どうしているだろうか。先日アヤから聞いた話を思い出せば胸が痛む。

大宰相の遺言により王宮に入り、クセルクシア大公により偽の女神として祭り上げられた。

大宰相は一体何を考え、シエラやユリスに。生き残った駒達に対し、

最後の一手を与えたのか。そして、その次を自分で踏み出さなければならぬ駒達の選択は、彼の望みと重なるのだろうか。望みは。

「どうか、この大陸に再び、永和を」

ユリスは腰に差した剣に手をかける。

分からない、分からないけれど自分は、命令に従うしかない。

出来ることならば自分の行動が、ほんの少しでも望みにかなうことをと願う。

もしかしたらと思う。

或いはジャルジェーフオン・クセルクシア、その人に会ってみれば何か分かるのかもしれない。そう思いながら、自分の剣がクセルクシア大公のそれと重なる瞬間を想像した。

ユリスのいた場所から少し離れた、兵士達の喧騒の届かない場所、更に分厚い扉で隔たれた場所に、彼女は数人の女官に囲まれて存在した。

その女官達の中でも、空間を遮る布を押し分けていけるのはただ1人、彼女の乳母だった女の娘であるルカしかない。

王女ルクレツィアは陽の当たらない狭い空間の中で、ルカ1人を話相手とし、いつ終わるとも知れぬ静寂の中に在った。

否、彼女はそれが途絶える瞬間こそを待っていた。

その時、ルカはルクレツィアの元を離れていた。

何もない空間の中に1人、大きなクッションに囲まれて優雅に横たわる王女は、うっとりとした笑みを浮かべる。

それを間近で見た者はほとんどいない。が、一度見れば誰もが忘れられないだろう、濃い青の相貌がゆつくりと細まり、魅惑的な表情を作る。

「ジャルジェーフオン・クセルクシア様」

形よい唇はまるで、唯一の恋人の名を呼ぶように、後を引いて響く。

一体どんな人なのだろうと想像し、胸は躍る。

その人が彼女に手を差し出し、その手を瞬間を想像する。

「貴方は私を、愛してくださいさるのでしょうか？」

16歳という年には少し幼い、無邪気と言っていい声だった。

ルクレツィアは夢を見る。

ジャルジエこそがルクレツィアの欲するものを与えてくれることを。欲しいものは幾つもあった。が、そのいずれもが彼女からすり抜けていった。

けれど、『霸王』ならば、予言された『女神』の手を取る、それは決して逆らってはならない『運命』だ。

「早く迎えに来てくださればいいのに」

彼女は、胸の奥の奥でさざめくものに見て見ないふりをする。声など、聞こえない。

長い髪を振り乱し、鬼のような形相で女は叫んだ。

（その娘をこちらに連れてこないで……！！！！）

一拍を置いて、白い白い雪の中に紅が吹き飛ぶ。

ルクレツィアは笑っていた。

無邪気に、無邪気に笑い続けるルクレツィアはただただ、望みがかなう瞬間だけを待ち望んでいた。

2章 騙り8

呼ばれたことには気づいていた。が、すぐに返事が出来なかった男は、手にした書状を握りつぶす。それでもまだ怒りは引かず、握り締めた手のひらに爪を突き立てる。

ぐしゃりと曲がった書状に血が混じる。

呼んだ男の方が先に気づき、眉を寄せる。

「何をしておられるのですか」

口調こそ丁寧であつたものの、そこには十分な気遣いが含まれていない。それもそのはず、幼馴染みでもある男の呼びかけに、すさんでいた彼の感情がゆっくりと引き戻される。

「そちらの書状は」

「西のババアからの命令だ」

「ババアって、貴方」

ひどい物言いではあるが、その言葉通りが示す通りの女の顔を思い出し、思わず笑いがこぼれる。若い頃はこの大陸指折りの美人とまではやされていた女は確かに美しいが、彼らにとってはその狡猾さの方が強烈だ。

「紗菜様の美雨姫のことは？」

「ただ、息災と」

曲がった書状を投げつける。男は受け取ったものの中を確認しようとしてもしなかった。見たところで無駄だ。今、告げられる言葉以上のものを書状から読み取ることは出来ないだろう。

「で？」

だから問うた。お前のその怒りの意味は、と。

受け取った書状の間に紛れ込んでいた桜の花びらか風に乗る。あの女は今年もまた、風流な花見に出かけ、桜を見ながらこうやって、人殺しの命令をしたためののだろうか。確かにそのくらいのこと、表情一つ乱さず出来るだろう、あの、女ならば。

「国境を破り兵を出す」

「アツサワを落とせと？」

「クセルクシアがアツサワに新たな兵を送り込んできたならそれを叩けとのお達しだ」

語尾に含むものがある。聞いた方もまた、その含むところを正確に理解し舌打ちをする。

納得が出来ない、こんなことを望んでいない、何故我らが。思うことはある。

が、命じられれば、それがどんなものであろうとも受け入れるしかない。例えそれが望まぬ戦いだとしても、その戦いのために多くの仲間の血が流れたとしても。あの女は一兵たりとも自身の兵を出していないのだとしても。

それが、敗者の運命だ。

「由良様」

いたわるように呼ばれ、由良と呼ばれた男は笑った。久しく呼ばれていない名だった。

「兵に今日はゆっくり休むように伝えておけ。2、3日中には出陣することになるだろう」

「分かりました」

由良のことは受け入れ、男はその場を辞そうとする。本来であれば言葉の1つもかけてやりたいと思うが、何と云えばいいのか分からない。

何故戦わなければならない。そう、罵ることは出来ない。主君である彼に下された枷の重さを、彼の憤りを、男はこれまで一番近いところで見てきた。

いつまでこれは続くのか。

或いは、一層のこと。

「なあ、八塚」

由良はまるで自らの答えの正当化を求めるように問う。そこに彼の主君らしい強さはない。

「一層のこと、クセルクシア側について方がいいとは思わないか」
「由良様」

ちよつと考えていることを指摘されたような気がして八塚は息を飲む。

冗談だとすぐに由良は笑った。けれどそれが冗談でないことは、由良も八塚も、嫌というほど分かつていた。

クセルクシアがシャーンを滅ぼした。それを知った時から、否、クセルクシアで大公が変わった2年前から、何度も何度も考えた。そしてその度、切り捨てた。

それは、選べない選択だった。

ウルスラⅡエランヴィアを王宮に呼ぶようにとの命令を受けたザキは、それを果たすべく真夜中のシャーン城下をエランヴィア邸に向かい馬を走らせた。

貴族の屋敷を訪れていいような時間ではなく門を開けてもらえない可能性も考えていたにもかかわらず、まるでザキがやってくるのを予期していたかのように門には明かりが灯され、程なくして中から人が現れた。

すぐ様応接へと通されると、そう時間を費やすことなく屋敷の主人、ウルスラがやってくる。夜着ではないあたりやはり、この来訪を分かっていたのだらう。ザキにとつてはこれが初対面だったが、目が合った瞬間、自分では太刀打ち出来ない男だと直感的に悟る。

ジャルジエが警戒するのも、味方に引き入れたいと思うのもよく分かった。確かにこの男ならば穏やかな笑みを浮かべながら永和軍をまとめるくらいのことをやつてのけるかもしれない。

この男は敵か？

味方かという問いはない。ただ、敵かどうか。もし敵ならば、アツサワの反乱にもこの男が囁んでいるのだろうか。

「大公が、この老いぼれを呼んでいるとか」

「は、」

「では、参りましょうか」

「エランヴィア様？」

ちよつとそこまでとでも言うような言葉に思わずザキは瞠目する。拒否されるとも思つてなかったが、こんなにあっさりと承諾されると思つていなかった。いや、そもそもどんな反応も予期出来ていなかった。

「どうしました、大公が急ぎ連れてこいと言っているのでしょうか？」

「そうですか」

「何か」

「いえ」

「元々、今日はシェラの元を訪れる予定でしたし、少し早まっただけです」

さあと促される。が、ザキはすぐには受け入れることは出来ない。ジャルジエに命を受けてこの場にやってきているにもかかわらず、頭の奥で警笛を聞く。

この男、本当に王宮に入れてもいいのか。

「近衛殿？」

「は、申し訳ございません」

はつと我に返りザキはウルスラを促す。懸念が消えたわけではなかったが、それでも此処で闇雲に時間をかけている暇もなかった。

ウルスラとともにザキが応接を出ると、扉のすぐ脇でアヤが待っていた。当然のようにウルスラの後に従おうとする女にザキは怪訝そうにウルスラを見る。

私の護衛だと思つてくれたらいいとアヤを紹介したウルスラは最後に付け加えた。この娘はずっとシェラに仕えていたのですと。本当は神殿で一度、ほんの少しだが顔を合わせたことがあったのだが、あまりの雰囲気の違いに気づかない。

結局ウルスラに押し切られるようにアヤを加えて王宮に戻ったのは、もうすぐ夜明け前という時間だった。

ウルスラの到着を知ったジャルジエは、すぐさま表に現われ、自ら彼を出迎えた。そして、2人だけで話をしたいと自身の執務室へと促す。ウルスラはそれを承諾し、ジャルジエの後に続いた。

アヤの方は彼女の希望により、シエラの部屋へと案内された。まだ夜中でシエラが起きているはずのない時間ではあったが、とにかく控えの間に詰めて他の女官達にシエラの状況を聞きたいとのことだった。

ジャルジエに促され彼の執務室へと入ったウルスラは、王宮の造りには慣れたもので、中心に置かれたソファに座る。それを横目に執務用の椅子に座ろうとしたジャルジエは、ウルスラの含んだ視線に動きを止める。

「エランヴィア殿」

「このような時間のお呼び出し、一体どうなされたのですか」

「!？」

ずっと双眸が細まる。まるでこちらの方が本性だともいうような酷薄な笑みが浮かび、思わずジャルジエは息を飲む。

「アッサワの永和軍の反乱、そして、西と南の兵」

「エラン、」

「アッサワにはルクレツィア王女がいてそれを、ユリス＝セトルが守る」

「お前……!!」

驚きに口調が変わる。

目の前の男はすべてを知っている。違う、この男が首謀者か。

その可能性を考えなかったわけではない。いや、片方の頭では予想通りだと納得している。

驚いたのはウルスラが、南と西の件を出してきたからだ。

何故この男が南と西の件を知っているのか。まさかこの男、向こう側ともつながっているのか。

「私に何を望みますか」

背に、冷たいものが走る。

ジャルジエは喉のぎりぎりのところで彼がやってきたら告げようと思っていた言葉を押さえつける。

食うか、食われるか。

「大公殿下」

ジャルジエを呼んだウルスラの表情が穏やかなそれに戻る。

「私は必要とあらば、貴方に偽ることも故意に口を閉ざすことも出来ます。けれどまだ、少なくとも貴方に、偽りを申し上げたことはありません」

もしシエラが認めないのであれば、私も貴方を霸王とは認めますまい。笑んだ唇が、エランヴィア邸で次げた言葉を再び綴る。

「お約束しましょう。あの娘、シエラがどんな形であれ貴方の側にいる限り、私は貴方を裏切りますまい」

ジャルジエははっと顔を上げる。

これもまた偽りではございません、そう告げたウルスラは穏やかさを崩さないまま笑みを深めた。

2章 騙り8（後書き）

いつもより短いですが。

なんとか年越し前に更新できてよかったです！

2章 騙り9

ジャルジェが立ち去り、程なくして休むとだけ言い残したシェラは、女官達から話しかけられるのを拒むかのように寢室に入った。

寢台にうつぶせに身体を投げ出し強く瞼を閉じるが一向に眠りは訪れない。

すべての明かりを消しているのに寢室の中は暗くなかった。

窓の向こうが赤い。

松明の明かりだ。

ジャルジェは明日の朝早い時間に出立するつもりなのだろう。真夜中だというのに続々と兵が集まってきている。

明かりは王宮の敷地からあぶれた兵達のためのものだった。

一体どれ程の兵が出向くのだろうか。

ジャルジェの言っていた足りない3000程の兵士。それらが丸ごとアッサワに向かっていたとして、大きく見積もって約5000名の兵士がルクレツィアの守りにしていることになる。

そうだとするとクセルクシア軍にはどれだけの兵が必要か、想像を試みる。

計算は必要性ではなく逆算によりなされる。

自分がクセルクシア側であればおそらく、1人でも多くの兵士をシャーンに残したいと考えるだろう。永和軍の解体が進んでいるとは言えシャーンでの反乱の懸念がまったくないわけではないし、他の大公達の動きも気になる。

シャーンには最低10000、いや、12000は残したい。

そこまで考えた時、はっと顔を上げた。

集まっている兵が多すぎる。

寢台から飛び起きたシェラは、城下を向く窓を開ける。刹那、冷たい風が吹き頬をかすめる。彼女は長い髪を無造作にかきあげ、冴えた視線を下に向ける。

5000、いや、もつという？

どういうことかと疑問符が頭を巡る。

幾らユリス・セトルが率いているとは言え、多少地の利が永和側にいるとは言え、永和軍5000に対してクセルクシアが同数出す必要があるとは思えない。2000では厳しいかもしれないが3000ならばなんとかなる。例えルクレツィアを手にするという最重要事項がアツサワにあったとしても、シエラならば多分、シャーンの守りを優先する。

しかも、ジャルジエはこの大陸でも名うての戦上手と言われている。指揮官としての能力がユリスに劣っているとは想像しにくい。

それなのに何故、同数以上の兵士が揃えられているのか。

「これは、どういうこと？」

おかしい。

或いは、これだけの兵士を出さなければならぬ理由が他にあるのだろうか。シエラは先ほどのジャルジエとのやり取りを思い出そうとする。

何かが琴線にふれる。

そもそもあの男は何故シエラの部屋にやってきたのだろうか。情報を得るため。そんな解が頭を過ぎるが、それだけでは納得がいかなかった。

実際にシエラが提供した情報などなく、多少問われたとは言え、本気で情報を引き出そうとするような強引さはなかった。寧ろシエラの方が3000の兵士の情報を与えられたと言ってもいい。そしてあの。

予言など、女神など、利用するだけのものと言いつつ放った男が。

女神でさえないシエラのところを訪れて、懇願した。

（だからシエラ、見てはくれないか）

「あれは、縋るものを求める目だ」

つぶやいたシエラの声がふるえていた。

まさかと思いつつも言葉にした瞬間、否定し切れない重さをもって

シエラの心に歪みを生んでゆく。

芝居だったとは思えない。

そもそも今さらジャルジエがシエラを相手に芝居を打つ必要はないし、例えそういうものを多少含んでいたとしても、あの真摯な声を偽りと笑い飛ばすことなど出来ない。

何がジャルジエを駆り立てたのか、何故その結果がシエラへの懇願へとつながるのか。すべてが分かるわけではなかったが、確信を1つした。

あの時あの男は、何か、1人では抱えきれないものを持っていて、迷いや不安のようなものがきつとあつて、そのうちのいくらかの共有をシエラに望んだ。

多分それが今集められている兵士にも関係している。

「馬鹿な」

それは何かと思考を深めるよりも前に、自らで自らの手を抱いた。冷たい感触を思い出す。それはあの男が、言葉にならない感情を唯一、シエラにぶつけてきた場所だ。

「私にそんなことを求めてどうするというのはです」

お前に父の命を奪われ、陵辱され、今のこの瞬間も。

シエラ「ウツディーンという存在を打ち殺されながら此处で、望まぬ生を強いられているだけの存在なのに。」

「アッサワ以外に何か起こるとすればそれは可能性をはじき出す。」

シャーンで反乱が起こった。或いは既に、他の大公達が動き出した。此处は、静かだ。ならば解はもう片方になる。

「リディア？」

想像したのは北のリディアの動きだった。ジャルジエと同じ頃にリディア大公から国の実権を奪った彼の息子は、好戦的と聞く。

永和王家の終わりは押さえつけられていた大公達から籬を外し乱世を呼び起こす。十分に予想できたこと、というよりそれは、必然だ。シエラはあの時、ジャルジエの言葉に応えるべきだったのだろうか、

刎ね付けるべきだったのだろうか。

この男は霸王足る者か否か。

その時シエラは、亡き父の声を聞いたような気がした。

否というのならばお前は、代わりに誰を選ぶ？

南か、西か、北か。或いは大公ではない者か。

それを知るのはルクレツィアだ。いつものように断じようとし、けれど躊躇った。

解を得たわけではない。自分に解を得られると思ったわけではない。ただ、思ったのだ。

それでもあの時、自分はあの男に何か、言わなければならなかったのではないかと。

が、シエラはそれでもしばらく動かなかった。

何を恐れたのか、悪感を覚えたのか。

自身の存在など意味はないと、再び殻に閉じこもろうとしたのか。いずれかか、或いはすべてか。

しばらく窓の側から離れられなかったシエラが顔を上げはつと我に返った時にはもう、夜が明けていた。

いつの間にか松明の明かりは消え、王宮前には兵士だけではなく、シャーンの民衆達も集まっていた。

歓声と困惑と、複雑な集団をかくぐってクセルクシア軍は進軍を開始しようとしている。

行かなければとシエラは夜着のまま寝室から飛び出そうとする。

「シエラ様、お目覚めでございますか」

が、シエラの足がびたりと止まった。

控えの間に、馴染んだ顔があった。

「何故」

かすれた声でアヤと、名を呼ぶ。

アヤはシエラの乳母の娘で、ずっとシエラに仕えてきてくれた、と

もに神殿にまで赴いてくれた、大切な友人だ。

アッサワに行けと命じ手放した彼女が何故ここにいるのか、疑問と再会の喜びがともに込み上げる。

「随分とお痩せになりましたか。食事は摂っておられるのですか。

ああ、朝食の用意をいたしました。久しぶりに私が作ります」

シエラをやさしく抱きしめてくれる姉のような存在のやわらかさに、シエラは一瞬身をゆだねそうになる。けれど、ぎりぎりのところで躊躇ってアヤの肩を押す。

「朝食は後でいいわ、行かなければならないところがあるの」

「シエラ様？」

シエラの身体が離れる。その瞬間、アヤの視線に剣呑なものが帯びる。

ぐいと、いつもの彼女から想像も出来ない強さでシエラの腕をつかんだ。

「アヤ？」

「貴方に必要なのは休養です」

アヤはどうしても今シエラを止めなければならないと思った。久しぶりの再会の喜びを後回しにしてまでシエラが優先しなければならぬことなどあまり多くはないはずだ。

例えば、今にも進軍を開始しているクセルクシア軍のところに行くとか。

「シエラ様、もしクセルクシア大公の元に行くというのならおやめくださいませ」

半分は勘だ。けれどすぐさま身を硬くしたシエラの様子に、それが間違いではないと確信をする。

「大丈夫です。これ以上シエラ様が何もせずとも、セトル將軍が、討ち取ってくださいます」

「アヤ!？」

アヤの言っていることがすぐには理解できなかった。何故アヤがそんなことを知っているのか。ああそうだ、アヤはアッサワに行った

のだ。そこでユリスに会い、アツサワの状況を知ったのだろう。

「何故、そんなことを」

「大丈夫です、シエラ様がご心配なさるようなことはありません」

アヤは笑みを深め、まるで子守唄のように言葉を紡ぐ。

「セトル将軍がルクレツィア様とともにこのシャーンに戻ってきますわ、大公の首を持って」

シエラは動かなかった。

行かなければならないと思った。おそらく、自分でも分からない何かを告げようとしたのに、阻むアヤの手の強さに足がすくんだ。

自分が何を言ったところで無駄だ。

そう、頭の中で言い聞かせた。

結局、シエラはジャルジェに会わなかった。

彼は出立する寸前、もう一度だけシエラの部屋に赴こうとしたものの、それもかなわなかった。いつになく緊迫した出立の中、重臣達が彼にゆとりを与えなかったのだ。

「アシユタル様に加護を」

不意に誰かが言った。

どきりとしたジャルジェはその男を見据え、否定しようとし、けれど男の言葉が道理であると気づいた。

シエラがルクレツィアでないことを知る者は少ない。知らない者は手にした戦女神の祝福を望むだろう。

クセルクシア軍に加護をと。

それはジャルジェが望んでいる言葉とは少し異なっていたが、望まないわけではない。

決して無理強いするなと命じながらジャルジェはあの、少女の冷たい手の感触を思い出す。

人形じみた温度が離れた瞬間、覚えたのは痛烈な孤独感だ。

あの娘の言葉が欲しかった。あの時ジャルジェは、少女の一言が何よりも重要だった。

離れた手を再びつかみたかった。

彼女がそれを許してくれたなら自分は、決して彼女を裏切らないだろう。

現われなかったシエラの代わりにジャルジエを送ったのはネイサだった。決して表に出ることができない身分ではない。いつものように控えめに見送りに訪れた彼女は、ジャルジエの手が動いて初めてくちづけを乞うた。

シエラの冷たさとは異なり、熱を分け与えるかのようなそれに、ジャルジエは思わずネイサの腰をつかむ。

熱烈としか言えない主君と愛妾とのやり取りに近くにいた侍女達も思わず顔を背ける。喘ぐように唇の感触を味わいながら、けれどジャルジエの焦燥感は埋まらない。

あの娘が欲しい。

どうしても、どうしても。

強烈な切望は恋にも似ている。どんな形であれジャルジエはこれほどに強く女性の存在を求めたことはない。女の存在に意味を見出したことなどない。

最後、ジャルジエは切り捨てるようにネイサの身体を離れた。驚きに視線を揺らした彼女に背を向け、軍を率いるべく歩き出す。

もう1人彼を見送ったのはウルスラだ。

ジャルジエの意に承諾し、クセルクシアの大臣職を引き受けたかつての永和の大宰相は、決していつもの穏やかさを失うことなく新たな主君を見送った。

此処に戻ってこれると思うか。

自虐さを含んだ問いかけにもウルスラは動揺1つ見せず笑みを浮かべる。

「それはすべて貴方次第でしょう」

「お前は」

「決して裏切らないと約束をしました。貴方のいない間、このシャーンを必ず守ります」

「シエラが俺の側にいる限り、か」

「ええ」

当然とばかりにうなずいたウルスラはジャルジェの背を押しながら、決して彼には聞こえないような声で言葉を続けた。

「クセルクシア大公ジャルジェ」フォン「クセルクシア、貴方の命運は既に、貴方の手元にはない」

兵士の声が轟く。

もはやどれ程の声で叫ぼうとも、ジャルジェにまでは届かない。

「死ぬか、生きるか、それもまた、この約束のうち」

この瞬間、貴方に仕える臣下として1つ、きっかけを作りましょう。ウルスラはアッサワで起こるだろうことを2つ、同じだけの強さで想像し、願わくばと祈った。

2章 騙り9（後書き）

次話あたりようやく話が動くと思います。

2章 騙り10

シエラの元に意外な来客がやってきたのはもうすぐ昼になろうという頃だった。

その時シエラは部屋にいて相変わらず窓から城下を見ていた。

眼下に広がるのは昨日とは変わらない、昨夜から今朝のことが嘘のようだとさえ思える、落ち着いた風景だった。

ジャルジエ自身が率いたクセルクシア軍がアツサワに向けて出発してからもう随分と発つ。

あの時、アヤに阻まれたとは言え、強引に会いに行かなかったことをシエラは後悔していた。

行けばどうなったのかなど分らない。が、行って、あの男に向き合わなければならなかったのだと思う。

アヤはユリスとルクレツィアが大公の首を持って帰ると言った。

何故そんなことが言えるのかと問い正そうとしたが、アヤはそれを告げるつもりはまったくなかった。

が、予定外の来客こそが他にもない、その解を持ってきたのだ。

アヤが現われた時点で想像できているべきだったと顔を見てようやく気づいたシエラは、久しぶりの再会にわずかに頬を緩めた。

「久しいな、シエラ」

「ご無沙汰しております、ウルスラ様」

やって来たのは、シャーンのためのジャルジエに同行しなかったザキと、ウルスラだ。

エーベルトの前の大宰相で、その後、学術院の長となった男にシエラもまた師事し、もう1人の父と慕っている。学術院に入ったシエラはエランヴィアの屋敷に下宿していたこともあるのだ。

「いつお越しになられたのですか」

「大公殿下にお前の会いたいと申し上げてな。ああ、少し痩せたか。顔色が悪いのではないか」

「大丈夫です」

ザキの方にも気づきわずかに頭を下げたシェラの頬に手を寄せ、ウルスラは愛弟子とのほぼ2年ぶりの再会に目を細める。シェラが巫女としてアシユタルテ神殿に赴いたのはまだ14の時だ。背ものびて表情も少し大人びたような気がする。シャーンが陥落して数日の激動がさらにそうさせたのかもしれない。

「身体の具合は」

ウルスラは何気なく問うたのだが、一拍置いてその意とするところに気づいたシェラは表情を歪める。

その言葉にウルスラがシェラの身に起こったことをすべて知っているのだと分かった。羞恥と何気なく口にするには未だ生々しい記憶に引き摺られそうになる。

「私、は」

「エーベルトの命で神殿に残ったお前はこちらの近衛殿に王宮へと連れられ、クセルクシア大公の慰み者となり、拳句の果てにルクレツィア様の身代わりにされた」

「ウルスラ様!？」

ぴくりとアヤの眉がはねる。

直前までの穏やかな雰囲気を一変させた男の容赦のない物言いにザキは一瞬言葉を失う。

シェラの表情がみるうちに青ざめる。

「そのような物言いはおやめくださいませ」

「アヤ、お前は黙っている」

ウルスラは表情を変えない。口調こそは辛らつだが、シェラを貶めようとする意図はない。

ただ、問うために問う。

此処まで案内してくれたザキに礼を告げ、2人には出て行くようにと命じたウルスラは、先ほどまでシェラがじっと見ていた窓を背に立つ。

シェラは肩をふるわせた。その力ない様子にアヤはウルスラに突っ

かろうとしたが、彼は決して命令を翻さない。従わないという解はないとばかりの一瞥を与えたウルスラは、2人が立ち去るまで口を開かなかった。

「近衛殿、アヤ、下がって」

かすれつつもしっかりとした口調でシエラが告げ、2人はようやく部屋から出て行く。何かあったらすぐにお呼びくださいませと言葉を残していつてくれたアヤの気遣いに、わずかながら頬を緩めた。

「何のお話でしょうか」

室内に2人だけとなるとシエラは躊躇いがちにウルスラを見上げた。彼女には先ほど告げられた言葉がどういう意味を持つのか測りかねていた。揶揄か、さげすみか。もう1人の父とも慕う男は、不甲斐ないシエラを責めようとここまでやってきたのだろうか。

或いはもう見捨てられたのかもしれないと思い、胸の内を冷たい風が駆け抜けようとする。

が、それより前にウルスラが言葉を発した。

「それで、大公を殺し損ねたお前は、その大公の庇護の下で王宮に居座っているというわけか。お前は何のために此处に存在している」

「ウルスラ、様」

「シエラ、お前に面白いことを教えてやろう」

のびたウルスラの手がシエラの顎をつかみ無理やりを上を向かせる。揺れた緋の双眸は向けられた視線から逃げようとしたが、かなわな

い。

「先ほどクセルクシア軍9000がシャーンを出立した」

「9000?」

突然発せられた言葉にシエラは困惑する。9000と言われれば確かにそのくらいの兵が集まっていたような気がする。けれど何故。引き算した結果シャーンに残っている兵士の数を想像しありえないと驚く。

おそらくシャーンにいる永和の残党の方がクセルクシア軍に数では勝っている。

「北が動きましたか」

先ほど想像したものを尋ねてみる。するとウルスラはさも面白げに笑う。

「あの公子が何処に攻めてきたと？」

「では何故ですか。アッサワの残党を制圧するためだけならば、どう考えても9000もの兵士は必要ありません」

「確かに、アッサワにいる永和軍はいいとこ5000だ」

「ならば」

「シェラ」

狡猾な政治家の顔をしたウルスラの笑みが歪む。本当に楽しくて仕方がないという口調で告げられた言葉にシェラの表情が青ざめる。

南と西、ウルスラはそう言った。

ありえない、そう叫ぼうとして止まる。

北の公子は賢大公と名高かった父のリディア大公から実権を奪い、大公夫妻を離宮に追いやった言わば暴君だ。戦いを好むとともにそうでないときは宮殿で多くの妾を囲んで贅沢三昧とも聞く彼は、もちろん民衆からの人気も底辺だ。

民の支持を得られない国主など、本来は恐れるべきものではない。ジャルジェの野望に対し今、この大陸で最も対抗すべき存在となるのは、南のラストイニア、西のイシスの両大公である。

ともに名君である彼らのつながりは深い。

若かった頃、シャーンの学院で同時期に学んだとされる彼らは、以来、長きに渡っての友人であると聞く。

別々ならまだしも、彼らが手を組んだりしたら厄介なことこの上ない。

「ウルスラ様！？」

そこまで考えシェラはつとした。

彼女が親子以上に年の離れた2人の大公について詳しいのには理由がある。

「まさか、ウルスラ様も彼らに加担しているのですか」

ぴくりと唇の端が動く。ウルスラもまた、彼らとともに学院で机を囲んだ仲だ。シエラはウルスラに2人の名君の話を聞いたのだ。

「ウルスラ様は彼らこそがこの大陸を統べるに相応しいと」

「シエラ」

名を呼ばれる。

大きな声ではない。が、追求を止めるに十分な重い響きに、シエラの言葉は最後まで声にならない。

「お前に聞きたいことがある」

ウルスラの一言の重みはシエラの追求を追いやる。

その時シエラは、ウルスラの背後にエーベルトを見た気がした。外見が似ているわけではない、声も似ているわけではない。けれど、ウルスラの声は同じ重さをもってシエラを圧倒する。

「もし、このシャーンが陥落するようなことがあれば、お前はルクレツィア様より前に敵と見え、断じよ。霸王にふさわしき者であるというのならルクレツィア様の元に、そうでなければその命を賭けて殺し、ルクレツィア様を守れ」

それは、父エーベルトの命令だ。

シエラはその言葉があつたからこそ神殿に残り、ザキを迎え、今、この場所にいる。

「ですが、その言葉はっ」

かつて聞いた父の言葉と一言一句違わないのに驚きつつ、縋るようにウルスラを見上げる。

シエラはその命令に失敗した。

殺せなかった。

「シエラ、お前は父の言葉を何と聞いた」

「ウルスラ、」

「お前は父の遺言を踏みにじりこのような場所で何をのうのうとしている」

「ですが私は、殺せなかったのです…！」

「そなたは馬鹿か」

ことさら大きくため息をついたウルスラは次に恐ろしい言葉を吐き出した。

「霸王足る者であればルクレツィア様の元へ、そうでなければ他でもない、お前自身があの永和殺しを仕留めよ。お前は大公を霸王足る者と認めたから彼をアツサワに行かせたとでも言うのか」

「私にそんなことが分かるうはずありません。そもそもあの言葉は」

「エーベルトはお前に見極めよと言ったのだ」

「クセルクシア大公は、死ぬぞ」

南と西は、それぞれ5000ほどの兵士をアツサワ近くへと進めた。それに対し、クセルクシア軍は9000の兵でシャーンを出発。うち7000の兵士はクリスタ將軍の指揮の下、両軍の兵士と睨み合うことになる。

残りの2000はクセルクシア大公自身の指揮の下、アツサワの向こう、エトナ山の方角へと向かう。

そこに、ユリス以下永和軍5000が待ち受ける。

「そんな」

「ユリスは手を抜くまいよ。奴はルクレツィア様を守るよう厳命されている」

シエラの背をゾワリと冷たいものが駆け抜ける。

数では圧倒的に永和側が勝る。

しかも永和を率いるのはユリスだ。

脳裏を『死』が駆け抜けた。

それは婚約者に対してのものではない。この時、ジャルジエの死を予感したシエラは、自覚するより前に恐怖した。肩がふるえた。

その頃になつて自らの抱いた恐れに気づく。

虚をつかれた表情を浮かべるシエラにウルスラは追い討ちをかけた。
「皮肉だとは思わないか。お前は父の遺言を放り出し、こんな場所
で大公の死の知らせを待ち続けるのか」

「
」

「シエラ、大公は霸王足る者か否か？」

緋の双眸が大きく見開かれる。

シエラが幾度も自問し、結局分からなかった問いだ。

否、ただずつとこの瞬間まで、考えるのを放棄していたのかもしれない。

この場にずつとうずくまっていたシエラに、再び問いが突きつけられる。

あの問いは。

「あの遺言は、あんな形で命を散らしたエーベルトが他にもない、
ただ1人の娘であるお前に対し託したものと考えたことはあるか」

「ウルスラ様？」

「言葉の通り、エーベルトがお前に、選ばせたかったのだとすれば、
お前はいかがする」

「そんなの」

シエラは今にも泣きそうな顔をして首を振る。

分からない、そんな事分かるはずがない。

うつむき齒を食いしぼる様子に一瞬哀れみを覚えつつ、ウルスラは
言い放った。

「シエラ、ならば今選べ」

「?
」

「クセルクシア大公は霸王足る者か否か」

霸王に相応しくないというのなら、今のこの瞬間より大公の敵となり、
シャーンの永和の残党を取りまとめよ。1分でも早くこの王宮
をクセルクシア軍から取り戻すのだ。

もし、相応しいと考えるのならば。

力を貸してやろう。これから窮地に陥るだろう大公を助けてやる術を教えてやる。

「考えろ、シエラ。この大陸の永和の為に、まだ、ジャルジェーフオン・クセルクシアの命が必要か否か」

「無理です、そんなの」

「無理だというのならもう1つ、選択肢をやろう」

笑んだウルスラは腰のものを取り上げる。

大宰相位を降りて以来ほとんど差したことのない剣を、ウルスラはこの日携えてやってきた。

他でもないこの日、王宮にやってこなければならなかった理由はこれだ。

ウルスラは、シエラに再び選択を投げかけるためにやってきた。エーベルトが投げかけた選択を、決して逃げられないものとして突きつけるために。

無理やりシエラの手をつかみ柄を握らせる。

呼吸ができない。思わずシエラは声をあげようとしたがそれはかなわない。

ウルスラはその上から自身の手を重ね、シエラにつかませた剣を無理やり自身の首筋に当てた。

切れ味のよい刃が、首の皮をかする。

ツツと、血が伝った。

「お前に死ねと言えば、喜びかねんからな」

「ウルス、ラ…」

「選べないのなら私は私を殺せ。その勇気があるのなら、選択できないというお前の選択を、認めてやってもいい」
選択を。

シエラの退路は完全に断たれる。そして、時間さえもが奪われる。ジャルジェエがエトナ山に到着し、永和の残党に見えればもう、終わりだ。

あの男が死ぬかもしれない。

いや、けれど、ルクレツィアが。

「どうする、シェラ？」

では、『私』は、何を望むのだろうか。

2章 騙り11

「シェラ姫」

「どうか、貴方様はお戻りを、近衛様」

足取りは先ほどから変わらない。が、息が上がっているのが肩の揺れからも分かる。後を追うザキはシェラの体調を案じ、引き返すよう声をかける。が、シェラは足を止めようとはしない。

この2年間の神殿暮らしで弱った足腰を気にする余裕はない。ただただ思いつめた双眸は階段の途切れる場所を見る。

選択をとウルスラに命じられたシェラは、お時間をとつばやくのがやっとだった。

ウルスラは分かったと応じながら、今朝方出発したクセルクシア軍のおおよその位置を告げる。それは独り言のようなものだったが、耳にしたシェラにとっては期限を宣告されたも同然のものだった。

ここからアツサワまでの距離、そして行軍の数と速さからおおよそのこれからの行動を計算する。

おそらく激突するとすれば明日だろう。アツサワに到着するのは夜だろうし、夜の間には双方ともども影の者達が動くことになる。地の利、そして兵の差がかなり少ないことは想定しているのだろうか。クセルクシア側にとってこの夜は特に重要となる。

あのアツサワの『地下』を何処まで把握出来ているのだろうか。せめて数と将の器を正確に知れば道も開けるかもしれないが、それが難しいことをシェラはよく知っている。

あそこは厄介だ。本当の意味ですべての状況を把握しているのはおそらく、亡き大宰相しかない。生きている中ではウルスラが一番だろうが、彼が何処までジャルジェに協力的なのかは分かりがたい。（クセルクシア大公は霸王足る者か否か）

頭の中をぐるぐると、師の言葉が回る。

もう少しと最後の数段を上り切り扉を開ける。

シエラが上っていたのは南の塔といい、階段を上った先からは外に出られる。5人ほどが立てば空気がなくなるような狭い場所には、数日前まで永和の旗がたなびいていた。

今はクセルクシアの旗がはためいている。

この城、すなわちこの地を統べる者が誰かを示す象徴的なここは、シエラにとつては思い出深い場所でもある。

ウッドレーンの家を離れて後、王宮に父を訪ねた時、彼に連れられここを上ったことがある。

その時は今よりももっと軽やかな足取りで上っていた気がする。当時、武術を叩き込まれていたシエラの足腰は今よりずっと鍛えられたものだっし、父に時間を取ってもらえたのがよほど嬉しかったからだろう。

あの日、父は珍しく饒舌だった。

『シエラ、見えるか。これがシャーン、永和の都だ』

彼はシエラを抱え上げ、永和の旗の向こうに見えるシャーンの城下を見せながら、言った。

『父様？』

『お前は我らが娘だ。故に、そなたがアシユタルテの名に縛られる必要はない』

それはいつもとは真逆の言葉だった。

ルクレツィア様の影、瞳の色が異なる偽と言われてきたシエラにとつて、ひどく真剣な顔をして告げられた父の言葉は意外なものとして受け止められた。

『シエラ、そなたは自由に生きよ』

『それは』

『そなたが選んだ道が、永和の為であることを願っている』

だからシエラはあの時の会話を覚えていて、この場所にやってきたのかもしれない。手すりにつかまりながら深呼吸を繰り返し、強い風の中、前を向く。

高い場所から見える街は、あの日見た風景と変わらない。

けれど、実際に城下に出れば随分と違っているのだろう。この王宮の主はもはや、永和ではない。

「永和の為であることを、願っている」

シエラはかつて聞いた父の言葉をつぶやく。

あの時父は、自由に生きよと言いながら、永和の為にと続けた。結局自分はルクレツィアの偽でしかないのだと言われたように思った。あの時、何故父は永和の為にと言ったのだろうか。

ルクレツィアの為でもなく、王家の為でもなく。

「例えば」

「姫様？」

シエラに少し遅れて到着したザキはシエラのつぶやきに疑問で応じる。シエラはそれに応えようとはせず、変わらず城下を見下ろしている。

ウルスラは父の言葉が言葉通りだったらどうする、とシエラを責めた。

もしそれが本当ならば、或いは、この場所で聞いた言葉もまた、言葉通りに受け入れるべきものだったのかもしれない。

永和とは何か。

永和とは、『永』き『和』。

かつて、このシャーンを王都に定めた女王クレアツァ・ディアーナは、自らがもたらした戦乱の終わりが、永遠に続くことを願ったという。

再び戦うことのない世を。

それは無理だ。どれほど強い国だとしていつか乱れ、滅びる。それは人がいつか死を迎える必然と似ている。

シエラが生きるは乱世だ。

危うい均衡はついに破られ、新たにこのシャーンを手にした男の基盤は未だ危うい。

今のこの風景を見ながらも父は、シエラに同じ言葉を言っただろうか。そして今、この場所で、同じ言葉を聞けばシエラはどう受け取るだ

ろうか。

「再び戦いのない世の為であることを、願っている」
ゆっくりと得た解を告げる。

その瞬間、シエラはくしゃりと顔を歪める。

（シエラ、そなたは自由に生きよ）

「貴方は、私に自由にと言ってくださいますか」

（シエラ様には王女を偽り、この神殿にてクセルクシア軍を食い止めよ、とのことでございます）

実の娘を王女の身代わりとして敵軍の前に突き出し、2つの命令を残した。

貴方は。

「選べと、おっしゃてくださったのですか」

シエラの声がふるえた。

（シエラ、どうか。どうか、どうか。幸せに、…なっってください）

その時、ザキは声を掛けることが出来なかった。

否、言葉を失い、視線は奪われた。

シエラの頬に一筋の涙が伝い、思いつめた彼女の唇から幾つかの言葉がこぼれ落ち。

その、声はふるえ。

彼女の心は、失った父親の方を向いているのだろっと思った。

その、時。

嗚咽をこらえているように見えた唇がゆっくりと緩み、緋の双眸が細まり。

笑んだ。

その表情はあの、アシュタルテの神殿見たものと似ているようで、けれどあの時よりも幾分あどけなさを残したものだっただ。

「近衛様、貴方はクセルクシア大公が霸王足る者だと思えますか」
すつと一時で笑みは引き、彼女はザキに問いかけた。

けれどザキは、強い視線に引き寄せられ、応えることが出来ない。
シエラはしばらくザキが告げるのを待った。が、その後、自分は彼の解を望んでないのだと気づいた。

それはシエラにこそ与えられた問いだ。

その時、初めてシエラはジャルジェ「フォン」クセルクシアという男を、理解しようと思った。

彼は霸王足る者か否か。

永和の大宰相を殺し、その娘を辱めたあの、残酷な男は。

もう一方でシエラに、永和を見せてやると言った。

「私に、選べるはずもない」

そうつぶやいたシエラは真っ直ぐにシャーンの城下を見る。

先ほどウルスラに告げたのと同じ意味を持つ言葉は、けれど今は別の響きを持つ。

ただの身代わりに過ぎない自分に選べるはずがない。その想いがまったくなくなつたわけではないけれど、今、シエラは生きて、この場に立っている。

未だ息をする自分に、生き永らえる意味はあるか。

分らない。

けれど、この胸の内の幾らかが、父の言葉に縋ろうとする。

これは、生きる意味となるだろうか。

今のこの瞬間、解を持たぬのなら、それを得るために足掻いてみてもいいだろうか。

シエラはまだ、生きていてもいいのだろうか。

「近衛様」

シエラは向けた方向から視線を動かすことなくザキを呼ぶ。

「ウルスラ様が満足してくださるかは分かりませんが、私は私の意思で1つ、選択をしようと思います」

「それは」

「アツサワに行こうと思います」

「！！」

シャーンが陥落をしたあの日からずっと重く澱んでいた胸の内が、ほんの少し晴れた気がした。

（クセルクシア大公は霸王足る者か否か）

シェラはこの時、その解を得ることを切実に欲した。

2章 騙り11（後書き）

随分遅くなりましたが、本編の続きです。

いまいち区切りがよくないような気もするので、近いうちに書き足しているかもしれません。

にしてもシェラちゃん、ほんとにお父さん大好き（笑）

>7/4

予定通り修正・追記をしました。

2章 騙り12

南の塔から立ち去った後シエラはウルスラの元へと向かった。

この日、ジャルジエに請われてクセルクシアの大臣となったばかりウルスラは、陥落の日より前、前の大宰相であつた彼に宛がわれていた執務室で、彼女の言葉を待っていた。

大きな机の上には幾つかの書物とともに、鞘から抜いた剣が無造作に放り出されている。

一度、扉を開いてから立ち止まったシエラは、最初に目に飛び込んできた抜き身の剣に息を呑む。が、彼女が動揺を見せたのはその、一瞬だった。

「さて」

「ウルスラ様」

真っ直ぐにウルスラを見返したシエラに、緩やかな笑みを返した彼は、剣を取り上げ切っ先を彼女へと向ける。

「私を殺すための剣は必要か」

「ご満足いただけるかどうかは分かりかねますが」

私が貴方を殺すという選択はありませんと苦笑したシエラにウルスラは剣を鞘へと戻す。言葉に応じたわけではない、ドアを開かれ顔を見た瞬間、ウルスラにはシエラの中に迷いが無いことを読み取った。

「では、聞こうか」

「はい」

シエラはゆっくりと息を吸い、それを告げる。

今の私には選択は出来ません。だから、それを為すためにアッサワに行こうと思います。

ジャルジエに力を貸すためのなのか。

ルクレツィアを彼から守るためのなのか。

その、どちらもなのか。

その、どちらでもないのか。

この緊迫した状況の中、情けないことなのかもしれないが、今のシエラにそれ以上の解はない。

「行つて、大公殿下をルクレツィア様に引き合わせてくるか」

「そうかもしれません」

「或いは、大公殿下を殺してくるか」

「そうかも、しれません」

2つの問いに、シエラは表情を変えことなく同じ重みを持つ声で答える。

「クセルクシア軍は劣勢だ。その中、お前は大公殿下を生き延びさせることが出来ると思うか」

ウルスラは3つ目の問いをする。

行つて、例えその解を得たところで、お前に何が出来なのか。どちらにしてもユリス・セトルの餌食となるのを見ているだけなのではないか。

少々意地が悪いかもしれないが現実を突きつける問いにもシエラは動じない。無言のまま、鞘に収められたばかりの剣をウルスラから取り上げる。

「この剣、お借りしてもよろしいでしょうか」

「シエラ？」

そして、それこそが必然とばかりに宣言する。

「彼がこの大陸の永和のために必要であるのならば、私は彼の剣となりましょう。そうでないのならば、この剣で彼を殺すでしょう」

選択を為した双眸がウルスラを真っ直ぐに射抜く。このシャーンで政の頂点にあつた男でさえも背筋が冷えるような。

覚悟を決めた緋は、ウルスラの視線さえもを奪っていく。

それこそがウルスラの望んだものだ。

一時の無言の後、ウルスラは満足げな笑みを浮かべた。

エーベルトが遣しウルスラが突きつけた選択は、その言葉通りであるとともに、今の瞬間のためにこそあつたと言つてもいい。

「では、日の暮れないうちに行くがいい」

「はい」

「そうだ、私からお前に1つ、贈り物をしよう」

「ウルスラ様？」

もはや自らのものではないと滑らかな口調で告げつつ剣を渡し、更に、別に渡そうと思うものがあると告げる。

シエラが本気であればそれは、役に立つだろう。

もちろん、そんなことは考えているはずもない彼女に今は想像できるはずもない。が、聡い少女は実物を見た瞬間、その利用価値に気づき、同時に自らに浮かんだその方法に恐れおののくだろう。

ウルスラは手を叩き、部下に箱を持ってくるよう命じる。

「ウルスラ様？」

既に用意されていた箱はすぐに運ばれ、それが開けられた瞬間、ウルスラの予想した通り、シエラの瞳が多くの中のものを含み、彼を見上げた。

「役に立つ場合もあるうよ」

「アッサワにはルクレツィア様がおられます」

シエラは躊躇いがちにそれを取り上げる。

箱の中に入っていたのはアシユタルテの巫女装束だ。運ばれてきたのはそれだけではない、美しい彫刻のなされた防具もまた、揃えられる。

防御力の高さを論じようとするよりも寧ろ、儀式用にも見えるそれは、シエラにとってはよく知るものだ。

暁の名を冠する戦いと豊穡の女神、アシユタルテを祀る神殿の巫女であつた彼女は、多くの兵士達に祝福を与えてきた。防具を纏うことは多くなかつたが、何度かは身につけ剣を捧げ持ったことがある。アッサワにいる多くの永和の兵士達は、こんな小さな国を守ると者として自らを定め、巫女の祝福を受けてきたのだ。

「使つても使わぬもお前の判断だが、自らの道を定めたのならば手段は選ぶなよ、シエラ」

お前の覚悟をとくと見せてもらおう、そう、ウルスラは老獪な政治家らしい笑みを浮かぶ。まさか自ら言った言葉を翻すつもりはあるまいと視線だけでねじり伏せられる感覚に引きずられるように、シエラは柔らかな白い生地にふれる指先に力を込め、目を閉じた。

アツサワに行くと言ったシエラがシャーン王宮を出たのは、それから1時間ほど後、もうすぐ日が暮れようとする頃だった。

ウルスラに渡された巫女の装束と防具を身に着けた彼女は、けれどそれを隠すようにくすんだ灰色の外套を羽織る。

シエラの後には100騎ほどの兵士が従っており、その先頭にザキがいる。

彼らはすべてザキの部下、クセルクシア大公の近衛だった。

ザキと近衛の兵士達は、ジャルジェとヤーフェが戦場に赴いている中、シャーンの防衛にあたるため王宮内に留まっていた。他にも指揮官は残っているが、数も少なく階級も高くない。もしザキまでもが王宮から離れれば、シャーン王宮を守るクセルクシア軍の軍事力は皆無になると言っている。

それはすなわち、シャーンの民がクセルクシアに反旗を翻せば、王都は再び、容易く陥落することを意味している。

しかも、王宮内には敵にすればこのうえなく厄介な男、ウルスラがいる。ジャルジェからクセルクシアの大臣の位を与えられた彼が、ただ単純にジャルジェを主として定めたとは考えにくい中、自分がシャーンを離れることなど考えられるはずもなかった。

が、そのウルスラこそがザキを促したのだ。

塔から降りウルスラの元へと向かったシエラをザキは追い2人の話を聞くこととなった。シエラはザキを遠ざけようとはしなかったし、ウルスラもまた、彼を排除しようとはしなかったからだ。

それでも場違いな存在であったはずのザキにとって、2人の会話はすべて納得できるものではなかったが、会話を遮ろうとは思わな

った。

シエラの側から見ればジャルジェが好ましい人物ではないことはやむを得ない。彼はそれだけの仕打ちを彼女に与えだし、寧ろ選択肢を残した方が驚きだった。

出発の準備があると早々にシエラがウルスラの元を辞した後、ザキもまたそこから離れようとした。

その時、決してザキの存在に気づいていなかったわけではないウルスラが彼を引き止めた。

『シエラの護衛として共に行ってやってくださいますか、近衛殿』
『エランヴィア殿？』

突如発せられた申し出はザキを驚かせた。

よく考えてみれば、シエラが護衛も持たずアツサワに向かうなどありえないのだが、それに自分が関わる想像はまったく出来ていなかった。

『私が、ですか』

『そうです。おそらく貴方が最適だ。近衛の長である貴方は、殿下の幼馴染みでもある』

『それは』

『私はシエラに選択を命じました。もし、シエラが殿下を助けようとするのなら、その手助けをすることがおそらく、救う道となりましよう。そして、シエラが殿下を殺そうとするのなら、近衛である貴方は、シエラを殺すことこそが最大の忠義となるでしょう』

どちらにしても、シエラの側にいるのが最善でしょうと、ウルスラは言う。

その言葉に、ザキの中でシエラの抱える選択とやらが、自身の主の生死に関わるものであることを認識する。

先ほどまで確かにそういう会話が繰り広げられていたし、言葉としては認識もしていたが、16歳の少女の行動が戦局に大きな影響を与えるというのは、何処か現実味がなかった。

だから自分は何も言わずに傍観していられたのかもしれないと今さ

らながら思った。

『貴方はシェラを見くびっておられるのか』

そんなザキの戸惑いなど容易く見破りウルスラはせせら笑う。
が、その笑いはすぐに立ち消え、笑みなど作っていなかった鋭い視線がザキへと向けられる。

『貴方は貴方のためにも、シェラとともに行かれるがよい』
『しかし』

『この王宮ならば、殿下の家臣である私が守りましょう』
『――！』

護衛に就くこと自体は問題ない。が、シャーンを離れることを躊躇ったザキに、危険極まりない男は、自分が引き受けるからそれを信じよと言ったのだ。

その時、ザキは疑い深い視線でウルスラを覗き込んだ。
ウルスラの表情は変わらない。

事実を告げているのか、騙そうとしているか、決してうかがえない状況の中、しばらく無言が続いた。

先に歩み寄ったのはウルスラの方で、彼は肩をすくめつつ1つだけ核心となる言葉をザキにさらした。

『確かに私は完全に殿下の側についたとは言いませんが、私がシェラの敵に回することは決してありません。だから、今は臣下としての役割を果たしますよ。それだけは信じなさい。貴方は、シェラとともに行くべきだ』

その時のウルスラの表情はひどく真剣なものだった。

そして、何よりもシェラの敵に回ることはないという彼の言葉は重かった。

その一言だけは信じられると思ったから、ザキは自身の部下とともにシェラに同行した。

シェラの方とは言えばあっさりとザキを受け入れた。最初、特に同行者のことは考えてなかったのだが、1人で向かうのはやはり心細いし、自分の境遇を考えれば監視をつけられるのも当然だと思った

からだ。どうせ見張られるのなら知っているザキの方がまだいい。クセルクシアの兵士達に護衛されているという違和感に、彼女のよく知る永和は滅んだのだということを今さらながら噛み締め、無意識に表情が険しいものとなっていた。

王宮からしばらくは人の往来が多いためさほど早く馬を走らせることは出来なかった。

シエラ達がそれを聞いたのは王宮を出て程なくしてのことだった。王宮前の広場を横目にゆっくりとした速さで馬を走らせているとやがて、シエラは城下の雰囲気異なるのに気づいた。

ザキ達は特に気にならないようだが、シャーンに生まれたシエラにとっては初めて見る城下のにぎやかさだった。

数日前、父エーベルトが処刑された場所には市場が立っている。時間が時間のため、既に店じまいを始めた露天も多い中、ひときわシエラの目を引いたのは、鮮やかな青が印象的な布売りだった。

青は、クセルクシアの色だ。

海を知らない永和の民にとって、クセルクシアの青は自らではつくり出せない色で、その布売りはクセルクシアの商人なのだろうと思った。

歩いている人々の中にもクセルクシア人らしき者が見つかる。

鎖国をしていたシャーンには国外からの往来はほとんどなかった。閉ざされた壁の向こうの脅威に怯えつつ、厳しい冬が年の半分ほど続くこの国の人々は貧しく、毎年、春を迎えたばかりのこの時期には食料が少なく、飢え死ぬ者もいた。

不意に視線をずらせば、生活用に引かれた水汲み場から程近い場所に小さな小さな人ばかりが見えた。

シエラがそちらの方を向いたのは音が聞こえたからだ。

彼女には馴染みのない拍子で、やはりよく知る音とは少し異なる、印象的な低音が響く。

「あの音は」

「オルですね」

無意識のつぶやきに少し弾んだ声でザキが応える。

ザキにとっては馴染んだ音だった。オルというのは豎琴の一種でクセルクシアの楽器だ。シエラが気づいた通り、低音に特徴があり、また、美しく塗られた枠に貝殻が埋め込まれている。

メサから流れてきた楽師はクセルクシアの海沿いの町に伝わる踊りの曲を奏でる。踊りという言葉通り楽しい曲調で、戦いに疲れたシャーンの人々を慰める。

楽師と一緒に旅をしてきた踊り子は、民を促し共に踊る。

シャーンの民が、笑い、踊っている。その姿にシエラは安堵するとともに痛みを覚える。

王は殺され王宮の主は変わった、それでも民の暮らしは変わらずある。寧ろ、王が死んだ方がよかったのかもしれないと思った自身を責めたいような気分になる。

永和はこの国を閉ざすだけで、民を豊かにすることが出来なかった。永和は、滅びるのは必然だった。

否定したい気持ちは確かにあったが、それはかなわないとシエラは知っていた。

偉大なる女王クレアツァーディアーナの威信のみを頼りに、400年の長きに渡って永和がこの大陸の中心に立っていたのは、不幸だった。

変革は必要だった。

シエラから父を奪い、彼女自身にも過酷な仕打ちを与えた男は、400年間誰も出来なかった責を投げた。少なくとも、今ここで踊る人々の笑顔は、にぎわう城下は、彼の覚悟をもって為されたものだ。悲しい、許せない、どうして、何故。

シエラの胸の内に負の感情がこみ上げてくる。

「姫？」

シエラは馬を止め、何かをこらえるように空を見上げる。

「どうして」

半分ほど陽が沈んだ空が彼女の頬をかすめる。

何故、夕陽もまた、変わらないのだろう。アシュタルテの神殿で1人見上げたのと変わらない空を残酷に思う。

自分もまた、過去の者として永和とともに消えてしまえばよかったのにと、心の片方で思う。そしてもう片方で、窮地に立たされるだろうジャルジエの姿を想像する。

変革は、あの男によって始まった。

永和には取り戻せなかったかつての栄華を、あの男ならつかむことが出来るのだろうか。

「あの男は、大宰相を殺した……」

すぐ後ろにいたザキさえが聞こえないほど小さな声でつぶやいたシエラは、振り切るように背に鞭を入れ、明るい音から逃げるように馬を走らせた。

2章 騙り13

「姫様」

「姫様、アヤ姫様」

不意に、耳に届いた名を聞き流そうとし、シエラははたとする。瞼の重みのままに閉じていた目を開き、すまなそうに見上げる。

「お加減はいかがですか」

「すまない」

心配そうにシエラを覗き込んでいる女官の名はヒロという。かつてエーベルト付の女官だった彼女は今回、クセルクシア軍の兵士に囲まれながらアツサワへと向かうシエラに従う唯一の侍女として彼女に同行している。

夕方にアツサワを出たシエラ達は、夜中近くになつて、アツサワまでの道のりを半分程いったあたりにある宿に立ち寄った。馬に餌をやる必要があつたし、これから夜通し馬を走らせる中、休息を取っておくためでもあつたが、何よりもシエラの疲労が大きく、予定よりも長い滞在を余儀なくされた。

「随分と、なまつたものね」

「それは仕方ないことでございましょう」

馬から降り、休息を取ろうとすると一気に疲労感が襲った。

ウルスラの元で学んでいた頃は半日ぐらいの騎馬などたいしたことではなかったのだが、2年間の神殿暮らしに、陥落してからはあの体たらくだ。更に一回り細くなった身体に馬の背の揺れはかなり辛い。夜明け前にはジャルジェ達の軍に追いつけないかと思っていたが、これでは到底無理だ。大体、シャーンを出たのが遅すぎる。と今さらながら悪態をつきなくなるが、ぐだぐだとしていたのはシエラ自身である。

多分、シエラが到着するより前に戦いは始まる。もし、シエラがユリスならば、下手な余裕を与えて策を巡らせる前に叩きにいく。

「こちらを」

「ああ、ありがとう」

間に合うだろうかと思いついた時、シェラの表情が翳った。それに気づいたヒロは絶妙なタイミングで用意してきたお茶を差し出す。

「で、どうなさるのですか、『アヤ姫様』」

敢えてシェラをアヤと呼び敬称をつける。確かにアヤはあのウルスラの娘で、『姫』だ。が、妾腹の彼女はそう呼ばれることを嫌がる。どこか彼女がウルスラの娘であることさえ知る者は多くない。

シェラは現在そのアヤ、というよりエランヴィアの姫を名乗っている。

筋書きはこうだ。

シャーン王宮内で永和の残党の噂を耳にしたルクレツィア王女は胸を痛め、これ以上の抵抗をやめるようにとの書状をしたため、腹心の女官であるエランヴィアの姫に託した。

内情を知る者なら何事かと笑い出しそうな話だが、先日のバルコニの一件から、ルクレツィアはシャーンにしていることになっているのだから仕方がない。そうしなければこれだけの数の近衛を疑われることなく連れ出すことは出来なかった。

どうするのかというヒロの問いかけにシェラは苦笑を返す。

ずっとアッサワまでの道のりを馬に揺られながら考えていた。時折ザキが声を掛けてくるのにも気づかない程に自身を追い込みながら、分らない、分らないと諦めを繰り返し、ようやく、どれだけ考えても答えは出ないのだろうと気づいた。

奇しくもそれは、ウルスラに選択を突きつけられた時、最初に答えたものと同じなのだが、今のシェラが抱えるのは少し異なる思いだ。どれ程冷静にジャルジエを見ようとしてもシェラにはやはり、エーベルトの処刑や、自分に対する辱めを忘れることなど出来ない。それを私情として完全に消し去されるほどにシェラは出来た人間ではない。

が、こうも思う。

あの男は卑劣だ、あれ程に卑劣な男が霸王に相応しいはずがない。そう断じる程にシエラはあの男のことが分かっているのか。今、こうして馬を走らせて、クセルクシア軍に追いついて、数言交わせば分かる程にこの問いは容易いものなのか、と。

反面で賞賛したい気持ちもある。無駄に続いた永和の治世を終わらせたのはあの男の功績だ。結果、新たな戦争が始まるかもしれないが、大陸の中心たるシャーンに他国の往来が増えれば、シャーンの民を富ますことが出来るかもしれない。先ほど城下を通り過ぎながら、シエラはその片鱗を見た。それまでを否定してはならないと思う。

何よりもシエラは、民衆に語りかける声を聞いた。

あの、男は。

「永和を見せてやると、言った」

「姫」

その時。

シエラの呟きをかき消すように、ザキが呼ぶ声が聞こえた。

「姫、そろそろ出られますか」

「はい」

シエラは思考を遮断されたことにさほど気にする素振りは見せず、冷めかけたお茶を飲み干し、立ち上がる。ヒロはシエラとザキが気にかけないほどに自然な動作で、空になった茶器を下げつつ、一歩下がりザキに場を譲る。

ヒロがした問いはザキも抱いていたものだった。

どうなさるつもりですか。

主君の窮地を案じる身としてはヒロよりもずっと切実な問いなのかもしれない。或いは、シエラなんて放り出してジャルジエの所に駆けつけたいと思っているかもしれない。

「すみません、随分長居をしてしまいましたね」

「姫」

ザキの声は硬い。

それは問いだ。

殺すと言ってもその細腕でどうやって殺すのか。
このこじれた状況でどうやって王女と引き合わせる事が出来るのか。

例え選んだとしても何が出来るのか。

その、力はあるのか。

多くのものを含んだ視線にシエラは背に冷たいものを感じる。

この手にいかほどの力があるか。

「多分もう、私は、選んでいるのだと思います」

シエラはザキの視線を断ち切り笑んでみせる。休息の場でも外套で身を隠したままだったシエラは、つくづくウルスラという男の抜け目のなさを感じる。

シエラにはさほどの力はない。

女の身にしては多少腕は立つが、それでもジャルジエなどから見れば戯言のようなものだろう。戦場での実戦経験もない。

けれど今、シエラには戦況を打破する力がある。

問いは、結局のところ容易い。

数の面でも地の利という面でもクセルクシア軍は窮地にある。

シエラが今、此処で足を止めれば多分、クセルクシア軍は敗れる。

別に自らを過大評価しているわけではなく、戦局が打破できる方法があるとすれば1つしかないと知っているからだ。

問いは、こう言葉を変えることが出来る。

お前は覚悟を決められるか否か、と。

シエラはやがて、自身の頭をすっぽりと覆っている外套に手を掛けた。

「私はクセルクシア大公が霸王足る者なのかどうかなど分かりません。そんなことを今、誰が決められると言つのです」

この解が気に入らないなら好きなだけ文句を言うがいいと胸の内で叫ぶ。が、その半面で、多分師は、シエラの解に不平を言うはずがないだろうと確信している。

選ぶということは、関わるということだ。

或いは父の願いはシエラが、永和なき世界から逃げることは許さないということだったのかもしれないとちらりと頭をかすめる。

否、もうなんだっていい。

どう解釈しようとも答えを持つ人は既になく、シエラはもう、一步を踏み出してしまったのだから。

（お父様…）

唇を噛み締め、ふるえる指先を胸の内で叱責しながら。一気に外套を後ろに引いた。

「姫？」

外套を脱ぎ捨て、その内に隠していた巫女装束を露にする。鎧を着ているため、身を飾る他の装飾具はただ1つを除いて他にない。その唯一の装飾具、左耳の緋の耳飾りが首筋でちりりと鳴った。シエラはゆっくりと口を開いた。

「ヒロ、私は誰だ」

感情を伴わない硬質な声音に思わず女官は腰を折った。

大宰相付きだった女官だ、問いに含まれた意味を正確に捉えたのだろう。

「はい、ルクレツィア王女様」

「姫？」

「近衛様、私に何の力があるとお思いか」

指先の動きすらたおやかに、緩く笑って見せたシエラにザキは息を呑む。

ザキはこの顔を知っている。

12階段の上にこの少女が現れた時、ザキは彼女をルクレツィアだと思っただけでなかった。

唯一無二の存在だと思った、あの顔だ。

「私には、クセルクシア大公を殺せません」

はつきりと告げた瞬間、シエラはそれが自分の選択だと認識をした。あの男が霸王かどうかなど分らない。

そんなものは誰にも分かるはずがない。

分かると思えば、それは未来だ。

ならば希望と言う名の一振りを下ろした者この大陸から奪ってはならない。

少なくとも今、こんな場所で、失われていい命ではない。

「故に、このルクレツィアが永和の残党を押さえます」

シエラは滑らかな口調で偽りを綴る。

さしたる力のないシエラにとって、志しを抱けば、その志が大きければ大きいほど、この力に頼るしかない。

「行きましようか、近衛様」

「ルクレツィア、王女？」

「近衛様が私をルクレツィア様と間違えられたのは、シルベスタ・ウッデツィーンの絵を見た者が多くないからです。同時にルクレツィア様が王宮内深くにいらっしゃるから、アシユタルテの巫女を王女と間違えた。それは近衛様だけではなく永和の民もです。あの方が表に出ない限り、私は偽ることが出来ます」

けれど自ら望んで偽るのは初めてです。そう言っただけシエラは苦笑を残し、踵を返す。

途中、後を追ってくるヒロに、1つの命令を下す。

深くうなずき了承の意を返したヒロは、一行に先立ち宿を出て行った。

歩き出したシエラは馬の側まで一度として後ろを振り返ろうとしなかった。

それを追いかけながら、亜麻色の髪が1つにまとめ上げられた後姿を見ながら、ウルスラに言われた言葉を噛み締める。

彼の言葉は正しい。

けれど、と思う。

同時に、真っ直ぐにのびた背が。

クセルクシアにとって、歓迎すべき解を選び取り歩き出した少女の肩はあまりに細く、痛ましく見えてならなかった。

2章 騙り13（後書き）

次話で久しぶりにあの方が出ると思います。
にしても、表題に追いつくまでこんなにかかるとは。

2章 騙り14（前書き）

ちよつと幕間的な話。

この国の人たちは皆、弱いです。

ただ、だから何も変えることができなかった、それが分かる程の聡明さがあるから辛い、そのあたりが書けてたらよいと思います。

2章 騙り14

アヤがアツサワに到着し、小さな民家から『地下』へと降りたのはちょうど、シエラ達一行が宿で休息を終えようとしていた頃だった。アツサワ行きを決めたシエラに対しアヤは最後まで反対をした。当然だ、あの男がしたことを思えば、シエラが関わることなどありえないと思っただし、そう、放っておけばあの男は死ぬと確信していたからだ。

もし、シエラが、王宮に留まっていたてもアヤはアツサワに向かっていただろう。が、それはユリス達に加担し、クセルクシア大公の息の根を止めるためである。

が、シエラは意思を変えることはなく、せめて同行しようとするれば、ウルスラによって別の命令が告げられた。

アツサワに赴きルクレイシア様をお守りしろ、との言葉をアヤは嫌々ながらも受け入れた。確かに深層の王女の護衛にはアヤが最も適役だったし、逆にシエラは本来、そういうものを必要とする人ではない。

何よりもウルスラの命令に逆らうことなど出来ようはずもなく、ヒ口とともにシエラの着替えを手伝った後、先立ってシャーンを旅立った。

主を失った永和軍は現在、すべてユリスⅡセトルに従っている状態で、その数は5000弱。その内の3割程はエトナ山の麓、すなわちクセルクシアの間者に確認できる場所に野営をはっているが、残りの約7割は未だ『地下』に潜んでいる。

あのエーベルトⅡウッディーンが大宰相が在位中を通して手間隙を惜しまず建設に関わったそこは、力なき永和から考えれば異様とも言える規模を誇り、3000以上の者が潜むに十分な広さを持っている。また、地上から『地下』への階段は巧妙で、そう簡単にクセルクシアが把握できるようなものではない。

長く続く階段を降り、更に幾重にも重なる迷路のような道を一度として立ち止まることなくアヤは進んだ。段々と空間は広がっていき、やがて、地下の中枢部へとたどり着く。途中、何度か見張りの兵士が通り縋ったが、顔を見るなり腰を折り道を開けていく。アヤはそれを当然のものとして受け入れ、早足で目的地へと向かう。

ウルスラの命令はもう1つあった。

4人の兵士が守っている大きな木の扉を開けさせ、先へと続く階段を下りていく。太陽の光が届かない場所は明かりを置いており、いつでも十分ではない。が、階段から先は更に明かりが少なくなり、手持ちの？燭だけが頼りになる。

階段を降りた後にあつたのは細い一本道だ。その手前には鉄格子の扉があり2人の兵士が警備に当たっている。

「これは、アヤ様」

「セトル將軍はこちらですか？」

「はい」

開けなさいという命令を含んだ言葉に兵士は腰にぶら下げていた鍵の束を取り上げ鉄格子を開ける。するりと中に入ったアヤの視界には幾つかの牢が見える。

彼女は決してこの牢に用があつたわけではない。『地下』には詳しい彼女にしても初めてこの場所に足を踏み入れたのは、ユリス・セトルがいると聞いたからだ。

牢には何人かの捕虜が捕らわれていた。

ユリスは一体、何が目的でこんな場所に自ら足を向けたのか。

拷問して情報を得るため、ではない。そんなことをしてまで捕虜達から聞きたいと思う情報はなかった。捕らえたのただ、こちら側の情報が流出するのを食い止めるためだ。だから、敗走する大半の兵士達を見逃し、上官と見られる者達のみ捕らえた。

彼らを餌に取引しようとも考えていない。

ならば足手まといになる彼らを何故始末しないのか。周囲からそのような声が上がっているが、ユリスは拒み、部下に食事を運ばせている。

そうしながらユリスは、戦いの後一度として捕虜達に会おうとはせず、存在すら忘れたように行動していた。

が、この日。

夕刻、クセルクシア軍がアツサワに向けて出立をしたという報告を聞いた彼は、戦いの準備を命じた後、この場を訪れた。
何故か。

「ヴェルナー」イリアス將軍でいらつしやいますね」

一番奥の牢の前で立ち止まり、鉄格子の向こうにいる男に話しかける。囚人用の粗末な衣服を着た、クセルクシアの將軍であるの男がゆっくりとこちら側を向いた時、ユリスは思わず目を逸らした。

男は随分と落ち着いた表情をしていた。決して敵対したユリスを責めるような言葉を発したわけではない、が、何故かユリスには、自分を糾弾しているように思えたのだ。

誰がユリスを許さないというのか。

ユリスはただ、亡き大宰相に命じられ、残された永和軍を束ねただけだ。

ただ。

「貴方は？」

「永和の将、ユリス」セトルと申します。国は、貴方のご主君に滅ぼされましたが」

「が、残党をまとめた貴方は、我らの軍を破った」

情けないことにユリスの声はふるえていた。実際には聞いている者には気づかない程度のもだったが、ユリス自身が自滅をした。

「ようやく憎きクセルクシアの将を殺しにこられたのか」

狼狽するユリスに、ヴェルナーの方は気づかれない程度に瞠目する。此処ではユリスの方が勝者で、ヴェルナーは敗者だ。が、牢の内から見上げるヴェルナーには、鉄格子の向こうに立つ敵將の胸の内の

揺れが分かるような気がした。

「或いは、私に大公殿下への取り成しを頼みたいのか」

「……」

努めて淡々とした口調で告げたヴェルナーは椅子代わり使っていた簡素な寝台から立ち上がり、真っ直ぐにユリスを見る。

彼は決してユリスを責めようとしたわけではない。寧ろ、国を失いながら残党をまとめ、数の差はあったとは言え勝利し、敵軍、否、勝者の將軍を捕らえたのだから賞賛していると言ってもいい。

が、ヴェルナーが目の中の男を恐れなかったのは、この男が『ここまで』だと思ったからだ。

それは決してユリスを卑下したわけではない。

所詮、ヴェルナーとて同類だ。いや、自分であれば主君を失って残党を取りまとめることすら出来まい。あの男ならばやるかもしれないと、父ほど年の離れた上官を思い出し、胸の内で笑う。

余裕なのはおそらく、ユリスが自分を殺さないと分かっているからだろう。自分だけではない、部下の誰も殺されまい。

目の前の男に殺せるはずがない。

「セトル將軍、私が大公殿下に口添えいたしましょう。そろそろ降伏されてはいかがか」

「イリアス、將軍」

「或いは、」

「セトル將軍……」

貴方にはこの大陸を統べる覚悟かありか。そう、問おうとしたヴェルナーの声はアヤによって遮られる。

「このような場所におられましたか」

「アヤ殿」

ヴェルナーの言葉に明らかに動揺していたユリスは、現れた味方は内心ほっと息をついた。

「いかなされた。貴方はシャーンに戻られていたはず」

「はい」

アヤにはルクレツィアの警備につく前にユリスに伝えるべき言葉があった。そのためこの場までやってきたのだが、まさか敵の將軍の目の前で告げるわけにもいかず、此処を出るよう促す。

「すまない、イリアス將軍」

会話を途中で断ち切ることになったのに謝罪を告げ、ユリスはアヤとともにその場を辞す。

ヴェルナーは特に応えなかった。

再び寝台へと戻り、腰を下ろす。

ユリスの答えを聞きたいような気もしたが、聞かずとも構わないとも思った。

所詮は凡庸な答えに過ぎないのだろう。

アヤとともに牢から出たユリスは、自身の執務用の机がある場所まで促した。中にいた部下達にしばらく下がっているよう告げ、彼女の言葉を待つ。

「クセルクシア軍約2000が明日にはこちらに到達するだろうことは既にご存知でしょう」

「ああ、皆に戦闘の準備をさせている」

「ついては、ウルスラ様より伝言を受けております」

ウルスラのもう1つの命令、ユリスへの伝言を告げるアヤは心底不満そうな表情をしていた。

「アヤ殿？」

齒切れも悪い。

普段のはっきりとした物言いからはあまり想像出来ない言葉運びに、ユリスは怪訝そうな表情を浮かべる。

「何か、言にくいことか」

「いえ、納得していないだけです」

アヤはしばらくの沈黙の後、やはり言いくそくに、それでも命令を果たすべく口を開いた。

「セトル將軍におかれましては、必ずクセルクシア大公の首を上げるようにと」

「それは」

その言葉にユリスの表情が翳る。

確かにユリスはそのため此処にいる。が、同時に恐れている。

本当に、攻めてくる兵の数が2000だというのならば、こちらに勝機がないわけではない。が、それを為してどうするというのか。

永和は滅んだ。では、その滅ぼした者を覇王というのではないのか。

「アヤ殿」

「將軍」

アヤの声がかすれた。

本当に、本当に言いたくはないのだ。

もう、そつとしておいて欲しいのだ。

が、ウルスラがそれを求めた時、それをシエラが受け入れた時、アヤにはそうなるだろうことが分かった。

本当は、ルクレツィアを焚きつけて、今のこの瞬間、すべてを収めよと叫びたいのが本心だが、自分はそのためにはるばるとやってきたのではないかとも思ったが、彼女にそれを求めるのは酷というものだ。

あのシエラと瓜二つと言われる、けれどシエラよりも美しい外見を持つ高貴な人は、王宮深い場所で大切に大切に、傷の一筋すらも出さないようにと育てられた。

ルカ以外の女官にはほとんど会話すらしない人が、戦場に現れることなど出来るはずもない。

それでもあの人こそが予言された女神、という反論を胸の半分で訴えながら、アヤは最後のよすがとばかりに問うた。

「亡き大宰相様の最期の命が、あの永和殺しを討ち果たし予言の成就を、であつたとすれば將軍は、お受けになりますか」

その瞬間、ユリスの表情が蒼白した。

まさかとつばやき、アヤを覗き込む。

「大宰相はそこまで、私を買っておられたわけではないでしょう」

「ですが、貴方様は大宰相様が婿にと望まれたほどの方」

「アヤ殿……！」

聞きたくないとばかりにユリスは強い口調でアヤの名を呼んだ。

彼は自覚している。

だからこそ、ヴェルナーの言葉に動揺し、アヤの言葉を遮る。胸の何処かで彼女の告げた言葉は真意ではないと知りながら、万が一という思いが彼を畏怖させる。

「戯れはやめられよ」

「ユリス將軍！」

「私はそのような器ではない……！」

ついにはユリスは机に肘をつき、頭を抱える。それを他人事のように見ながらアヤは告げる。

シエラのことを思う。

自らの望みではないとは言え、アッサワ行きを受け入れたシエラは、あの聡明な人ならば最善な選択をするだろう。

何故ウルスラではなく、エーベルトでもなく、あの、残酷な男でなければならなかったのか。

アヤは、シエラの同行者としてアヤではなくヒロを選んだウルスラの冷徹さを恨む。

アヤならば言ったかもしれない。

アッサワになど行くことはない、力づくで引き止めたかもしれない。

たやすく見破られていたのだろう。

「ご心配召されますな、シエラ様がこちらに向かっておられます」
無感情な声で告げられるのを聞き、ユリスははっと顔を上げる。

「セトル將軍は力の限り戦われるだけでいい。そして、シエラ様がこちらに到着された時には、すべてシエラ様のお心に従われよと。ウルスラ様の命令でございます」

アヤが責めるように見ているにも関わらず、ユリスはほっとした。

1 回りも年若い許婚が来ると聞いた時、彼女こそがこの後始末を引き受けたのだと分かった瞬間、ユリスの脳裏には確かにそのような役割を負うにはあまりにもあどけない少女の姿が浮かんだのに、自分ではないという安堵の方が先立った。

ユリスは笑った。

自分がどうしようもなく滑稽だと思った。

アヤはそれ以上何も言わなかった。

何を言ったとて、案じたとて、結局はアヤもまた、シェラを守ることは出来ないだから。

ああ、と思う。

2 人、同時に。

何故、今なのか。

400 年もあったのだ、何故よりもよって今、永和が滅びなければならなかったのかと。

予言された女神が生まれたからと解を出しながら、まだ問いは続く。もう決して、あの、変革を望み滅びの日を待つ、平穏な日々は戻らない。

2章 騙り15

「メイミ、メイミ」

多くの布で隔たれた空間に鈴のような声が鳴る。

さして広い空間ではない、が、『地下』という場所であることを考えれば十分な広さと中の調度は、他とは際立っている。

長椅子に座るルクレツィアは、側に置かれたテーブルから焼き菓子をとり上げ、それをかざす。そうしてにつこりと笑みを浮かべれば、布と布の間に隠れていたメイミ、彼女のかわいがる猫は顔を出す。

「こちらにいらっしゃい」

焼き菓子を2つに割りその半分を自らの口に運ぶ。そうしている間にメイミはルクレツィアの膝、彼女の定位置に戻り、もう半分をねだる。

扉を隔てた向こうでは、明日起こるだろう戦いのため、兵士達は皆準備にぬかりはないというのに、この場所だけはまるで、シャーンが陥落した日より前の、王宮のようだ。

実際にルクレツィアの座る長椅子も、寝台も、後宮内にあった彼女の部屋に置かれていたものと同じ家具師が作ったものである。そして彼女が今来ている衣装も、気に入りの仕立て屋が作った、王女という名に相応しい、手の込んだものだった。

ルクレツィアは猫の白い毛を撫でつつ、ほっと息をついた。

分厚い扉で隔てられているとは言え、扉の外の喧騒がまったく伝わってこないわけではなかった。

午後からルカが外していたこともあり、一度だけ長椅子から立ち上がったルクレツィアは布の向こう側にいた女官達の会話に耳を傾けた。

『では、クセルクシア軍が』

『將軍様達が先ほど、急いで集まってらっしゃるのを見たもの』

『どうなるのかしら』

『この前の戦いで勝利したのですもの、今回だって…！』

『ああでも、クセルクシアの大公様というのはどのような方なのかしら』

噂話は次第に、シャーンを陥落させたクセルクシアの大公の話題へと変わっていった。

年は23だとか、愚君であった父親を殺して大公位についたのだとか、よく知られたばかりなのだが、そんな事でさえルクレツィアにとっては初めて聞くものだった。

後宮の奥深くで大切に育てられたルクレツィアは、その外に出たことは一度もない。彼女の知る外の話はルカや他の数人の女官達が語るものしかない。物心がついてから、父王の他はエーベルトやウルスラのような、重臣のごく一部しか、異性と接したこともない。

そんな彼女にとって、霸王と女神の物語はいつも胸の中の大切な場所に抱く、夢物語のようなものだった。

霸王は女神を望み、女神もまた、霸王を望むだろう。

ルクレツィアはいつもその日を待っていた。

その道程にあるだろう、自らの父の死ですらもどうでもよかった。

否、ルクレツィアは、1日も早くと望んでさえいた。

「お父様は、嫌い」

歌うように告げる。だからこそ背筋が凍るほどの冷ややかさを持っているのだが、幸運なことにそれを聞いた者はルカだけだった。

「ルクレツィア様、お待たせしました」

「ルカ！」

布と布の間をぬって入ってきた気に入りの女官に、ルクレツィアはぱつと花のような笑みを浮かべる。

ルカは手に大きな箱を持っていた。それはルクレツィアが探してきて欲しいと頼んだもので、ルカがしばらく主人の側を離れていたのはこのためだった。

「ルクレツィア様はこれがお好きですものね」

「そうよ」

嬉しそうにルクレツィアが箱を開けると、中には淡い青色の衣装が入っている。彼女の瞳の色と似た色彩をしたそれはルクレツィアの一番のお気に入り、王宮から落ち延びる際にも持ってきたものである。

「ジャルジエ様は気に入ってくださいるかしら」

「明日はこれに合うよう髪を結い上げましょう」

「ありがとう、ルカ！」

ルクレツィアはルカに抱きつき、その反動でルカの身体が少し揺れる。

満面の笑みから視線をずらしたルカは、複雑な思いで柔らかな青い生地を見下ろす。

シャーンを陥落させた者こそが霸王だと信じ、単純にその人の来訪を心待ちにしている人物など、此処にはルクレツィアしかない。

シルベスタの予言により霸王は女神を望む。だからクセルクシア大公はルクレツィアを求める。

が、それがすなわちルクレツィアが考えているような、夢物語であるとは言えない。確かにクセルクシア大公は女神を欲しているのだろう。が、その故に彼が為した愚行はルカの元にも届いている。

それを聞いた時は、あの大宰相に拍手喝采でも送りたい気持ちだった。

ルクレツィアの豊かな金系の一房さえも傷つけてはならない。至高の存在だからこそ民衆に顔を晒すことなく大切に育てられるとともに、シエラという身代わりが作られたのだ。

望まぬ仕打ちはすべて、あの娘こそが受けるべきもの。

もし、クセルクシア大公がルクレツィアを傷つける存在というのなら、この方の視界に入る前に切り捨てよ。そう、胸の内でシエラに命じ、ルクレツィアを抱きしめた。

その日の夕方近く、アッサワからは大分手前の場所で陣を張ったクセルクシア軍は、先日のアッサワ戦を生き残った者に対し行った聴取を行うとともに、エトナ山、対ラステイニア国境、対イシス国境へと送り込んでいた間者の持ち帰る情報の分析を始めた。

いずれもクセルクシア軍より数が多いことは承知している。知りたいはエトナ山近くでの永和の残党の布陣状況であり、2大国の本気度である。

特に、南と西の動きは重要だった。彼らが今ここで事を構える気がないのであれば、永和の残党のためにより多くの兵士を裂ける。また、ヤーフェに任せる軍について南と西、どちらにより多く配置するかというのも決めなければならない。

永和の残党の状況は、実際に戦いに出た者達に聞いても、状況が把握できるものではなかった。

その瞬間までアッサワは静かだった。が、何処からか大軍が湧き出て、ヴェルナー・イリアス以下主だった者は陣を組むことさえ出来ず、捕らわれた、のだという。

彼らは何処に潜んでいた？

そして今、何処でこちらの動きを見ている？

奴等の第一の目的は王女の保護だと考えていいのか。彼らはシルベスタの予言に殉じる気か、或いは、ただただ主君の命を奪った者への怨恨を抱く者達が結集し、王女を旗印としているのか。

そして、ラステイニアとイシス、だ。

イシスとの国境に放っていた間者が意外な情報を持ち帰ってきた。

曰く、イシス軍の主力は西王家である、と。

西王家は別名、イシスの犬、と呼ばれる。イシス領の北側の砂漠地帯には小さな部族国家が乱立し、ある程度独立した国家形態を維持している。時にイシスの敵となり、時に忠実なる下僕ともなる彼らをまとめる者を西王家といい、現在の西王は後者に該当する。

イシスの内情はなかなかクセルクシアまで届くものではなかったが、戦争が始まれば前線に立ち、勇敢に戦う褐色の男達の集団は、ジャ

ルジエの記憶にも色濃く残っている。

「イシスは本気、と考えるべきか」

「いや、報告によると、随分と軽装備のようにも考えられるが」

「しかし、侮りがたい」

ヤーフェ以下、主だった者が議論しているのを中心で聞きながら、ジャルジエは腕を組み、思案する。

永和の残党、ラストイニア、イシス、と順に思い浮かべていく。

やはり3箇所に送り込むには人が圧倒的に足りない。しかもいずれもの思惑が判断し切れない。

或いは、もう少し人が動かせる状況になるまで待った方がいいのか。昨日の内にメサへと送った増軍の命令がどの位で実現するかを算段する。

それなりの数を揃えようと思えば1週間は掛かる。その間、3軍ともに動かないと考えるのは、絵空事だろう。

何よりも、永和の残党をこれ以上自由におくわけにはいかない。彼らがもし、本物のルクレツィア王女を表に出し、こちらが実は彼女を手に入っていないということが知れば、厄介な事になる。

民衆は女神の手にする者を霸王と呼ぶ。

彼らが裏で南や西と組んだりすれば、それこそクセルクシアは劣勢となる。

が、彼らがまだ、手を組んでいないと言えるか？

ジャルジエの背をぞわりと冷たいものが駆け抜ける。

その時、思い浮かべたのは他でもない、ジャルジエが命を奪ったエーベルト＝ウツディーンの姿だった。

既にこの世にはいないあの男が或いは、これだけの状況を用意した上でクセルクシアの餌食になったのではないかと想像する。

否定はできない。

ウルスラでさえ敵か味方が知れない。

「いや、あの男は」

議論に耳を傾けつつ、自らの思考に意識を向けていたジャルジエの

口から思わず声が漏れる。

が、あまりに小さなつぶやきは家臣達の注目を集めるまでにはならない。

もし、エーベルトが、今のこの状況を用意したのだとして。

あの男の望みは何だ？

あの時、うまく立ち回ればあの男は生き延びただろう。へつらい臣下の礼でも取ってくればおそらく、ジャルジエは優秀な宰相を手にしただろう。

が、あの男はそうしなかった。

ジャルジエを激高させ、その場で切り捨てられようとさえ思える。

自分の死と引き換えにあの男は何かを遺そうとしたのだろうか。

永和の至宝たるルクレツィア、あの男はルクレツィアに自由を残し、自身の娘であるシエラをジャルジエの元に送り込んだ。

ルクレツィアに瓜二つだというあの娘は、あの男が選んだ、彼の後継だとウルスラが言っていた。

あのウルスラが裏切らないとまで言い切ったあの偽の娘は何故、ジャルジエの元に着たのか。

見極めるため、という。

が、いかに優秀であつても16歳の少女に、父親の死を突きつけられた直後に冷静にあれというのはあまりに酷だ。

思考が空回りする。

寧ろ、シャーンが陥落してからの方が追い詰められ、不可解さばかりが頭を支配する。敗北が紙一重の場所に待ち構えているような状況と相俟って、言いようのない恐怖心が込み上げてくる。

与えられるのは、死か。

女神から与えられるのは祝福ではなく鉄槌か。

恐怖心は予言に対する畏怖を生んだ。

ただ利用するだけの存在と割り切っていたはずの女の影がジャルジエの脳裏を侵食した。

瞳の色だけが違うのだという、シエラと同じ顔立ちの娘を思い浮か

べる。

今さらながらに予言というものの重みを実感した、その時、ジャルジエ達のいたテントに来客が訪れた。

先に中へと入りそれを伝える兵士にジャルジエは思わず怪訝そうな表情を浮かべた。

他の者達も同様だ。

シャーンからわざわざ追いかけてきたというのは、女だった。

「ヒロと申します」

長い髪を1つに纏め、簡略的なものであったが軍服を着てやってきた彼女は確か、シエラについていた女官の1人だ。

確か、元は大宰相付きの女官だったはず。

また、エーベルト・ウツデーンか。

そう思わず考えた時、敗者の側であるはずの女が涼やかに笑う。まるで、今のジャルジエの状況をあざ笑うように。

この瞬間さえもあの男の策略のままなのだとでもいうように。

「何ゆえ、女官がこんな場所にやってきた」

「忠告です」

迷宮に突き落とすかのように、現れた女は告げる。

「貴方がこの戦いに勝つことを望むのであれば、1秒でも長くこの戦いを長引かせることです」

「どういうことだ」

「言葉の通り、と」

印象的な紫の双眸がまたたく。

ヒロはシエラに頼まれごとをした。それを請け負ったからこそここまでやって来たはずだというのに、今は亡き大宰相の女官でもあった彼女は、ジャルジエの立場を更に追い込もうとする。

野営をしているクセルクシア軍を足止めしておいて欲しい、それがシエラの頼みだった。

シエラの名とともにそれを告げればおそらく、ジャルジエの行動は半々というところだっただろう。

言葉を受け入れるか、或いは、逆にシエラまで戦場に巻き込む気はないと先を急ぐか。後者の方が少し強いかもしれないと思いつつ、ヒロは前者の解をジャルジエから奪った。

すなわち、沈黙を。

当然だ、彼女の主人は未だ、エーベルト・ウツディーンに他ならない。クセルクシアの手に落ちた彼の望みは、始まりだ。だからこそヒロは何も告げずただ、シエラが続けた言葉に従う。

ジャルジエが頼みを確実に聞き入れるとは期待していなかったシエラは、こうも言った。

もし、足止め出来ないというのなら、クセルクシア大公に力を貸すように、と。

軽い挑発の言葉の後にヒロは、道案内といたしましよと続けた。その言葉に周囲がざわめく。当然だ、元エーベルト付きの女官が突然やってきてそんなことを言ったところで、疑いばかりが生じるだろう。罠にはめるためにやってきたと言われた方がよほど納得できる。

ざわめきはヒロを罵るようなものに変化していった。

この女は敵だ、切り捨てよ。

それらの言葉にも彼女は動じることなく、ただ、ジャルジエだけを見る。

ジャルジエは家臣の言葉に応じることなく、やはり無言のまま、ひたりと彼女を見据える。

真意を探ろうとする容赦のない視線だ。

次の瞬間剣が抜かれ、切り捨てられるかもしれない。そんな恐怖を感じながら言葉を待つヒロに、やがて問いが向けられる。

「そなた、エランヴィア殿の命でここまで来たのか」

「いいえ」

「では」

「シエラ姫様でございます」

「シエラ？」

名が告げられた瞬間、ジャルジェは双眸をまたたかせた。

2章 騙り15（後書き）

まさかまだ引つ張るとは自分でも想像しませんでした。
2章は20話くらいの予定です。

2章 騙り16

ヒロが発した名は意外なものだった。

そこにどんな意図があるにせよ、出た名がウルスラかエーベルトであれば、ジャルジエは驚かなかっただろう。

刹那、無理に封じていたものがあふれ出るように、容赦なく傷つけた娘の姿が思い出された。

あの娘は傷つき、壊れた。

けれど、アツサワでの反乱という言葉に自我を取り戻した彼女に対し、ジャルジエは望んだ。

欲しいと思ったのは多分、ウルスラの言葉があつてこそそのものだろう。

エーベルト・ウッデインが選んだ次代の大宰相であることを教えた男は、その娘が側にいる限り裏切らないとも言った。

エーベルトを殺したことは今もジャルジエの中に苦く残る。だからこそウルスラの言葉は彼を翻弄した。

しかもあの娘はエーベルトの忘れ形見でもある。

結局、彼女からの返事を聞くことなくシャーンを出立したジャルジエは、行軍の中も何度か彼女のことを思い出した。そして最後、らしくもなく必死に望んだ自身を恥じた。

ウルスラの言葉のすべてが偽りだとは思わない。が、すべて真実でもあるまい。

少なくともジャルジエが知るシエラという人物は、弱い。

王女の身代わりとなりジャルジエに短剣を向けてきた覚悟は認めよう。

が、それは無謀ともいう。

一層のこと神殿を逃げ出し、父親の菩提を弔っていた方が傷口を広げずとも済んだのではないか。父の言葉を遺言にしまった、自身の非道に対する後ろめたさの反面で、そんなことを思う。

エーベルトに対する後悔をウルスラに利用されたのではないか。幾度となく生じる迷いを振り切りながら、ジャルジエは軍を率いてきた。

とにかく今は困難な戦局を乗り切ることと考えろと自身に命じた。ウルスラが言ったように秀でた才覚を持っているのかもしれない。が、その才能は今のジャルジエの窮地を救う糧とはならない。そう念じ、封じたというのに、突然現れた女は何故今、シエラの名を出してきたのか。

ウルスラにまた、翻弄されているのではないかと疑いながらも、話を聞くべく自身の天幕へと促した。

ジャルジエが場を変えたのは、シエラという存在を周囲に知られるわけにはいかなかったからだ。

ヤーフェ以下、事実を知っている者もいる。が、クセルクシアの多くの者がシエラこそがルクレツィアだと思っている。そして、ジャルジエを女神を手にしたのだと信じている。

その女神こそが牙を剥き、だからこそ今回の行軍があるのだが、今、それを伝えて士気を落とすことはない。

ヒ口を連れて自身の天幕に戻ったジャルジエは人払いをし彼女に座るよう促す。自分の方は簡易な寝台に腰を下ろす。一夜の行軍に大した物を持つてくる必要もなく、ジャルジエの天幕と言っても、物は最小限である。

「シエラが、と言ったな」

「はい」

最初に口を開いたのはジャルジエの方だった。

椅子に座ると同時に声をかけられたヒ口は視線を上げ、固まる。

怒りか、諦めか。

そんな感情を含んだ視線が向けられていたことに驚く。否、驚いたのはその、強さだ。が、そんなものは億尾にも出さず、ヒ口は次の

言葉を待った。

「エランヴィアは何を企んでいる」

やがて、苦い口調で告げられた言葉はやはり、ヒロが予想した範疇のものだった。確かにシエラの名を出しても安易には信じられまい。今ここで、懸命に説明したところで無駄だと分かっている。

それでも、ヒロに命じたのはシエラだ。そしてヒロは、目の前の男に嘘をつく気はなかった。

「何故、エランヴィア様だと思われませんか」

「或いは、ウツデインか」

「だから、何故」

「何故、と？」

間髪置かず返された問いにジャルジエは表情をしかめた。疑念を抱くのを責めるような声に違和感を覚えつつも、うまく言い返す言葉を思いつかない。

否、次に発するだろう言葉は持っていた。

「あの娘は積極的にこの戦いに関わろうとはすまい」

「その問いにも何故、と問いましょう」

やはり問いを返すヒロに、ジャルジエの頭の中で何かを警戒する音が聞こえる。

あの、娘は。

再びジャルジエの敵に回るためにこの女を送ってきたのだろうか。ありえないという9割の思考の片隅で、まさかという言葉がかすめる。

ウルスラの言葉は偽りではなく、彼女こそが次代の大宰相と言われ、永和を。

託された存在、だとして。

彼女は。

ジャルジエをただの永和殺しに過ぎないと断じたのだろうか。胸がざわめいた。

自分は、ウルスラの言葉を信じる気持ちの方が大きいのだと今さら

ながら自覚する。

弱い、弱い、まだ少女としか表現できないシエラを、ウツディーンの忘れ形見を、自分は切実に欲している。

或いは、これから向かう先にいるのだろう、ルクレツィアその人を欲する思いよりも大きいかもしれない、今は。

出来ることならば再び、彼女に剣を向けられる日は訪れないで欲しいと願っている。

「あの娘はお前に、俺を食い止めよと命じたか」

「殿下？」

「霸王でもない男に女神を渡すなど、命じたか」

「貴方は、霸王ではないと認めるのですか」

「お前……！」

初めて発せられた謎かけではない、けれど辛辣な問いかけに、ジヤルジエの頭に血が昇る。思わず、ヒロの腕をひねり上げようと寸前のところで留まる。

ヒロは唇を緩め、わずかながらも肩を揺らした。

首筋に剣を突きつけられるような緊張感を抱きながら形ばかりといえども笑みを作った自分を褒めてやりたい気がする。

目の前の男は、切りつけてくるだろうか。

これ以上苛立たせてはならないと警戒しつつ、目の前の男の反応をもう少し見たいと思う。

この男は霸王たる者か否か。

シエラは思考を放棄し完全に放り出したからこそ、1つの選択をした。

その選択が正しいものとなるかどうかはこの男に掛かっている。自分ならどんな選択をしたかと思ひ浮かべようとする。

「『エランヴィア様』は私に、アツサワまでの道案内と、セトル將軍以下永和軍についての情報を与えるよう命じられました」

やはり、自分もまた、勢いのままに殺すことは出来ないだろう。が、同時に、自ら戦場に向かおうとも思わなかっただろう。そもそも、

そんな選択が自分に突きつけられるとも思わないが。

ヒロは胸の内で苦笑をし、矛を収めた。偽りを告げればジャルジェは納得をする。内では疑念を抱いたままかもしれないが、少なくとも表立って更なる追求はしてこない。

「今さらエランヴィアが、と言うのか」

「少しは信じられましたか」

にこりと笑ったヒロの目をジャルジェは怪訝そうに覗き込む。

自分はこの男に味方したいのか、主君の敵を取りたいのか。どちらにしてもシエラの命を受けた以上、それに従うまでなのだが、こんな風にわざと煽るような言い方をしてしまうのは、ほんの少しでも傷つけてやりたいと思っているからなのかもしれない。

「私を罠にはめるために来たのではないか」

「そうかもしれません。ならば、此处で打ち捨てられますか？」

淡々とした言葉が紡ぐヒロの無表情にあるかもしれない綻びを探す。ヒロがウルスラの名を出し、翻したことは、逆に彼女の先の言葉こそが真実なのかもしれないという迷いを与える。

が、シエラだと思ったところで分らない。

ウルスラ同様、シエラとてジャルジェの敵に回るかもしれない。寧ろ、そちらの方が可能性は高い。が、ジャルジェの言葉に対する答えがこのヒロの存在で、彼女が手を貸してくれたのかもしれないというこの上なく都合のよい考えも捨て切れない。

もう一度問いただしてみようとも考えたが、そうして言葉を得たところで自分はそのまま受け入れることが出来ないだろうと、ジャルジェは思った。

聞いたところで無駄だ。

ならば聞かずともよい、そう結論づけ、彼女の問いを拒み、同時に道案内としての彼女を受け入れた。

言葉の応酬に緊張していたらしい、互いがほぼ同じタイミングで肩の力を抜いた。それに思わず笑みを浮かべたヒロに対して、ジャルジェは幾分軽い口調で問うた。

「お前は、大宰相付だったらしいな」

「はい」

「では、ウツディーンから聞いたことがあるか」

本当にシエラは彼の選んだ次代の宰相だったのか。問いかけにヒロは一度まばたきをする。一時、目が大きく見開かれ、驚きとまではいかない、けれど何かに思い当たったような表情を浮かべた。

「エランヴィア様から聞かれたのですか」

「知っているのか」

「いえ」

ヒロは首を振る。事実、そういう話をエーベルトとしたことはない。ただ、ジャルジェの言葉を否定もしない。

「聞いたことはありませんが、エランヴィア様がとりわけ目を掛けられておられたのは確かです。それと、18になれば神殿から戻り、文官として出仕される予定、という話は聞いたことがあります」

「しかし」

まるで、ウルスラの言葉を裏付けけるかのような言葉に、ジャルジェは言葉を詰まらせる。

その様子にヒロは笑った。

まさかというジャルジェの反応は驚くべきものではない。

彼は知らないのだ。

エーベルト付きの女官として神殿の祭事の末席についたことのあるヒロは、その中心に立った巫女姫を遠く、見上げたことが幾度かある。

優美な曲線を描く剣が白い手に握られ宙に弧を描く。その軌跡をたどった緋の双眸が元の場所に帰り、真っ直ぐに前を向いた時、何処からともなくため息がこぼれた。

あの姿を知っていれば、目の前の男は同じ問いをしたらどうか。

「殿下、気になられるならもう一度、姫様とお会いになられたらよいのです」

「お前」

「この戦いを生き抜けばよいだけのことです」

難しいことをさも簡単なことのように言っただけヒロは笑んだ。一瞬言葉を失ったジャルジェは苦い表情を浮かべたが、彼女の言葉の通りではある。

気になるのなら、自分で見て判断すればいい。伝聞ばかりを増やしたところで、根幹の疑念が解消できるはずもない。簡単な結論だ。

「ヒロといったか。では、力を貸せ」

同時に、目の前の女がどう言ったところで、彼女がシェラの命を受けたのか、他の者の命を受けたのかもまた、分からない。

敵となるか味方となるかも、今この場で切り捨てるべきか協力を仰ぐべきかも定かではない。

ジャルジェの目的は、永和の残党を降伏させ、予言された女神を手中に収めることにある。また、片方で南と西の動きにも目を配らなければならぬ。

「お前、アッサワには詳しいのか」

「幾らかは」

生きてシャーンに戻る。

そのために1つ選択をする。

ジャルジェの問いかけにヒロは応じる。

自身の天幕から外へと顔を出したジャルジェは、周囲を警備していた兵士にヤーフェ以下、主だった者の集合を命じた。

彼女がやってきたのはシェラの命を受けてのもので彼女が力を貸してくれた、あり得ないと思いつつも、それが事実であればいい。

生きて戻り、もう一度会いたいこの時、切に望んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6529m/>

フィレンジア = セラ大陸史 ~ 暁を乞う者 ~

2011年9月18日11時24分発行